

736
M 736 九

緒言

国会
7.3.4
書館

『早稲田文學』多年つとめて徳川文學の研究を先づき、近世小説家の傳を掲げたる、少からず、曉霞子は曲亭馬琴が生涯を叙し、福笑門子は上田秋成の性行を論じ、野崎左文子は假名垣魯文の傳をもつし、予も亦一九、三馬、京傳等を紹介して、同紙上は江戸有數作家の頭揃ひとなれり。同好の人まば、右の諸傳を輯め一本となし、徳川時代小説家の傳系を觀るを便にし、文學史の缺を補はんことを勸む。然るに同紙上に掲げたるのみにては、享保以前京坂に榮えし作家の傳を缺くが故に、近頃予が調べたる寛文、元祿の作者傳をこれに合し、上は寛永より下は慶應に至る迄、凡二百五十年間に亘れる主なる小説家の傳をほゞ網羅して、こゝに近世列傳、小説史一編を撰し、坪内逍遙先生の閱を請ひ、世に公にすることゝはなりぬ。もとより

多くの人の手に成り、且はじめより歴史軀に編したるものならねば、小説史とはいへども、實は其の名に背く所少からず。然れども本邦小説家傳紀の未だ完備せざる今日に在りては、此の書の不具なるもまた世に小補なからずや。大方の諸君子、實の名にそはざるを深く咎むることなくば幸なり。

明治廿九年七月

不倒 生識す

凡例

一本書は分ちて上下二巻とす、上巻には京都、大坂に榮えたる寛文の假名草子、元禄、享保の浮世草子の作者を収め、下巻には文化、文政以降江戸に行はれたる稗史、草双紙の主なる作者を収む。然れども傳論すべて淨瑠璃作者に及ばず、はた赤本、黄表紙の作者に詳ならず、蓋し是等の遺漏は他日の業に譲り、今は數人の篤志家が、他年研究の結果をこゝに集めて世に公にするに外ならず。

一本邦小説家の傳記には、曲亭馬琴が『物の本江戸作者部類』、活東子が『稗史六家仙』、その他『戯作者撰集』等ありて、はゞ江戸作者の事蹟を記載せり、本書は是等の書に負ふところ少ながらず。然れども京坂の作者に至りては、別に傳記なく僅に散在せる諸書に其の材を求めてこれを綴れるが多し、かるが故に時として憶説推斷に流れたる恐れなき能はず。元來考證の業たるや勞多くして功甚だ少し、たとへば一人の傳を叙するに當り、或事蹟の既に秘書には見えながら、世間には知られざるが爲めに、撰者は八方より立證して漸く其の事蹟を確めたりとせんに、其の事實のほゞ秘書の大跡を得たるは幸なれども、間々其説全く誤りて取るに足らざることあり、本書中これに類する徒勞なきを保せず、これらは博識の教を待ちて謹んで後に正さんとす。

一古版の草子中版行の年月を記すといへども、從來書物の奥付に記したる年月は、版行を重ねる

毎に改まれるものにして、今や殆ど原版の書散逸して數本合せ見るの便なき時にありては、再版の年月を初版の時と誤り記載したるもあるべし。

一本書中の作者傳は、戯作者として有力なるも、其の傳は簡に失したるあれば、然らざる人にて

も詳しきありて繁簡宜しきを得ず、これらは事蹟の後世に傳はれる多少に依りて一様ならず。

一本編はもと數人の手になり、また一人の手になりしものといへども、時を隔て、稿を起し、等の事情あり、文體一様ならず、評論に重きを措きたるものあれば、敘事に力を盡したるもあり、著作の紹介に勉めたるものと、性行生涯を叙するに精きものとの別ありて、みな人々のことろくに従ひ、時々の意に任せて、今敢てこれを一様にせず、但し事實の誤りなるは及ぶべきだけは刪したり。

一著者を異にするにより、目次の下に必ず著者の氏名を示す、然れども編中にはこれを費せず、もし一題に就き撰者の誰なるかを知らんと欲せば、宜しく目次に就て一覽すべし。

一江戸作者にして肖像の世に傳はれるは、これを摸寫して成るべく本傳のはじめに附せり、又元祿以前の草子には文例を示し、かねて所々に挿繪を加へたるは後の參考に資したるのみ、然れども元祿以後にはこれなし、蓋し近來翻刻もの盛行はれて、元祿、享保の珍書ははゞ世人の知るところとなりたれば、繁をいとひて省きたり。

近世列傳小説史 上卷

目次

第一章 徳川文學の起源……………水谷不倒

其一 歴史文學

其二 古文學の註釋

其三 佛教文學

其四 支那文學の翻譯
淺井了意の『伽婢子』

其五 外國文學の輸入
イソップの翻譯

第二章 假名草子

貞享 凡五十年間

假名草子の名稱

作者傳

如傀子

水谷不倒

鈴木正三

同 人

山岡元隣

同 人

淺井了意

同 人

第三章 浮世草子

寶曆 凡八十年間

浮世草子の名稱

作者傳

井原西鶴

水谷不倒

西澤一風

同

都の飾

同

錦文流

同

八文字屋ものゝ作者

江島屋其積

水谷不倒

八文字屋自笑

同 人

多田南嶺

同 人

教訓もの、怪談ものゝ作者

林文會堂

水谷不倒

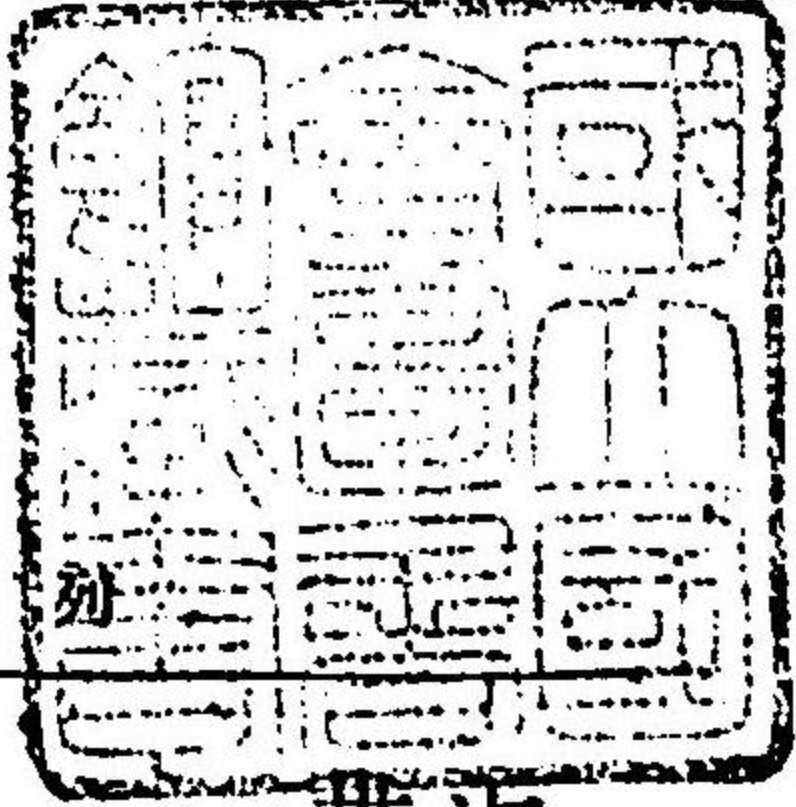
青木鷲水

同 人

北條團水

同 人

月尋堂	同	人
上田秋成	福	笑門
上田秋成	斐	庭篁村



近世列傳 小林説史 上卷

第一章 徳川文學の起原

(寛永より延寶に至る凡六十年間)

徳川氏治世のはじめより、寛文を中心として、凡六十年間は、これ近世文學復興の時期なり、其の發達の順序、頗る複雑にして且趣味多しといふべし。そもく我が邦、王朝このかた、文學の素養あると一日にあらざ、中頃盛衰きはまりなく、和歌のみ堂上のもてあそびとなり 武家にては、亂世の間、連歌、狂歌などの變態にて弄はれ、足利氏の末より、織豊二氏の世を経て、徳川氏の初世に至りて衰へず、次に俳諧となり、かくて歌俳の道は、中世より近世に連綿として推移し、徳川文學の一要素とはなりぬ。

其一 歴史文學

徳川氏のはじめに、先づ第一に發生せしは歴史文學なりき。これは全く時勢の必要と作者の關係とによれり。歌俳の亂世にも續いて傳はりしは、全く作り易きが爲めなれど、文學の他の各科目

水谷不倒撰
坪内逍遙閱



は、歌俳の如く容易く作られざる事情より、暫く中絶してたゞ僅に公家の間に存せしのみ。されど應仁以降、元龜、天正の亂も、彼の大阪夏の陣にて落着を告げ、得意の士も、失意の士も、一般に餘暇を生じ、或は散閑の爲めに、或は慰鬱の爲めに、學問を爲し、文學を翫び、一たび筆を着けんとするや、百十數年來放棄したる史料は堆積して拾ふに易し、彼等が先づ第一に着手せしはこれなり、或は報恩の爲めに主君の事蹟を綴るもあれば、或は亡國の跡を追惜して感慨禁する能はず、こゝに筆を下すもあり。然るに一方を見れば、大阪落着後凡そ三四十間の間のこととして、當時盛に世に立ちし人々は、其の身戰場に働き最後の武功を建てたるもあるべく、たゞ一戦はざるも其の實況を目撃したるもあるべければ、云ひ傳へ聞き傳へに、彼等の子孫が耳を肥やししは、乃父が手柄ばなし、さては昔しの軍ものがたり、一般の好尚は實に史談の外に出でざりき。これ徳川文學の率先に、俗に軍書と稱する歴史文學の發生せし所以なり。

今日寫本に傳はる家々の記談、または諸老の宛書などは、概ね當代の筆作なれども、徳川氏に関する記事は、みな家々に秘して板行せられざりしかば、世間一般に知られしは更に後のことなりとす。

然れども板行せられしは、多く當代の事蹟に關せざるもの、すなはち過去の事實に屬せり。今一例を擧ぐれば、織田信長の祐筆たりきといふ、太田和泉守一牛が『信長記』もとは三卷、元和八年の梓行なるを、後小瀬甫庵これを重撰して寛永年中再版となれり。小瀬甫庵道喜が『太閤記』(二十二卷)、三浦淨心が『北條五代記』(十卷)等は其の一例なれども、その他隨筆めける軍書、

いゝくさものがたり、たゞは『大阪物語』の類、當時板行せられしもの擧げて數ふべからず。これらは眞字片假名あくり文、すなはち眞字片假名文、と平假名あくりの文、すなはちかな文との二様あり、中には著者の實歴に基き、事實の確かなるものあれど、多くは『平家物語』、『太平記』などに倣ひ、事實の幾分を曲ぐるも、なほ趣味の多からんことを勉め、文勢を飾りたるが通例なり。

其二 古文學の註釋

さて隨て當時書物出版の状況を見るに、此の業徳川氏治世のはじめより行はれ、万治寛文に至りて最も盛なり、經書はいふも更なり、支那の文學書類も多く訓點又は傍訓さへ施されて、和版に刻し、一般の需に應じ、また本邦古文學の或は古版として存し或は寫本に傳はりしを、此の際秘佛の御戸帳を開き、おほかたは版行に附して公にきたりき。また一方には、此の出版の便利により、古文學の註釋續出せり、こは慶長の頃壽命院(中院通勝)の着手せられし事業を、こゝに續きしにて、『源氏物語』、『大和物語』、『伊勢物語』、『徒然草』、歌集等の註釋出で來り、大に文學思想を養ふに力ありき。就中兼好法師が『徒然草』は、當時程朱學の盛を極めたる時代として、性理の説の老佛に歸着するや、はしなくも儒釋道三學を合せたる其の旨に適ひ、廣く渴仰せらるゝ書となりぬ、また卷數の多からぬと割合に意義の深遠なるとは、頗る註釋の志ばえある理由となり、第一に着手せられ、註釋書の多きこと第一位に在る。貞享五年版の『徒然草諸抄大成』に網羅したるおもなる註釋書實に十三部に至りぬ。

『源命院抄』	二卷	也足野與書(慶長頃)
『野種抄』	十四卷	林道春作(元和七年)
『貞徳抄』	二卷	長頭丸作
『同感草』	八卷	同作(慶安五年)
『古今抄』	八卷	大和田氣求作
『盤齋抄』	十三卷	踏雪作(寛文元年)
『句解』	七卷	高階楊順作(同年)
『諸家問答』	三卷	
『文段抄』	七卷	北村季吟作(寛文七年)
『謬解』	五卷	南部宗海作
『増補戯種』	六卷	山岡元隣作(寛文九年)
『大全』	十三卷	高田宗覽作
『参考抄』	八卷	惠空和尚作

これはたゞ一例に過ぎざれども、古文註釋の業のいかに盛なりしかを知るに足るべし。寛永の末に戯作の母として如偶子の『可笑記』いでたりしが、『可笑記』は『徒然草』、『伊勢物語』の文林を摸し其の後同躰の隨筆めける戯作起りぬ。蓋し註釋にて兎も角も一部の讀者に、古文の解せられし結果といはざるべからず。

其三 佛 教 文 學

こゝにまた教義の爲めに發生したる一種の戯作あり。たとへば『七人比丘尼』(一名『懺悔物語』)の如し。これは足利時代に『三人僧物語』といふがありて、其れに胚胎すといふ。身の罪障を懺悔消滅するの趣向、弘法の一助としてこれらの戯作はものせられたるに似たり。此の作は寛永十二年版との説(但し足利の末の作か)。北朝の貞和年中、信濃國善光寺街道の宿屋の主人が物がたりにして、其の大意は、

せきがはさいふ所に、こゝろさしの殊勝なる尼ありて、人々に湯施興をほつめけるが、年のほゞ三十ばかりの尼、善光寺詣での下向の折ふし、此の湯に入てある所の尼の慈悲のほごを感下、こゝに自らもさどまり、薪を樵り水をむすび、さもしく湯をわかつて人に施しけるが、ある日はこあみだぶ、後に來りしはこんあみだぶさいひける、然るになが月廿日あまりに、爰へ同く比丘尼四五人集ひ、みなさもしくゆぜつたいの手傳ひをなし、おのゝ罪障懺悔の爲めに身の上を語る

- 一 まらぎくの事
- 一 さきやうの御代の事
- 一 はなかつらの事
- 一 びやうぶの御いたの事
- 一 さく井殿みだい
- 一 みいけ殿の事

一 くわきんのめんひめぎみの事

等七條のさんげばなしなり。此の草子は作者を詳にせざれども、文章のみやびやかなる點より推せば、或は公家の佛門に入りし人ともなるべし。かくて寛文に至り、佛菩薩の靈徳、寺の縁起、さては因果應報の理を世事に附會して、凡俗を佛法に誘導せんと勉めたる弘法的文學起りぬ。たとへば鈴木正三が『二人比丘尼』は、一休和尚の作と稱せらる、『水鏡、二人比丘尼』、『一休骸骨』に胚胎し、又同人作『因果物語』『念佛双子』などあり、佛教文學は此の人によりて大に發揮せられ、曾我休自が『爲愚痴物語』(寛文二年板)、正三門人なる惠中が『海上物語』(寛文六年板)淺井了意が『三井寺物語』等、其の脈絡四方にはびこりぬ。然れども其の目的元來弘法にあれば、概ね荒唐無稽の事件にて、多少奇趣を喚起するの外、趣向拙く、文章もまた見るに足らず。是等の草子に列しながら、弘法の外に一機軸を出し、後來怪談小説の濫觴となりしは、『剪燈新話』の翻譯なり。

其四 支那文學の翻譯

一方に古文學の註釋盛に行はれしが、一方には支那文學を假名草子に翻譯することまた當時學者の業なりき。たとへば『叢陰比事物語』(慶安四年版)の如き、『釋迦入相物語』(寛文六年版)の如きこれなり。これと同年に松雲子(淺井了意)の『伽婢子』も世に出でたり。『伽婢子』は支那小説

『剪燈新話』の翻譯にして、主意は勸善懲惡なれども、大體に於て前の『爲愚痴物語』『因果物語』等と異ならず。されど流石に趣向の巧みなるは、譯文の平易にして流暢なるは、前後此の種の草子中に比類なき名作といふべし。此の書一たび出で、戯作の過半は百ものがたり、おとぎばなしに傾向せり。いまこれが系統を承けたるおもなる草子の目を擧ぐれば、

- 『新お伽婢子』 (天和二年、作者未詳)
- 『古今百物語評判』 (貞享三年、元隣作)
- 『犬 張 子』 (元祿四年、了意作)
- 『諸國新百物語』 (同 五年、俳林子作)
- 『玉 帯 子』 (同 九年、文會堂作)
- 『拾遺御伽婢子』 (同 十三年、柳絲堂作)
- 『御伽百物語』 (同 十四年、都の錦作)
- 『近代お伽百物語』 (寶永三年、寛水作)

等みな了意が『伽婢子』の影響にして、江戸時代に至りては、京傳馬琴等が稗史の一要素となり、別に怪談小説の一軸を起せり。彼の有名なる『牡丹燈籠』と稱する講談ものは、實に了意が本書の翻譯にて紹介せられしなり。此の他支那文學をかな草子に翻して、一般の讀者に推薦したるもの、淺井了意が著作の過半を占む。

其五 外國文學の輸入
イソップの翻譯

こゝに又寛文時代に一異彩を發ちたるは、外國文學の輸入なり、もとより多くは其の類を認めざれども、西歐文學『イソップ』の翻譯は其一なり。譯書は『伊曾保物語』と題す、上中下三冊、繪入のかな草子にして、万治二年（今を去ること二百三十四年）の板行にかゝる。譯者を詳にせず、按ずるに肥前島原に耶蘇教徒の變亂ありし數年の後なれば、此の宗教と紛れ込みたるものなるべし。然るに『いそほ物語』は、なほ早く本邦には繪巻物として傳はり、現に其の寫しを所藏する人もありと聞けり。此の繪巻物は足利時代大内氏が、私に外國と交通せし頃渡來せしものにて、慶長年來の出來なるべしといふ。されば本書は其の繪巻物を寫したるものにあらずして、全く原書より其の頃翻譯せられたることは疑ふべからず。蓋し繪巻物は通例眼に翹ぶる美術なれば、よし多少の文を加へたればとて、其は小書たるに過ぎざれども、本書の如きは人物國名までを、覺束なくも原音に依りたるなど、純然たる翻譯の跡裁を具へたればなり。こゝに其の文の一二を抄出せん。

第一 本國の事

さる程にえうらうはのうら、ひりしやの國さるやといふ所に、おもにやと云里有、其里に伊曾保と云人ありけり、其ちたびえうらうはの國中に、か程見にくき人なし、其ゆへは、かうへはつれのかうへにニッがさ有、まなこの玉つはぐみ出て、其

またいらひ、かほかたち色くろく、雨のほうなだれ、くびゆがみ、せいひきく、あしながくしてふさし、せながらまり腹ふくれ出てまがれり、物云事おもしろきと、其時代此いそほ、人にすぐれてみぐるしくきたなき人也、されども才短又ならぶ人なし、されば其里にたゝかひおこりて、他國の軍勢みだれ入、いそほをからめ取て、はるかかよへ聞えける、あてあるすこ云國の、ありしてすこ云人にうれり、彼者のすがたのみぐるしきを見て、なすべきわさなければとて、わが領知につかはし、百姓等にひさしく、牛馬を飼まむるわざをなんおこなふ、かくて年経ぬれど、さるべき人もまらすなん侍りける、折節ある商人にうりわたさる、猶別の人二人買そへ、以上三人めしぐして、さん云所になんなく行けり、其里におゐて、まやんといへるやんこなき知者の行達、彼商人に尋て云、御邊の召ぐしける者共は、何事をかばま侍るぞと宣は、商人こたへていはく、一人は琵琶をひくげに候と申ければ、かのまやんと、すぐに二人の者にさひ給ふは、面々は何事をかば侍るぞと仰ければ、二人諸もに答云、あらゆる程の事をば、かたのごとく知侍るさ申其後又いそほに、汝はいかなる者ぞとさひ給へば、いそほ答云、我は是骨肉なりと申ければ、我汝に骨肉をばさはず、汝いつくにて生れけるぞと仰ければ、いそほ答云、我はこれ母の胎内より生れ候と申、汝に母の胎内をばさはず、汝がむまれたる所は、いつくの國ぞと仰ければ、いそほ答云、我は是母のうみたる所にて、そたゝり候と申、其時まやんと、かれが返答はたゞ、魚の島をめぐるがごとし、さて汝は何事をか知侍るぞ、とばせ給へば、いそほ答云何事も、知侍らぬ者にて候と申、其まやんと、重而仰けるは、人さしてものゝわざなき事あたはず、汝何の故にか、まわさなきやと仰ければ、いそほ答云、我何をかなすと申へき、其ゆへは、くだんの兩人、あらゆる程の事をばさるといへり、是にもれて、我何をかまり候べきやと申、其時まやんと、いそほにさひたまはく、我汝をかいさるべし、汝におめていかんとおほせければ、いそほ答云、たゞ其事はのぞみの心に有べし、いそほでそれおしに尋給ふぞと申、まやんと重てのたまふは、我汝をかいさるべし、彼時にけさるべきやと仰ければ、いそほ答云、我此所を逃さん時、御邊のいけんを隨へつらす中、かやうに櫛々けうがることたへ共をま侍りければ、心よげにおもひて、いそほの間に、取、彼商人とゆき給ふに、あるせきのまへにて、いそほが姿を見て、あやしの者やとさかめおき

て、是はたれの召くし給ふ者ぞ尋ければ、まやんと商人も、あまりにいそほが見にくきこゝなほちて、まらすき答ふ、いそほよしを承り、あなうれしの事や、われにぬしなさいひて、いさみあへる、其の時まやんと商人も、是は我まよとうにて候き宣、それよりまやんも、いそほを申しつれ、我本國へ入りたまひけり、

これをはじめとして、伊曾保はまやんと又は諸邦の君に仕へ、ところへにて機智を示し、頼才をあらはし、終にけれしやの國に至り、てるほすと云島に渡りしが、島人心あしき者共にて、伊曾保が教ふる道を用ひず、天下無双の才人も終に義々たる山の巖より、取て下におし落され、鼠蛙の譬を引いて伊曾保は相果てたり。此の物語は最初に、先づ伊曾保が経歴を叙し、次に種々の比喩譚を附したり。

たつと人との事 (下の巻第四)

河の邊を、馬に乗て通る人有けり、其傍にたつと云物、水に離て迷惑する事有けり、此龍今の人をみて申けるは、我今水にはなれてせんかたなし、哀みをたれ給ひ、其馬に乗せて水有所へ付させ給は、其返報として金銀を奉らんといふ、彼人は賊と心得て、馬に乗て水上へをぐる、そこにやくそくの金銀を、くれよといへば、龍いつて云、何の金銀を、参らすへき、我を馬にくり付て、いため給ふだに有に、金銀は何事ぞとあらそふ處に、狐はせ來て、扱もたつ殿は何ことを野ぞと云に、龍右の赴なん云ければ、狐申けるは、我此公事を決すべし、先にくり付たる様は、何ぞかしつるそと云に、たつ申けるは、かくのごとしとて又馬に乗程に、狐人に申けるは、いっほごまめ付らるぞと云程に、是程とてまめければ、たつ云、いまだ其位なし、また、かにまめられけるといへば、これ程とて、いっほごまめにまめ付て、人に申けるは、かゝる無理無法の徒者なば、本の所へかへれとて追立たり、人實もと悦びて、本のはたにおるせり、其時たついくたび、悔め共かひなく

万治二年故「伊曾保物語」挿繪



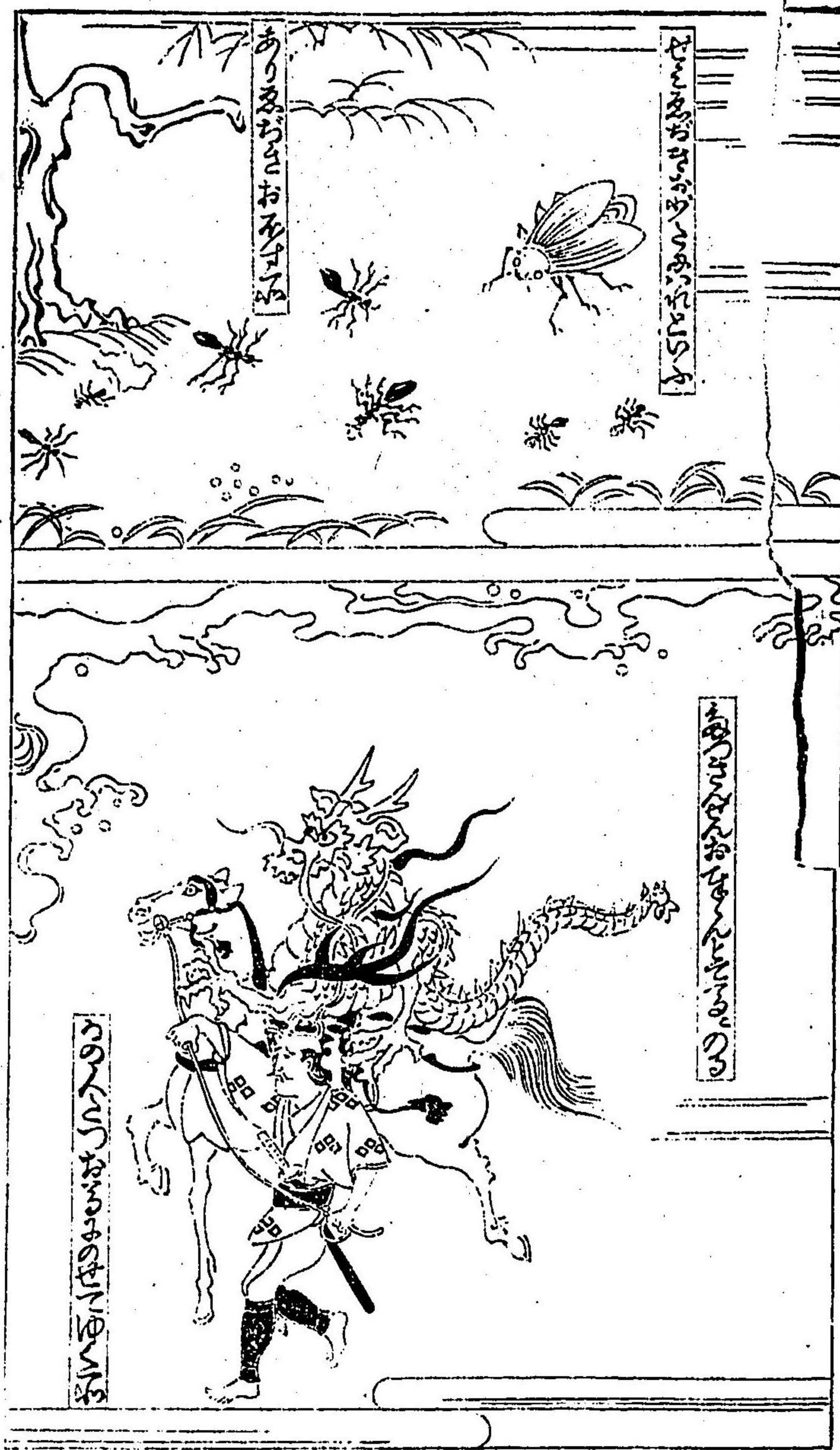
て、是はたれの召くし給ふ者ぞ尋ければ、まやんも商人も、あまりにいそほが見にくきことをはぢて、まらすき答ふ、いそほよしを承り、あなうれしの事や、われにぬしなきいひて、いさみあへる、其の時まやんも商人も、是は我まよらうにて候き實、それよりまやんも、いそほをめしつれ、我本國へかへりたまひけり、

これをはじめとして、伊曾保はまやんと又は諸邦の君に仕へ、どころくにて機智を示し、頼才をあらはし、終にけれしやの國に至り、てるほすと云島に渡りしが、島人心あしき者共にて、伊曾保が教ふる道を用ひず、天下無双の才人も終に幾々たる山の巖より、取て下におし落され、鼠蛙の譬を引いて伊曾保は相果てたり。此の物語は最初に、先づ伊曾保が経歴を叙し、次に種々の比喩譚を附したり。

たつと人との事 (下の巻第四)

河の邊を、馬に乗て通る人有り、其傍にたつと云物、水に離て迷惑する事有り、此龍今の人をみて申けるは、我今水にはなれてせんかたなし、哀みをたれ給ひ、其馬に乗せて水有所へ付させ給は、其返報として金錢を奉んといふ、彼人は誠と心得て、馬に乗て水上へくる、そこにやくそくを金銭を、くれよといへば、龍いつて云、何の金銭を奉らすべき、我を馬にくり付て、いため給ふだに有に、金銭とは何事ぞとあらそふ處に、狐はせ來て、扱もたつ殿は何ごきを静ぞと云に、龍右の赴なん云ければ、狐申けるは、我此公事を決すべし、先にくり付たる様は、何ごかしつるぞと云に、たつ申けるは、かくのごとくして又馬に乗程に、狐人に申けるは、いかほごまめ付らるぞと云程に、是程とてまめければ、たつの云、いまだ其位なし、また、かごまめられけるといへば、これ程かごまめにまめ付て、人に申けるは、かゝる無理無法の徒者なは、本の所へかへれとて追立たり、人質もさ悦びて、本のはたにおるせり、其時たついくたび、悔め共かひなく

万治二年板「伊曾保物語」挿繪



して矢にけり、其こまく人の恩をかうふりて、それを報せぬのみ、かへつてあななせば、天罰たちまちあたる物なり、これを死れ

右『伊曾保物語』が當時他に及ぼしたる著き影響を認めざれども、そもく此の頃の教訓ものといふは、諷諭の意を寓したるが多ければ、また頗る時尙に適ひたる作と思はる。但し淺井了意が『浮世物語』は、其の趣向、伊曾保が諸國修行に胚胎せるに似たり。また山岡元隣の『小さかづき』も、一編寓言の小話よりなりて事柄は和漢に其の材をとり、『伊曾保物語』に似たる點なけれども、着想は二者ともやや同じき所あり。兎に角當時の作家にかゝる洋學者ありて、珍らしき西歐文學を此の時代に本邦に輸入したるは希有の事といはざるべからず。

これを要するに、寛文文學のちもなる仕事は、散逸したる史料を集輯し、經書、支那文學書の翻刻、本邦古文書の版行を遂げて一般に讀書の便宜を興へ、或は註釋を施し、或は翻譯をなし、あらゆる文學の材料を供へて、次に興るべき大成の時期を待つものゝ如し、すなはち寛文は準備の時代なりき。當時の學者は最も博くゆきわたるを以て長所となす、されば博學は一般の風をなし、僧なれば八宗兼學、儒なれば和漢古今に通ずるをもて、學者の能事をはるとなす、其の弊は博覽を銜ふにあり、一編のかな草子を繙くも、此の痕跡は全時代に印銘せり、山岡元隣の『小さかづき』の如きは其の一例なり。かるが故に此の時代の作家には、學者は有れども天才の人を認めず、隨て戯作も創意に成れるは稀にして多くは他の眞似に過ぎず、文章はたまかり。然るに此の準備

時代を通過して、戯曲には近松門左衛門、浮世草子には井原西鶴、俳諧には松尾芭蕉の如き作家、元祿に至りて現る、天才は實に第二期元祿時代の産物にして、其の時こそ創作の時代なれ。俗文また其の時に發生せり。然れども第一期寛文時代にはこれなし。

第二章 假名草子

假名草子の名稱

寛文時代に行はれたる草子類は、學識ある人々が一般の知識を啓發せんとの目的にて、漢書、經文、さては古文等の案を翻し、また其の詞を其の儘、假名の讀み易き文章に更めて紹介したるにあり。これを通例かな草子と呼べり、蓋しいかなる草子も、假名文にて綴られざるはなきに、ひとり此の時代の草子のみ此の名目を附するはやと穩かならざるに似たれど、古文は假名文なれども、ことば雅にして一般に讀まじむる目的にあらず。又元祿以降は、草子類も段々六ヶ敷眞字を交ふることとなり、其れに傍訓を施して、婦女子にも讀み易からしめたれども、寛文ごろの草子は、日用用ふる最も容易き文字の外は、成べく眞字を避けて假名を使用し、其の目的全く文學の普及にあれば、特に此の時代の草子をかくは名づけしなり。假名草子の作者一二にして足らざるべし、然れども當時の草子名を記せざるもの過半、今知られたる主なる作者を左に列叙す。

如 儼 子

其一 傳

如儼子とは、そも何人の號なるかを詳にせず。其の作『可笑記』、『百人町記』の記事によりて察するに、作者の素姓は、もと關東生れの武士なりしに似たり。然るに武運つたなく浪人の身となりて、後ち佛門に歸依したる人の如し。『可笑記』はすなはち俗たりし時の經歷の一部を漏らし、『百人町記』は佛者の境涯をほのめかす。『可笑記』にいふ、

むかしそれがしためしよろひをおごし候はんさて註文を仕り親にみせ候へば親の申され候はためしよろひはおもき物にて汝がやうなる小男の用には立がたし侍の諸道具は其身くくに相照して取まはし自由なるがよしきて其ついでにかたられけるは汝が母がたの眞東禪寺右馬頭つれに申されけるは運は天にあり雖はむれに有さて幾度の合戦にもあつたむぎの羽織のみうちきて何時も人の眞先をかけまんがりをまられければ共一代かすてもおはす一もせ出羽國庄内千安合戦の時上杉景勝公の軍大將本庄重長はせあはせ勝負をけつする。割敵大勢なるゆへに四十三歳にして打死せられぬ其時本庄重長も星甲のつたびん二寸ばかり切おさされわたがみへ打こまれあやうき命いきらぬさうけ給はりしなりきたるも道理かな相州正宗がきたいたる二尺七寸大は物わけば玉ちるばかりなる刀也此かな重長が手にわたり景勝公へまいりそれより羽柴太閤公へまいり其後當御家へまいり只今は二尺三寸まやらんにすり上られ紀州大納言公に御座あるよしをうけ給はり及申此右馬頭最期のはたらし出羽越後兩國において古き侍は多分見きおよびまりたる事なれば手細に書付侍らす

右東禪寺右馬頭は酒田の城主にして、事は天正十六年にあり。之を母方の眞(?)といひ、又同書に

一、上杉景勝公の御内直江山城守と出羽の國最上の御主義光公と合戦の時になかえ方の下大右衛門と云一手の大將もがみ谷地の城をせめ取てすなはち其城にこもり候刻(中略)それのおち大井右近も折ふしこの城にこもり云々

十四

如備子のをぢの一人は、大井右近とてまた上杉氏の旗下にあり、前の東禪寺といひ、みな歴々の武士ををぢに持てば、如備子の家は、東北に由緒ある武士なりしこと知るべし。或は大井右近と同じく上杉氏に属したる士なるやもまれず、さすれば上杉氏勢を失し、主家とともに零落したるもの歟。

同書に、其の傳ともいふべき一節あり、

むかしある時親子ともに年人いたし越路のつたはらに徘徊仕候時あまりの事に父にたづねて老たる母にやしなはれて苦辛辛をまのきおくりけるが身のいさなみにつらへ武州江城の波にひかれやう／＼うかび出候へども大すりきりなればながく身上のせくへきてたてもなく生國あづま者なれば口才利發にもあらず心のたくなれば世間せやくしてつてなもまた生れつき思なれば藝能なまらず結句の花ゆりにぶ男さたのさきりにしてい／＼すべきと思ひわづらへる處にさるトひ人來て云るは汝少れ下り書なするなれば當座の命つなきに右筆せよにあはしき所あるべしと申さる云々

されば如備子は手蹟もよかりしかば一時祐筆を勤めしこともありと見ゆ、『可笑記』の奥に、

于時寛永十三

孟陽中津江城之旅泊身筆作之

とありて、寛永頃は江戸にありしが如し。作者の年輩を推すに、同書に

ちかき比の事は攝州大阪之此陣もはや三十年になれり、たゞへば大坂陣へ十七八にても罷立つ人もはや五十歳におよぶべしとこれ必しも自分のことならねど、其の書きさまいかにも年輩の人の如く、『可笑記』の文勢より推すも、作者は頗る世故に通じ、人情に精しき人にして、若輩の人の筆とは思はれず。

如備子の傳を推測もて、かく綴りし後、一日櫻庭篁村翁所藏の『可笑記』を一覽せしに、左の如き書入れあり、

予(書入せし人)瑞龍軒怨翁が選せし關ヶ原軍記(大略)を讀みしに怨翁が親族湯村式部が著すころの可笑記に本庄越前守繁長が東禪寺右馬守を討て正宗の刀を得し事を取たり因て此書の撰者の名を知し故こゝに記し置く讀者是を察すべし

と、これにて如備子は湯村式部の職號なることをまゐりぬ。併しながら本書印刷の期迫り。其傳を調ぶるに違あらず、たゞ其の事をこゝに附記して如備子は湯村式部なることを一言するのみ。近來成りし一二の書に、如備子を淺井了意が別號とすれど、了意と如備子とは全く別人にて、これを混同したるは何時なるか詳ならざれども、蓋し寛永頃に職作あるは了意一人と思へりし後人の誤解なるべし。元禄五年板の『廣益書籍目錄大全』には、

百八町記 如備子作 了意加筆

と註して、二人を混同せず。又都の錦が詞にも「如備子はじめて可笑記を作り、昭儀坊(了意)亦御伽婢子を作る」と見えたり。當時の人は皆兩人を區別せり、更に別人の證は、如備子の作『可

十五

笑記』に、同じ作者が、評判を加筆して、もとは五卷なるを、十卷に敷衍すべき理由なければならぬ。これらの區別は『可笑記』及び『同評判』（丁意作）の文を合せ見るも判然たり。

其二 著作

『可笑記』五冊

大本の繪なきは、寛永十九年版、小本繪入は板行年月を詳にせざれど、蓋風より推すに明曆、万治頃のものと思はるれば、更に後の板行なるべし。

『可笑記』は、毎章に「むかしさる人の云るは」と『伊勢物語』の文の起首に摸して書きはじめ、筆まかせに、古今雑多の事柄を綴りたる隨筆なり。『枕の草子』、むしろ一層新らしき『徒然草』の跡を學べり。着眼はもとより似るべうもあらねど、文章のところくは、全く其の鑑みに習ひたり。そもく作者の境遇、一たびは武士の家に生れ、ある理由にてあぢきなく世を遁れし人とするれば、一方には兼好が身の上に同情を表し、其の爲人を慕ひ、一方には『徒然草』は當時の流行ものなるに感化せられて、此の作は出来しなるべし。然れども『徒然草』は、儒釋道の深奥を極めたる得道の隱者かものせしこととして、世の中を觀るにもちのづから脱俗の趣あれど、『可笑記』は作者が世に満たざるの心ありて、感慨所思を抒ぶるに、事託寓言を用ひしなれば、當世を諷する文となれり。すなはち此の書は、世の君たる人が、濫りに讒者の言葉を信じ、名臣を黜け、良士の擧ぐべきを登用せず、または武士たるものの不覺悟、奢侈放縱の行爲などを懇ろに諫めたる

にあり。たとへば、

- (一) むかしさる人の云るは、永祿つちのこの巳年東のそらにけふりのもみいづる星あらはれたりみなあやしきおそれぬこと云事なしそのころ名譽の博士勲文をもつてつたられけるは我朝文武の正道めつきやくすべきまゝの星とされば王法は絶て久しき事自今以後古へよりつたへ来る侍の家々次第におさるへはて、累代の家法を取らしなひ仁義禮をわきまへすあまつさへ無學無能にして利發利口にしたがふりよくにうつり利にまよひ馬子なる事なこのみもてあそび真なる事をばあらひやの孔子風やれ氣つまりの延喜式やまぢらひあざけり色にめで愛におはれて賤き下子共を取たて家老出頭ともいあがめ過分のおんまやうにあづかりありがたき情をかけ給ふゆへに國々所々に發向して惡逆不道のわがまを嫌ふるまひごうよくまんなもつばらさし神道をやぶりあがめず佛法をいやしみたつさます萬不慈悲不饒理の不知恵なればかゝる時節をうかひ新作邪惡の宗旨さんげんへうりのごうよく人のみはんぞやうすへしと云る事を夢うつゝのとくつたへうけ給はりわれおるかながらもふかくまうたんしおもく疼痛して文字のあやまりのなちがひをばらす此愚言を綴て余が世に於たへよみならはすまことに遠東の系ならしもし他見の人文書の御用あらは佛學儒者のかたがなの御用あらは公家連歌師のまごへ御たづねあるべしそれがしはまつたくまり候はすたゞらむらしくは文盲つゝかす短筆よめかぬへき事をまなびら内外の書にも草段のかけたる所さつかんなきもありさきくまからば何の遺恨あらん但不慮のほまれ口々のそしりをあふき求るに似たる歟
- 右は、『可笑記』一篇の大意の存する所なり。また其の短き章にては、世上のことを何くれとなく筆にまかせ諷刺してゐる。
- (二) むかしさる人のいへるは世間にくきはあまりある物く、風、ひるれおさるがす蟻、鼻低むるさするせがれ、出家の女房をみるまなぐり、わが衆の大食、蚊のほそごまのまくらよぐる、ごうよく邪道の老、出来出頭のおため者、此外さまくある

(三) むかし日蓮宗のお上人、だんなのつまにうちほれて、みやせん、かくやせましと思ひ、あかしの油浪の、立ぬくるしき海女うみづめ乙女おとめ、かほくまもなき衣手の、きつくなれにし、つましあれば、かきくもき、南無妙法蓮花の上に、さしぬれば、まゆつりも、まゆだも、かはらざりけり

南無妙法蓮花の道に成れば出家も俗もかはらざりけり

(四) むかし吉田の兼好の詞に物によりおほくありてあしき物あり、硯筆のおほくある持佛堂に本尊のおほくある世になし貧家に子こどものおほくあるさかけり又それがしの中さんならばお大名のおんこに金銀のたくさんにある

などの如し。文章は洒脱、名の如く可笑みあり。併し關東武士の筆になりしものとて、どこやら文に抜くべからざる氣概あり。當時はいまだ戯作とて、一般の娛樂に供すべき書物の乏しき時なれば、此の士氣のある文章もて當世に風証したる言の葉のいかに時尙に適ひしか。これより以前意林庵の『清水物語』、これに應へたる『祇園物語』等あれども、作者の着眼の一局部に偏し、或は文の齟齬りに古き時代を摸して、戦後の人の好尙には、注意を喚起すべき價値なかりしかば、ひとり『可笑記』に團扇は擧がりて、大に流行文學とはなりぬ。これ『可笑記』の數板あるに徴してのみならず、元祿ごろの評にもいへり、

ちやすき草紙には、大和物語、宇治拾遺、清輪が雜談、今は昔の物語、よしの拾遺、雜々拾遺、著聞集、十訓抄、腹筆記など有さいへども、此等にいへる言の葉は、久しく目馴れふれて、めづらじからねばとて、如鑑子は、かめて可笑記を作り、昭儀坊(淺井了意)亦御伽婢子みこめをあらはし云々、

右は都の錦が『伽百物語』の總論のうちでありて、近世戯作の起原は、この『可笑記』にはじ

まる由を、つらねし言葉なり。げにや『可笑記』は、將に興らんと待ち構へたる若手の文才を奮起せしむるに與りて力ありしに似たり。蓋し名著といへども板行に上らざる以上は、一般の讀者を動かすに足らず、よし板行せらるればとて、大に行はれざれば當代の思想を左右する効力少ければなり。たとへ『可笑記』以前に、戯作ありきとするも、みな等閑に附せられ、ひとり『可笑記』を歓迎するの聲は、戯作の導火線に着火せしものに異ならず。これに雷同響應してあらはれたるもの、山岡元隆が『誰が身の上』、淺井了意が『可笑記評判』なり。まかも此の二作は、ともに元隆、了意がはじめの作に屬するを見れば、『可笑記』の及ぼしたる影響といふも過言にはあらず。

『百八町記』 五冊 (寛文四年板)

こは戯作にあらず、儒釋道三教一致を唱へ、各々其の末流が互に非難攻撃するを破したる書なれども、もとより佛教の爲めに儒者の説を駁したるは明なり。此の書にて如鑑子が佛門の人たるを知るべし。毎章に一字下げて私見を加へたり、こは了意の加筆と前にあるが如し。當時儒者の攻撃を受けて、佛門の徒がいかに防戦せしかを窺ひ、また論壇の狀勢を察するには、参考に資すべき書なり。

如鑑子の作と稱するもの、先づは右の二部なるが如し。

鈴木正三

其一 傳

鈴木正三は通稱を九太夫、石平道人、また玄々軒と號す。三河の人にして天正七年に生る。若き時より徳川家康に従ひ、處々の戦に臨み、殊に關ヶ原の役、大坂冬夏兩陣には戦功少からず、元和のはじめには大番士なりきとぞ。

正三夙に佛門に歸依し、遁世の志やみがたく、元和六年（一説には九年といふ）遂に意を決し、病と稱して致仕し、薙髮して名を正三と改む。これより諸國を遍歴すること十餘年、また三河國に還り、同國石平山恩真寺に住し、修業を積むこと年あり。慶安元年戊子の夏、江戸に下りて、居を淺草天徳院の側に下し、了心庵と號しこれに住へりきといふ。正三が著作は、多く此の草庵の手ずさびなるべし。明暦元年六月二十五日歿す、年七十七。（一説に七十）淺草八軒寺町福法院に葬る。（『雜書問題』、『馳鞍橋』、『墓所一覽』等）

其二 著作

正三著作のうち、七部の書と稱して世に傳はるは次の如し。

- 『百安杖』 一冊 (承應四年板)
- 『藏草分』 二冊 (明暦二年板)

- 『因果物語』 三冊 (寛文元年板)
- 『破吉利支丹』 一冊 (同二年板)
- 『二人比丘尼』 二冊 (同四年板)
- 『念佛草紙』 二冊 (宋 詳)
- 『万民御用』 一冊 (宋 詳)

また此の外には、

- 『三寶論』 一冊 (承應四年前)
- 『馳鞍橋』 六冊 (万治三年板)
- 『草庵雜語』 三冊 (寛文九年板)
- 『でうす問答』 一冊 (宋 詳)
- 『自己安心』 一冊 (宋 詳)

等あり。但し戯作の跡を具へたるは、僅かに『因果物語』と『二人比丘尼』とあるのみ。されど正三が著書に、一貫せる主旨は、六賊煩惱を断ちて、三界出離の目的に外ならず、現世を穢土と卑み、有相を不淨と見做し、貪嗔痴の三毒を除き、人たるもの一日も早く成佛を遂げんと志すにあり。當時隆々たる徳川氏の麾下にありながら、得らるべき榮華を放棄して顧みず、正三は能くみづから此の念願を貫きしものといふべし。然れどもこれ正三みづからのみ行ふべく、他にはことごとく施すべからず、されば正三は、一方にはまた差別の眼を以て、武士は武士、農商は農商

り、人間の八苦をよそにみるぞうれしき

とぞうたひける。女性はじめてうき世の夢のさめたる心地、感涙とめあへず、やがてあたりの里にいで、とある家を訪ひしに、容貌すくれてうつくしき、二十ばかりの女房、いつかたよりぞとたづぬ。女性つゝむによしなく、亡夫のことにも具さに語れば、女房承り、さては有難き御心さし、と感じて、またちのが身の上をも語るを聞くに、これはそのかみ陸奥のものにて、幼き時人に賣られんとしけるを、情ある一人の尼に助けられ、その一人子に妻はせられ、樂しきは夢の間、さるほどに尼は身まかり、夫もつぎて亡せ、たつきを失ひ、悲しさをせなく、此の年月を送りぬ、一樹のかげ一河のながれ、思召やらせ給ひて、これにまばらくとどまりおはしませ、と女房が情けにほだされ、そこに其の年も暮れ、明る年の二月、やう／＼にこゝを立出んとしけるに、女房ふと風の心地あしく、

またいくにおさるへ、よのつねのいんばせはかり、はなのわたらもやつれ果、哀なりける有様なり、歎くにかなはぬ命なれば、今をかぎりさなり果、ねふれるが如くにして失給ひぬ、うわてんべんの世のならひ、きのふかし人もけふはなく、なき人はかさなり、朝に紅顔あれども、夕に白骨さなる、あだし浮世の理のなるべきにはあらね共、かゝる憂めをみる事、そも何の因果ぞや、時しも比は彌生の末、花も散、春もくれば行空成に、日も入合の鐘なりて、こゝろさふ人もあらざれば、いと哀は増りつゝ、天にあふき地に伏、なげき給へどひぞなき、かく有べきにあらざれば、里人をかたらひて、むなしきのべにぞ、なくりける

心なき里人共なれば、野邊に置きすて／＼かへりしが、彼の女性は五七日の香花を取、跡ねんころ

にどふらひ、七日といふに、野邊に行きて見るに、花の面影跡もなく、古の人ともおもはへず、髪はをどろにみだれ、五躰ははれたれとそろしげなる有様と變りぬ。二七日にはそらふく風に臭氣をおくり、ところ／＼の肉さへきれて、犬の餌食とはなりぬ。三七日には蛆となり、蒼蠅あつまり、醜骸たれかふるきよしみをあもはんや、されど四七日にもなりぬれば、臭氣失せ、肉もかはき、形全く變じていづれの人の果ともみえず、五七日には叢のうちに男女のけぢめもなく、白骨つがひはなれてこゝかし草の根にあり、唯月のみてらして、空く朽果なん事のかなし

さよ、かくおもふ我身、又これにいはらんや、扱もあだ成夢の世に、心をさめていたづらに男女の思ひ休時なく、愛念熱心ふかくして後世ほだいなよそにみて、日夜さいかうひまもなく明し暮しける事よ、
何事も夢と、さ無常の理を悟り、それより尼となり、とある山奥に尊き老比丘尼を訪ね、「やうにかみをそり、衣を疊に染て候へ共、未一大事の因縁を知ず、びくに成たるかひ更になし、御志ひにまめし終へ、こそれより、老比丘尼を師と仰ぎ、教をうけ、修業の功を積みて、終に工夫おゆんぶよくして大往生を遂げぬ。

蓋し正三が佛の本意と観じたるは、「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電」、すなはち夢のうき世といふに歸す。されば見ゆるもの觸るものは、こと／＼く偽なり、其のうるはしく、或は戀しく暮はるゝは、みな心の迷ひにして、貪墮痴三毒の作用なれば、これを滅する爲めに、捨身念佛の心を發せざるべからず、と衆生を濟度する目的を以て、己れが世の中に對する意見を發表したるなり。

此の『二人比丘尼』は方便ながら主人公を設け、一貫せる想を辿りて終局に達す。文章は流暢ま、七五調を交へ、ひきかけことばを用ひ、處々に歌を挿みて情を抒へたるなど、すべて物語文及び諸曲の文體に習へり。

『因果物語』

怨讎妄念の纏綿として解脱すべからざることを、世上の出來事のやうに附會して見せたる小話を集む。すなはち佛説の地獄極樂を、目前の苦樂順逆に譬へたるにあり。一々年月と住所姓名を擧げたるは、事實と思はしむる手段なるべし。此の書數本あり、異片假名文のを正三が遺著とせり。蓋し門人等堅く秘して世に出さざりしを、竊に寫取り、剩へ恣に他の物語を雜入して板行するものありければ、門人義雲、雲歩等、師の正本を梓に鑿めしものとぞ。平假名文にして繪入の本には、正、三道、入、聞、書とあり、これ恐らく義雲等の所謂偽本なるべし。

山岡元隣

其一 傳

字は德甫、而愷齋と號す。また洛陽散人、抱獲齋ともいふ。もとは勢州山田の人、寛永八年に生る。父の世までは貨殖の業をことし、せしが、元隣に至り、はじめて學に志し、聖賢の道に入りぬ。

蓋し元隣、幼にして多病、三年がうちに三たびまで死せんとし、たま／＼生を保ちしかば、かくては身軀繁劇の事に堪へがたしとて、遂に家業を廢し、都に出で痼疾を治するに勉め、閑なる餘りに傍ら文學を翫びきとぞ。元隣老莊の玄理に耳を傾け、また頗る順宗の旨を悦び、得るところ少からず。

國學歌俳の道は、有名なる北村季吟の教を受け、俳諧をもて世に知らる、座禪の句に、

無いちもつか、はなも香もなき、犬ざくら

元隣が國學者として、また俳諧師としての生涯は、季吟に負ふところ少からず、其の古文註釋の如きは、實に季吟の事業の一部分を負擔すといふも不可なし。

元隣が秀吟を推重したるは、『誰が身の上』に、

(前巻) 又おうなの徳は列女傳にあまたあるし侍るを、ここに、此ころ我先生の女もトにやはらげ給へば、たれももまめて見るべきなり

と師の作を紹介し、又同じ書に、師の發句に對する世間の嘲りを排して、

ある人俳諧の發句すべき機をたづねられ侍りに予がいはく發句のいたしやうはいさゝか習も有なりと古人も仰られしが、先初心のうちは世上に書たる俳諧の書を能見覺えて其時をまるをもつて一つの習をいたしきふらふと(中略)問て曰すでに世に出たる集を手本とせよと仰らるれ共今の世の集には集一つには非言の書二つと三つとあればいづれを正しといづれを邪とせん答曰尤よきふまんなりされども其内に山の非などいへる書にはいまだ非言もなくよき書かと覺侍る此書の作者は、大和物語の抄などもせられたる事人のよくまりて世に用る事なり問曰され共此作者の句に山里やいつし正月門の松とあるを去人離

せしほもし此句を山里やいつも月の門の松さよみさふらはは連歌たるべしと答曰これこそいはれぬ非言なまづ此句はいつも正月さいへる世話にてまたたる句なり其上其時に申すさいへる事ありたさへは柄の字はえきもつがさよめども長刀にてはえきよみ大刀、刀にてはつがさよむ古来のよみくせ之(中略)此詳語の書に正月さ有をいかに非言がまたききてむ月さよむさへあるに又の字を入て非言するこそ、(すく)道の實際之(下略)

當時は學問一時に勃興せし時とて、學者間には種々の論難攻環行はれしかば、元隣は事に托して、季吟が回護の位地に立ち、また著書を世間に推薦するの勞をも取りきと見ゆ、師弟の關係の親密なりしこと察すべし、『誰が身の上』を著しし時は、元隣は二十三歳にして季吟は三十九歳なり。此の後なるべし、ひと、世濃州の大守、浴に上られし事あり、時に侍醫春庵(姓名を詳にせず、但し幕府の醫員啓迪院岡本玄治が高弟なりといふ)大守に従ひ、都に上り、元隣が家に宿しぬ、元隣は初對面なりしも、互に意氣の相投ずる所ありて、さながら舊識の如く語り合ひしが、春庵のいふやう、君の才學にして、醫を學ばざるは遺憾ならずや、他は幾ど諸事に亘るに、未だこれに及ばざるは缺典といふべし、と勧められ、元隣すなはち春庵に隨ひ、濃州に客となり、醫を學び其家傳を受けたりといふ。右は元隣の子息なる元恕の記する所なり。またみづからもいふ、

やつかれそののみ身にいたづまげくして已にみまがらんとする事三年に三度なりき、猶此事にこりて啓迪院の高弟に隨て家傳の丸散數十服を受け其數にまかせて方書を考へ醫論に渡りてみづからの病をいやせる餘りを以て、またしき妻子のわれぬ奴がうれへを救へり、これ世人の幸にあらずや云々(『寶藏』藥箱の跋)

『誰が身の上』には、いまだ醫學を説かず、然るに其の後の作にはえはく刀圭の事をいふ、依て

醫を學びしは晩年の事と思はる。

元隣病身の故にて、一朝家業を廢し、俗塵を避け、病を靜養するの傍ら風流を弄びしかども、家もと貧しからざりしにや、著述概ね經營慘憺の功を積み、良書に乏しからず、季吟が高足たるに耻ぢず。元隣氣概あり、人に屈することを好まず、市中に隠れて勸誘するものあれども仕へず、元隣みづからもまたこれを抱負し、其の著作にまばく氣焰を發す。『小さかづき』利齋又是に異見の事」の條にいふ、

六條わたりに、一人の書生あり、その名を又是といへり、老莊の玄理をもうかいひ、黄岐の神術をもこころがけ、きよきなにはづのすまも、ながれわたりにし、たがきあさか山のふもさにもはいあがりて、世間の道理をも、なましくわきまふるに似たれども、うちにはまたしきにたすけられず、ほかにはうききにもちいられずして、年月をむなく、ふるだぬきかうへかぶるに齒齧にして、はらつひみをうちてたのしみ、伏懐葛天氏の民をまたふさいへども、外より見ては、いよやつく敷ふぜいなりけらし、その友利齋さいふ人まめに告て云、先生辯は子眞が明をまたひ、勇は子路が義をならふさいへども、子眞が富の千分一にもあらず、子路が高官のあしもとにもたすまず、ひろく人間世を見るに、先生がオなかはなるものも或は世にもちひられ、時にあひて名はたかくさかんに富は家を潤せり、おもふに、先生が業のつたなきにあらず、心の鮮なるゆへなるべし、先生が心さいつは、我情を情として富貴なるものにかたちをかめ、心をへつらはず、貧賤なるものをいたはり、遊俠のわざにたからなげうち、飲食をおします、自身はやぶれたる短袍をきて、市町をうきつき、綾羅錦繡をきたるむかし友にゆきあひても、先生より不禮をなし、見ぬかほをかきのうちにつむ、是いらざる田子方がおこりにならふて子路によるべはれざる所之(下略)

又是は恐らく作者其の人にて、稜々たる圭角、狷介人に下らざる氣質、さながら目前に見るが如し。みづから而慍齋と號するも『論語』に所謂「人不知而不慍不亦君子乎」の反對の義に取れりとぞ、蓋し自分は君子にあらず、少しばかり蓄へたる才藝も、用ふる所なく、人に知られざれば慍るとなり、これ而慍齋の名の因て起る所といふ。(『百物語評判』)

元隣はみづから隱者を以て居る、髪もたくはへざりしにや、摺子木の讚に、

ある下が身のほかにこそなれ、にくやあたまたま丸し

の語あり。また『小さかづき』の挿繪にも、又是または可不可などいへる、作者の代人はみな坊主頭に羽織を着たる隱者の躰に畫けり。元隣頗る才氣あり、惜い哉健康長く保たず、寛文壬子(十二年)六月廿七日といふに、無常の風にこそはれぬ、享年四十二歳なりきといふ。

もしこれに必ず年をもてせば、いかにかりの事が侍らんに残り多く侍らずや

とは『百物語評判』が、元隣の死を哀悼したる詞なり。げにや元隣をして元祿まで存在せしめば、其の作決して『誰が身の上』、『小さかづき』には止まらじ。元隣一子あり、元想といふ、また季吟の門人にして俳諧師なり。

其二 著述

元隣はほゞ儒釋道の玄理を窺ひ、和漢古今の學にも一貫りすといへども、就中和學古文を得意と

す。俳諧は其の本領なるに拘らず、著書の多分は古文の註釋なり。たとへば、

『百人一首新抄』	三冊
『徒然草鐵槌増補』	六冊
『徒然草別傳』	二冊
『方丈記願書』	一冊
『水鏡抄』	二冊
『風月往來抄』	一冊
『腰懸狀抄』	一冊
『今川抄』	一冊
『四書詳論』●『歷代異考』●『伊勢物語會餘抄』●『大學明德之圖』	
等あり。うち「徒然草鐵槌増補」はもと青木宗胡が、林道春の『野槌』を抜萃して、『鐵槌』四巻を編したるを、元隣更に考察を加へて重撰せしものなり。『徒然草』の註釋としては、『鐵槌増補』は屈指の良書なること世間既に定論あり。	
歌俳の著述には、	
『隨業集大全』	八冊
『寶藏』	五冊
『諸國獨吟』	二冊
『身樂千包』	

『増補食物歌本草』

七冊

『吉野ひざりあるま』(?)

等あり。

『たからぐら』

『たからぐら』は、日用の器物を、見るに随ひ、觸るゝに任せ、いろ／＼の懷を述べ、發句、狂詩もて其の品物を讚したるものにて、すべて七十二章あり、例へば

杓子の讚

身を捨てあまねく物をすくふが爲に杓子を字せり、此故にもろこのほまつもこれにまたびへり、こゝにえせ者有て取て定規として其難をまうく、まかし御意に入まいらせてその果報にあづからんには、猶その風情なまめく人の小手招にこそ月はいも招く手もこは杓子かな

御多賀土産勿郎

老若男女長命址

数奇者雖不誣な

祝賀振舞令一七

の如し、蓋し日用の器物調度を實用的にはあらで、文學的に説明したる所謂俳書なり。卷末に元隣がかねて募集中なりし俳句數百首を附録せり。これ元隣が万句興行の計畫ありしに、病身中途にして其の業を廢す。其の言葉がきにいふ、

左に書加ふる發句ごもは、年ころ人々より、我許へ集にもいるべき云をこせした、多病の身なれば此事いまだ果し待らされば其待つれば心ゆをばりて暫こに罷しをけり、若われ集つくらずして身まからは、後の集あみ出ん好士、其集にいれ

なんこをたのめるのみ

と、これまことに哀れなる詞ならずや、果して元隣は此の翌年にみまかりぬ。

春の部のはじめに、季吟が句あり、

春

元隣万句興行に

御代は万句まづ巻頭のこまし哉

季吟

此の書は、後ち元文四年に再版して、追加の發句を省き、『幸藏』と改題し、拙き序文をさ(加)たるは、あたら業なりかし。元版には、元隣が序文と發句とあり。其の句は、

あめつちやこれ月花のたからぐら

蓋し七十二句、ことごとく月もしくは花をよみこまざるは稀なり。以上は眞面目の著述に屬す。

其三 戯作

元隣が戯作は、

『誰の身の上』

六冊

(明暦三年版)

『小』

六冊

(未詳)

二部に過ぎず、されども、『可笑記』の脈を承けたる名作なり。前にもいへる如く元隣は、老莊の學に心をひそめ、戯作にも其の玄妙を祖述せんと勉めたり。併しながら戯作として元隣の作に取

るべき點は、當時一方には荒唐無稽の神仙談、因果話しの大に榮えたりし反側にたちて、おもに世態人情に眼を注ぎ、卑近なる事實、または俚言をとりて、教訓の意を寓し、世を諷刺したるにあり。其の老莊句調を帯へるは、

孔奈幾箇に太平のうたを吹は耳よりほかに其音遠く指ならざるを以て無何有の月を指はひかりかげを忘たり山を山といふもそもまたせしむるものはたそ

など『誰が身の上』の序文の如し。一編の主意は、自ら省み、自ら戒むにあり。世に心學ものとする教訓草子中の名作なり。『誰が身の上』は、今も人の能く知る所なり。されど此の書は『可笑記』と同じく、いまだ隨筆の跡を脱せず、世間に持囃されしは、教訓の意を寓したるにありて、戯作としては、此の作よりもむしろ、『小さかづき』をまされりとす。

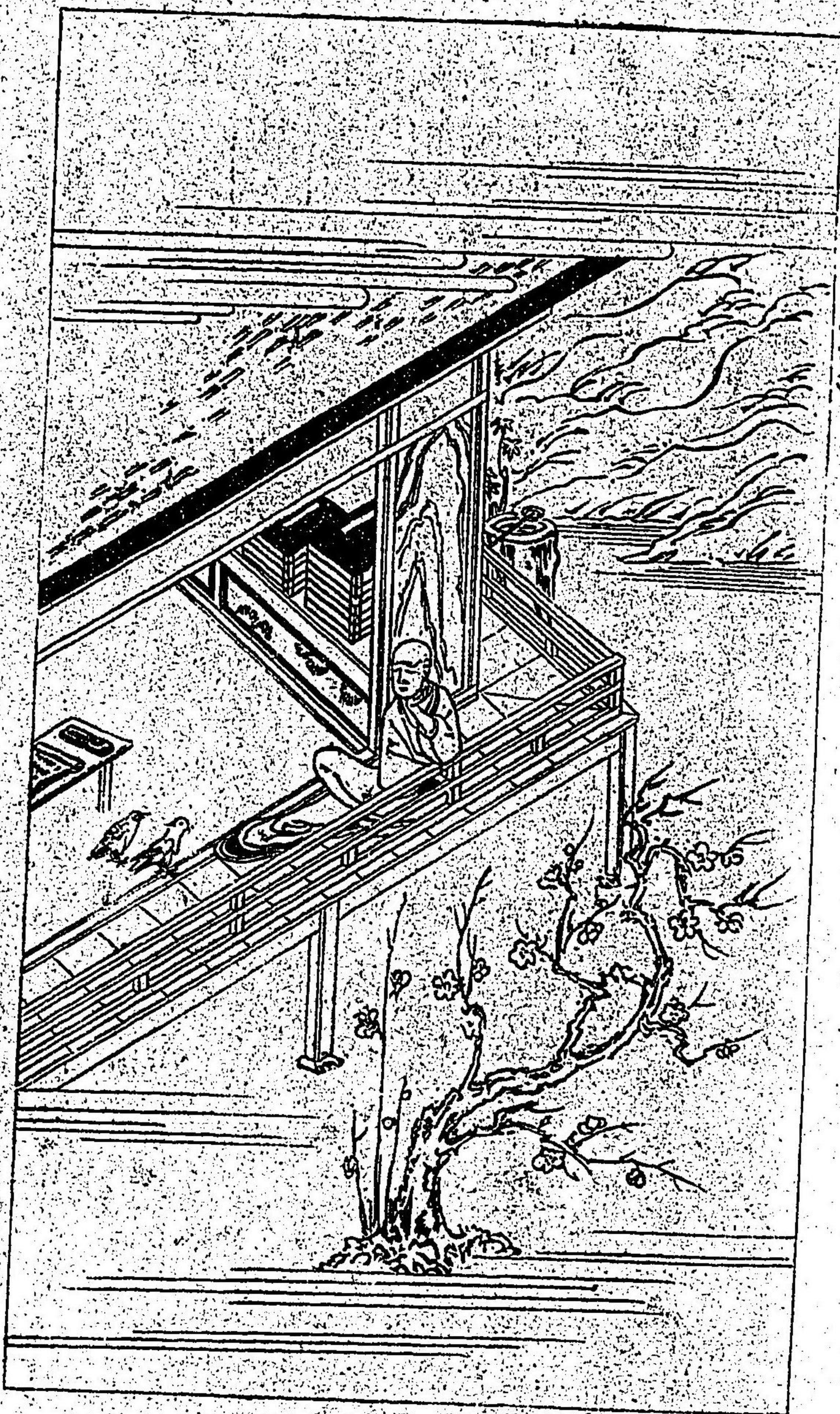
『小さかづき』

『小さかづき』は、板行年月を脱したれども、按ずるに『誰が身の上』(明曆)よりも後、万治または寛文中の板行なるべし。此の作には延寶四年に再版ありて、『あま夜の友』(四冊)と改題せり。然るにいかなる故にや、元本の一、四、五の巻を缺き、二、三の巻のみを四冊にしたなり。恐らく板木の焼失にもや。

序

おもしろしおもしろしこの草子、誰人の作爲ぞや、世間人情の上を滑稽に述べて、頗日用農工夫を明せり、寓言有、重言有、扨

『小盃』挿繪(万治又は寛文)



るべき點は、當時一方には荒唐無稽の神仙談、因果話のみに榮えたりし反側にたちて、おもに世態人情に眼を注ぎ、卑近なる事實、または俚言をとりて、教訓の意を寓し、世を諷刺したるにあり。其の老莊句調を帯べるは、

孔安國曰太平のうたを吹ば耳よりほかに其音遠く指ならざるを以て無何有の月を指はひかりかげを忘たり山を山といふもそもまたせしむるものはたそ

など『誰が身の上』の序文の如し。一編の主意は、自ら省み、自ら戒むにあり。世に心學ものど稱する教訓草子中の名作なり。『誰が身の上』は、今も人の能く知る所なり。されど此の書は『可笑記』と同じく、いまだ隨筆の跡を脱せず、世間に持離されしは、教訓の意を寓したるにありて、戯作としては、此の作よりもむしろ、『小さかづき』をまされりとす。

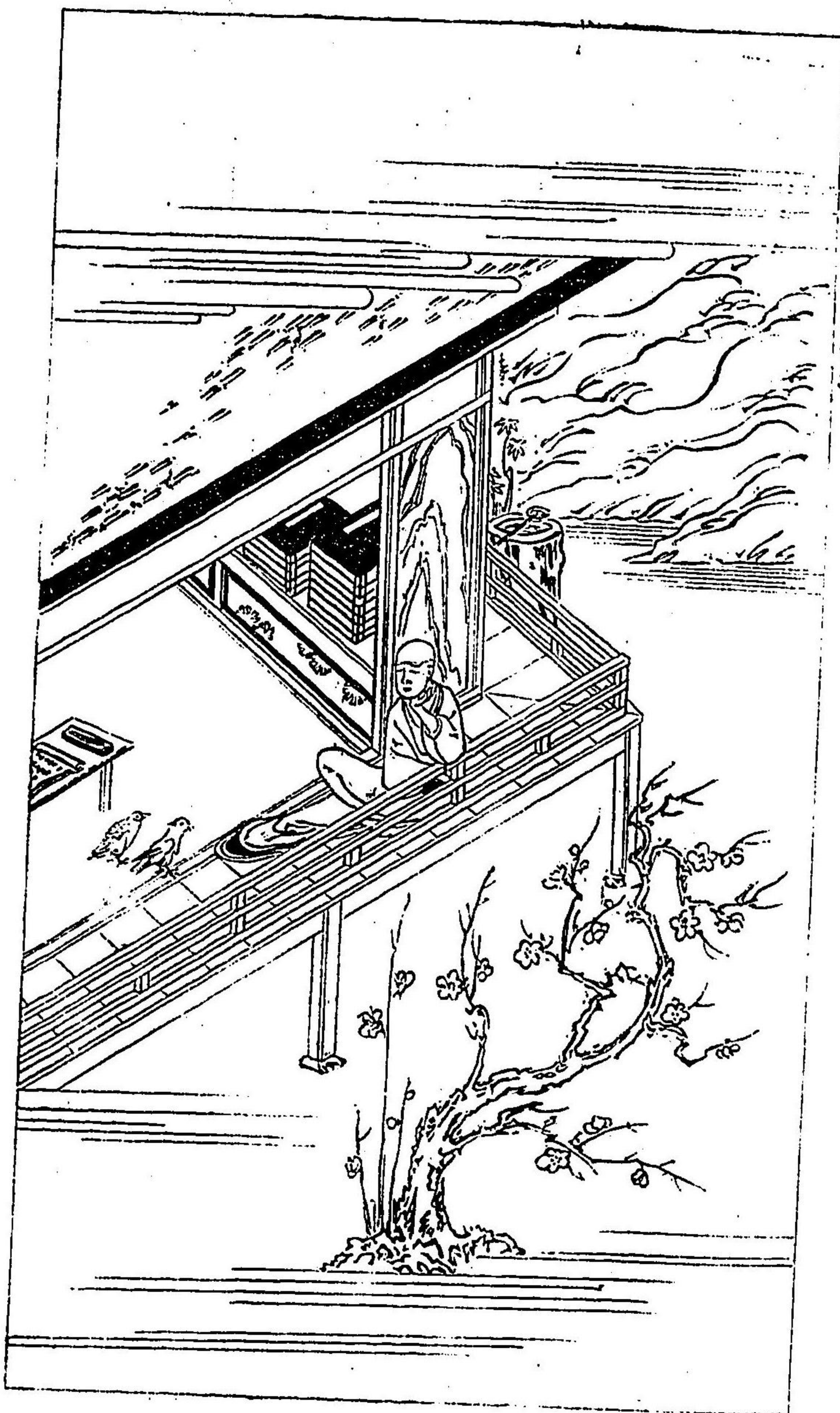
『小さかづき』

『小さかづき』は、板行年月を脱したれども、按ずるに『誰が身の上』(明曆)よりも後、万治または寛文中の板行なるべし。此の作には延寶四年に再版ありて、『あま夜の友』(四冊)と改題せり。然るにいかなる故にや、元本の一、四、五の巻を缺き、二、三の巻のみを四冊にしたり。恐らく板木の焼失にもや。

序

おもしるしおもくろしこの草子、誰人の作爲ぞや、世間人情の上を滑稽に述べて、頗日用農工夫を明せり、寓言有、重言有、巨

『小盃』挿繪(万治又は寛文)



首有、香林子に名を求む、一部の意につきて、小さかづきを名づく

世の人のなきけくみまる小こ尾お下戸したも上戸かみももてあそぶべし

これ『小さかづき』と號けしゆえよしなり。當時は學問の漸く隆盛を極め、かな草子の如きも概ね學者の片手間なれば、戯作一般に學者風を帶ぶ、就中元隣が作に甚だし、たとへば本編の夢物がたりの條の如き其の一例なり。

夢ものがたりとは、さる人の夢に、鶯と雀と巢をつくらんとして庭前の梅の木を争ひ、風風なる聖鳥に訴へ、理非を分たんとす、

其とき鶯と雀とをばしき鳥、さび出て申けるは、かたしけなくもあれにまします聖鳥はつれに千何にかりて鐘聲を見てはくだり、細徳の險微なるをみてははるかに羽うつ事をして、此所に濁世をのびれてすみ給へば今もつて黙然の沙汰聖判あるべきにもあらざれども、二鳥はるく是まて朝せられしうへは、ほいなく、へすへきにもあらざれば、兩鳥ともに其けいつを申あけらるへし、其よろしき方につきて、梅花をまゆれうせさせ、侍るへしといへば、まつ鶯がいはるやう、むかしやまごのくに、高天寺にてすなはち此梅花をやとせしめて初陽毎朝來不相違本栖はつはるのあしたごまにはきたれども、あはでぞかへるもこのすみかにと、いへる名歌を、さへつりてより、古今の序にも、はなになく鶯、水にすむ蛙の歌よめること、のせられしといへば、雀申やう、それがし勸學院のかたはらに、業求を勸學せしおりしも、この事も承候、かの貫之のはなになく鶯水にすむ蛙と、出されしはあながち高天寺の詠吟あるゆへにあらず、有情のなくこそ、たゞそのまゝの歌なりといへるこゝろにぞ侍れ、其ゆへに生さしいけるもの、いづれの歌を、よまさりけるかは決し侍り、わが離れこそよにやん事なきものにて、紫の上おさなき御時、北山にまのびて、すみ給ひし折もてうあいせさせ給ふ事、源氏物語のたりに見へ侍りといへば、鶯また

曰、大學の傳にも、詩云、維維黃鳥止于丘隅、子白於止、知其所止、可以人而不知、鳥乎、(下略)これより鶯雀負けず劣らず、相互ひに自家の徳を稱へ、堅白同異の辨役々として止まず。蓋し其の主意は澆季の世、人々私欲に耽りて、些末を争ふを諷刺したるにあり。然れども作者は却て自家の博識を衒はんとして其の犠牲にあちたる傾きあり。右に掲げたる如き鶯と雀との辯論の長きこと、實に其の紙數六七葉に亘り、作者の弱點を示す。此の誇學風よりも『小さかづき』に取るべき所は、他の短き寓言にあり。たゞ一は

足事をまらざる事付蛙願だての事

たる事をまらざる事、人の一生のたから、あたひをもつて、是をいはい堪忍の忍の字が、百貫せば千貫もすべきものなり(中略)むかしうづまさのほりの池の蛙も、おほくあつまれる中に、大なるおへるのさひ出ていへるやう、われく歌さいひ草といひ、文武二道なげがし仙術にも通ざる身の、泥龜つれを同トやうに、四足をもつてはひまはれる事こそやすかられ、されども天性四足さうまれつきぬる身の、自身のちがらさしては、かなひがたがるべし、いかにもして此所の薬師如來に、大願をかけたまらせ、二足を以てあるき、二つの手をもつて、用事をかなへ、万端の至事となりて、たゞひくちなはなごおひきたるも、一あしも引まりぞかや手を以てふせぎ侍るべしといへば、みなくまがるべしと同トけるに、其中に一つの蛙すゝみ出て申けるは、佛作その報恩の禮儀をまつさしもなければ、若其願かなひ侍らば、なにをかふせにいたすべき、作善なくばいかにあらば、是こそまことにはれたりとて、あるひは水草のはなを牽らんといひ、あるひはいさな塔さくみて佛を供養せんといへるもくちんなりける(中略)みなく此義にかたぶきて一心稱名の大願をおこし一七日さんろしければ、七日満するあけがたに、おほくの蛙二足を以てたしける、いかに自由なるべきとよるべしに、おもひのほかに引かへて、兩眼うしろのかたへなりしは、ゆくべきかたにはまなこなく、まなこあるかたへは、足す

ます、これやこのゆくもかへるの通退こにきはまりければ、またいろく祈願しなをし、からくむかし身になりけるさや、世の中を見るに、われ人ののはづのぐわんだて、なきにしもあらず。右は有りふれたる比喩にて、もとより元隣が想ひ着にめづべき點はなければ、此の一編すべて『伊曾保物語』の物のたゞを引ける條々どほや飯着を同うし、また同書譯文の晦澁にしておもくしき筆の運びまは、よし翻譯の難儀なるにもよるべけれど、元隣が文癖と頗る相肖たるなど、『伊曾保物語』の譯者は或は元隣にあらざるや。たゞ譯者は全く別人とするも、二書ともに寓言の小話を集めたる點は殆ど其の種類を同うせり。

淺井了意

其一 傳

淺井了意は、また其の傳の詳ならざる一人にして、近代に至り其の説區々たり。齊藤月岑が『武江年表』元祿四年の條に、

骨董集に元祿六年印本大張子を引て了意大徳晩年に及んで筆力ます(若健なり元祿四年寂せられしとあるを『大張子』に見えたるは林九成が序文なり、後に出す)淺井了意が事さすまゝに高谷柳亭(種彦)の説に此時代了意といふ人二人あり淺井了意は俗なり今一人の了意は僧なりとに著述の傳ありしとなんこにいふは何れの了意にや詳ならずされど大まかにあるを見れば必ず僧の方なるべし柳亭は筆記なともありしならんを泉下の人となられて問ふよしなきこそほなけれ

曰、大學の傳にも、語云、鸚鵡黃鳥止于丘隅、子白於止、知其所止、可以人而不知、鳥乎、さいへり(下略)
 これより鶯雀負けず劣らず、相互ひに自家の徳を稱へ、堅白同異の辨役々として止まず。蓋し其の主意は澆季の世、人々私欲に耽りて、些末を争ふを諷刺したるにあり。然れども作者は却て自家の博識を銜はんとして其の犠牲にあちたる傾きあり。右に掲げたる如き鶯と雀との辯論の長きこと、實に其の紙數六七葉に亘り、作者の弱點を示す。此の誇學風よりも『小さかつき』に取るべき所は、他の短き或言にあり。たゞ一は

足事なまらざる事付蛙願だての事

たる事なまらざる事、人の一生のたがひ、あたひをもつて、是をいはば塔屋の忍の字が、百貫せば千貫もすべきものなり(中略)むしうづまきのほりの池の蛙ども、おほくあつまれる中に、大なるおほりのさひ出でいへるやう、われく歌といひ軍といひ、文武二道なげがし仙術にも通せる身の、泥龜つれごと同トやうに、四足をもつてはひまはれる事こそやすかられ、されども天性四足さうまれつきぬる身の、自身のちぢらしては、かなひがたかるべし、いかにして此所の薬師如來に、大願をかけたまらせ、二足を以てあるき、二つの手をもつて、用事をかなへ、万端の至事となりて、たさひくちなはなごおひきたるをも、一あしも引まりぞかす手を以てふせき待るべしといへば、みなくまがるべしと同トけるに、其中に二つの蛙す、み出で申けるは、佛位その報恩の禮儀をまつこともなければ、若其願かなひ侍らば、なにをかふせにいたすべき、作善なくしてはいかゞあれば、是こそまことにいはれたりて、あるひは水草のはなを牽らんといひ、あるひはいさごを塔さくみて佛を供養せんといへるもくちくになりける(中略)みなく此義にかたぶきて一心稱名の大願をおこし七日さんろうしければ、七日満するあけがたに、おほくの蛙二足を以てたごにける、いかにかり自由なるべきとよるこびしに、おもひのほか引へて、兩眼うしろのかたへなりしは、ゆくべきがたにはまなごなく、まなごあるがたへは、足す

ます、これやこのゆくもかへるの進退にまはまりければ、またいろく所願しなを、からくむかしの身になりけることや、世の中を見るに、われ人のかほつのがわんだて、なきにしもあらず。
 右は有りふれたる比喻にて、もとより元隣が想ひ着にめづべき點はなけれども、此の一編すべて『伊曾保物語』の物のたゞ一を引ける條々とは、版着を同うし、また同書譯文の晦澁にしておもくしき筆の運びさまは、よし翻譯の難儀なるにもよるべけれど、元隣が文癖と頗る相背たるなど、『伊曾保物語』の譯者は或は元隣にあらざや。たゞ一譯者は全く別人とするも、二書ともに真言の小話を集めたる點は殆ど其の種類を同うせり。

淺井了意

其一 傳

淺井了意は、また其の傳の詳ならざる一人にして、近代に至り其の説區々たり。齋藤月岑が『武江年表』元祿四年の條に、

骨董集に元祿六年印本大聖子を引て了意大徳晚年に及んで筆力ます(老健なり元祿四年寂せられしとあるを)『大聖子』に見えたるは林九成が序文なり、後に出す(淺井了意が事さすまかるに高谷柳亭翁(種彦)の脱に此時代了意といふ人二人あり淺井了意は俗なり今一人の了意は僧なりまことに著述の骨ありしとなんこにいふは何れの了意にや詳ならずされど大まことあるを見れば必ず僧の方なるべし柳亭翁は筆記なまありしならんを泉下の人とせられて問ふよしなきこそほめなけれ

と見えたり。右種彦の説を按ずるに、一人は僧にして佛書などの著述をなし、一人は俗にして名所記、または戯作などの著書ありといふ意なるべし。然るに世に傳ふる了意の作といふを見るにみな僧なる了意一人の手になり、未だ俗なる了意に著述家あるを認めず。蓋し『可笑記評判』の瓢水子は『伽婢子』の瓢水子、松雲にして、又『月見の友』に、松雲子、了意とあれば、瓢水子と了意とは同人なることを知るべし。また『新語園』『十王經直談』『大原談議』等の、真片假名、文の著書には、洛之本性寺昭儀坊、了意と記し、落款には、了意、松雲の二印を捺せば、僧なる了意は、經文などを勿論註釋し、戯作をもものせしこと明なり。但し了意には俗なりし時と、僧なりし時との、生涯には必ず區別あるべし。

了意は松雲子、瓢水等の戯號あり、洛の本性寺昭儀坊に住しきといふ。(洛の本性寺いまだ考へず)都の錦が『御前伽婢子』の序に、

の一向の精僧、眞意新話の抜書を恨み

といへるは、了意が『伽婢子』を指せるにて、其の作者なる了意は、當時洒落の沙門と目せられしこと知るべし。彼の『東海道名所記』には樂阿彌となり、『浮世物語』には浮世坊となりて、所々を遍歴し、人情を探り風俗を察し、種々の失策、滑稽を盡して、研磨圓熟したる釋法師が、遊戯文字に託して、世人の感化に力を致し、こと、如才なき眞宗の僧としては、有り得べきことなるべし。

了意が目的は、世人を導く爲めの方便なるべければ、其の著述は概ね世間的に出來たり、詳しくいへば、如瓢子、元隣などの著作は、世間の爲めよりも自分の爲めに、述懐し、多少鬱憤を泄したる氣味あれども、了意が作には、殆どこれなし。かるが故に其の著述の中には、作者の髣髴たる條すらも認めえず、これ了意の素性の釋ねがたき所以なり。たゞ『可笑記評判』の奥に、

あしひきの山島の尾のながくしき牢人にて墮沈深倒し偶落下に寓居する事百餘日は、旅のねぶたなぐまみに此書に評す

(下略)

于時寛永十四年南呂上癸

瓢水子年之

とあるを見て了意もまた浪人の子などにて、寛永の末に、都にさすらひしことを知るのみ。また同書に、

寛永のころはひ閑居のいさま落下に寓せし時ある人この書をたづまへ來りて余にふめし云々

『可笑記』の作は、寛永十三年にして、板行は同十九年なり。然るに了意は十四年に、これを評すといへり。すなはち板行の前なれば、草稿のうち一讀せりと覺し。またこれに似たる事は、如瓢子が承應四年の述作なる『百八町記』にも了意が加筆ありて、其の板行は寛文四年なり、これも亦草稿中の書入とすれば、同人の著に對し同事實あり、恐らく如瓢子は了意に草稿のうち一讀を許し、了意は亦これに加筆する程の交友ありしなるべし。而して『百八町記』は三教一致を唱ふといへど、佛道の爲めに儒者の説を駁したる事なれば、二子とも、よし未だ一寺の住職

たらざるも、純然たる僧籍にありしことを察せらる、了意は或は黒谷にをりきともいへり、兎に角當時は修業中の身なるべし。

了意は寛永十四年に、他人の書にも評すべき程の學力あれば二十五六三十位の年輩と思はる。了意は如曇子に次て早く世に出で、文學の生涯は鈴木正三に相前後し、もとより元隣よりは先輩なれども、最も世を長うし、元祿まで生存して、彼等が着手したる戯作の業を大成し、こゝに寛文の盛事を致したる假名草子作者の殿なれば、此の時期の最後に其の傳を附せり。

了意は著述を残したる外に、今日まで生涯の事蹟の世間に知れたるは甚だ少し。元祿五年板『狗張子』の序に云ふ、

洛陽本性寺の了意大徳は、きはめて博識強記にして特に文思の才に富り、生平の著述はなほた多し、晩年に及て筆力ますます老健なり、去年庚午の春、往に編纂せる伽婢子の遺せるを拾ひ、漏たるを授けて、狗張子若干卷を作りその續集に擬せんことを、其年の冬に至り、既に七卷を選び輯む、翌年辛未の元旦、意らざるに遽然として寂を示す、都鄙驚歎して深くその才を惜む、願に凡そ人の性情、その徳性を哀慕すといへども幽明途殊にして復みるべからざれば、かならずその生平の文字筆墨を尋ねて面晤に換るのみ、それ此書は了意大徳晩年思ひを究め、精を研きて筆作せる眞跡にして、是實に大徳遺訓の形見なるを、是故に今その眞跡一字もあらためず、梓にちりばめ世に行ふ云々、

元祿四年辛未十一月

義端 謹序

これにて了意は元祿四年正月元日に身まかりしことを知るべし。寛永十四年『可笑記評判』を作りし時を、假りに二十六歳とすれば、元祿四年は八十歳の高齡なり、其の遽然として寂すといふ

にて、餘程の老年に達し、苦痛もなく眠れるが如き、死状を察す。義端は林九兵衛とて、京都の書肆の主人なり、また戯作二三部あれば、後章に畧傳を附す。

其二 著述

了意が佛書の註釋は其の數極めて多く、一々就て見るべき機會を得ざりしが、三四部を見るに、概ね延寶以後の著にして、佛書ならざるも、本性寺釋了意と銘打たる書は此の頃のものに多く、また戯作を見れば、寛文以前のもの多し、されば晩年には一寺の住職となり、眞面目なる註釋等に心を潜めて、草子類にはむしろ筆を著けざりしに似たり。いま年月の順序には拘らず、了意が著と知られたる書目を擧ぐれば第一に佛書、

假名草子

『大經鼓吹』	六册	『天子傳備考』	三十册
『恩重經和談抄』	五册	『阿彌陀經鼓吹』	十八册
『法林樵談』	十册	『大原談義句解』	十册
『往生直談』	十五册	『孟蘭盆經直談』	十九册
『勤經鼓吹』	三十册	『愚迷發心集直談』	六册
『勤化往生傳』	六册	『勤修念佛集』	一册
『勤化要文便蒙抄』	十册	『勤化大綱抄』	八册
『十王經直談』	十五册		

第二には軍書、

『太平記首書』 二十五冊 『北條九代記』 十二冊
 『將軍平記』 十五冊 『鎌倉九代記』 十三冊
 第三にば古文註釋、
 『源氏雲隱抄』 九冊 『伊勢物語抄』 十冊
 『徒然草諸抄大成』 二十冊 『百人一首頭書』 二冊
 右諸抄大成は淺香山井軒とあれば、了意がこなるべしといふ、そは香山を除けば淺井となり、また淺香山井といふ人當時になければなり。
 なほ『武家根元』『靈寶藥性能毒』『連歌初心抄』等は、右のいづれへも屬すべからざれど、これらは了意が著述の裏面目の部類を表し、本史の區域外にあれば、精しくはいはず。次には教訓を主としたる假名草子なり。

其三 教訓草子

徳川氏のはじめまでは、教訓書として一般に讀むべき書としては甚だ少かりしが、寛永の末より正保、万治、寛文の頃に至り、漢書より修身の助けになるべき書ども、追々に假名文にて板行せられ、こゝに教訓草子の流行を見るに至りぬ。殊に此の教訓草子の一部は、全く婦女の爲めに作せられき。たゞ一ば中江藤樹の『鑑草』の如き、季吟の『唐の烈女傳』の如き、辻原元甫が『女四書』の如きは其の一例なれども、みな當代の學者が、假名草子に筆を着けて、婦女の教に心を注

ぎしは、女學史に特筆すべき事蹟なりとす。而して了意は、これら教訓草子作家の領袖にして、其の著頗る多く、又文章の平易なるは、當時幼稚なる知識を啓發するに、いかばかり効力ありしかは、今より想像すべからざるも、了意の作の盛に行はれしは、其の一證といふべし。了意が教訓草子は次の目次の如し。

- 『孝行物語』 六冊 (万治三年版)
- 『堪忍記』 八冊 (同年版)
- 『本朝女鑑』 十二冊 (寛文元年版)
- 『天和二十四孝』 十二冊
- 『新語』 十冊

右は聖賢、勇士、烈女の事蹟、忠孝貞淑の行爲等、苟も風教を益する物語、又は女式、女禮すべて女の心得となるべきことながらを、和漢古今の書より拔萃し、材を選び類を分ちて、文を潤飾し、面白く綴りなして、讀書の樂みのうちに教へを授くべき假名草子なり。『堪忍記』の如きは大小二版あり、万治頃出版せしを最初のものとし、寛文四年版は再版なるべく、同八年には又江戸大傳馬町鱗形屋にて、挿繪を師宣風に改め、版を新たに刻して賣出したるは三版なるべし。これらは當時にありては希有の事實にして、了意が書の持離されしこと知るべし。

當時はよし間接には幕府より一般人民の教育を奨励したるにせよ、直接には毫も干渉せず、然る

に是等の先輩が夙に眼を教育に注ぎ、私に修身書を著はし、世道人心を益せしとは教育家の着目すべき事實なり。而して後世にまで記憶せらるゝはひとり具原益軒とす。益軒が假名文にて教訓書を綴りしをもて、後世益軒を本邦修身書の鼻祖の如く稱ふれども、益軒の事業は、既に其の以前に寛文に了意が成したる事業を、やゝかたくるしく再びせるに外ならず。益軒が同時代の人より不見識と嘲けられしも、其の理由はこゝにあり、蓋し益軒は着眼に異なる點はあれども、其の道中記といひ、又かな文の教訓書といひ、了意より學びし所少からず。了意が繪入にして戯作者ぶりにものしたるを、益軒は學者ぶりに翻したるなり、而して了意が此の先業あることは殆ど知るもの稀なり。

『堪忍記』の文

空也上人忍辱の行の事

むかし空也上人はねんぶつの大信心にてまひふかくおほしけりある時六はらの庵を出て京のかたへおほしけるに五條のはしをわたり給ひしをわがき男共あそびて橋の上になまかりこゝなる法師のなまめんだうさまとてやぶれたる馬のくつにて御かほをまたたかに打奉る又かたはらよりたゞ打たをしてふみに下れなご申けるをまかくにげのびてきて人にかたり給はく我ひこゝろたもちける忍辱の行をつぬにぞやうとゆせしともちざりしをたゞ今五條の橋のうへにて人にさんくうたれ侍りけれ共すこしもはらのたつ事なきにて此行をばぞやうとゆせりぞ覺えたりさかたり給へりかゝるたうさま上人の御まがめおはせぬをせびなく打奉るものは是大悪人ならずや四十二堂經に悪人の賢者を害するは猶天にあふきてつばきはくこゝろこつはき天をけがさすかへつてたのれが身をけがさすいへり太公がいばく人をやぶるのこゝろこつはくへつて是みづからやぶる血を

ふくみて人にふきかればまづみづからの口をけがさすいへりたさへは火のこゝろをやくこゝろしはらはされ共をのづからきゆるこれやくへき味のみまかゆへに我心を空にしてきりさるるこゝろくみさるるこゝろくすればたゞいたつらにそしる人のくちひるさまたさのこゝろはかりにしてつぬにそしりさるるものこゝ

同書七去三従の説のうち

榮啓期が三樂の事

榮啓期が孔子にかりける三樂の中におなし人間と生るゝ所男女のかはり有女は我身ながら身を人にまかせて我心のまゝならすすてに我は男に生れてよふつ心にまかする是ひこつたのしみなりと申せしはいにしへも今も女はまこにうれいのあつまるみなもこにあらずや

孝不孝の評判の事

母のまじわがくてやもめさなりうしろの園に家つくりて子にやしなはれてすみけるを畑をこまてかよふおつさあり子これを聞つけて其ほりに橋をかけてかよひやすからん事を思ひしには、ははつがしくて身をなけて死けり橋をけし心まじかへつて不孝と我子これをしは母はつがしからさらんやたゞまらざる体にて有へしと評せられたり

又『本朝女鑑』は門を分ちて

賢明部 仁智部 節義部
貞行部 辨通部 女式

の六部となし、上は玉だれのうちより下は柴の戸ぼそにいたるまで、本朝古今世に傳はりし烈女の行蹟を集めて訓誡を施し、婦女子の心をみがく鑑とす。

紅梅の女房 (辨通下の六)

後一丁のぬんの御まきに、ある女房のいゝに、こゝはのありけるなきに、しめしなよはれ、だいらよりとてほりにつひはし給ひけるに、かのむちにうくひすのすなをけて待へりしは、ある丁の女房、まづ、やうにぞうし給へて

ちよくなればいさもかしくうぐひすのやまはささはいかにたへん
かく、そうさせければ、おほきにかん下けうさせ給ひて、ほらせられ侍へらす、女房はいかなるものぞとつれさせ給ふ、またかにもなのり申さず、たゞ世にありわぶるまづのめのはてなりと申ける、まことむらかみの御宇にあづまにながされし、うたいへんさきすけが、つきの世をわびてすみけるさ、きこえし

第五には名所記および職作なり、そもく丁意が著述は職作をもてはじまりぬ。後世には、其の作として傳はるもの、外に、なほあまたあるべし、ゆゑにまた何年頃より作りはじめしかを詳にせざれども、『棠陰比事物語』の如きを、丁意などの假名文に直したりとすれば、慶安二年頃に板行のものあり、此の物語は文勢より推して或は丁意の作ならんか、といふ考の外に證とすべき點なし。然れども如備子が『可笑記』を評判したるは、寛永十四年（慶安の初より凡十年前）にあり、また『百八町肥』の加筆は承應四年（慶安の後四五年）にあれば、既に慶安前後に著述あることは明なり。但し最も多く板行せられしは、万治寛文の間にして、これ丁意が全盛の時期なり。

『可笑記評判』 十冊 (万治三年板)

これはたゞ『可笑記』の詞を更に敷衍し、或は誤れるを正し、著者の意見を評したるに過ぎざれども、如備子と丁意との別人なることを證する爲めに、前の『可笑記』の例に擧げたる一章の評



『本朝女鑑』挿繪(寛文)

後一でうのわんの御さまに、ある女房のいゝにこうばいのありけるなきこしめしをよばれ、だいらよりきてほりにつかはし給ひけるに、かのむめにうくひすのすなかけて侍べりしかば、あるトの女房、まづかやうにさうし給へとて

ちよくなればいともかこしうぐひすのやまはささはいかこたへん
かく、そうさせければ、おほきにかん下けうせさせ給ひて、ほらせられ侍へらす、女房はいかなるものぞきたつれさせ給ふ、まだかにもなりの申さす、たゞ世にありわぶるまづのめのはてなりと申ける、まことむらかみの御宇にあつまにながされし、うだいへんさすけがつまの世をわびてすみけるこ、きこえし

第五には名所記および戯作なり、そもく了意が著述は戯作をもてはじまりぬ。後世にほゞ其の作として傳はるもの、外に、なほあまたあるべし、ゆゑにまた何年頃より作りはじめしかを詳にせざれども、『棠陰比事物語』の如きを、了意などの假名文に直したりとすれば、慶安二年頃に板行のものあり、此の物語は文勢より推して或は了意の作ならんか、といふ考の外に證とすべき點なし。然れども如儡子が『可笑記』を評判したるは、寛永十四年（慶安の初より凡十年前）にあり、また『百八町記』の加筆は承應四年（慶安の後四五年）にあれば、既に慶安前後に著述あることは明なり。但し最も多く板行せられしは、万治寛文の間にして、これ了意が全盛の時期なり。

『可笑記評判』 十冊 (万治三年板)

これはたゞ『可笑記』の詞を更に敷衍し、或は誤れるを正し、著者の意見を評したるに過ぎざれども、如儡子と了意との別人なることを證する爲めに、前の『可笑記』の例に擧げたる一章の評



『本朝女鑑』挿繪(寛文)



判をこゝに示す。

評曰をよそ書籍を述作するにはみなその感ずるところあるによつておこるさいへりされば神農八卦を畫がき給ひしは河圖洛書を得給へるにおこり(中略)韓非は秦にさらはれて難言をつくりし類なり今の可笑記は盤感星の出しこゝを聞つたへて書たるよしみえたりこのほしめゆれば文武の兩道めつきやくすへきよし曆書にありされども永祿二年にこのほし出たる事記録に見えずかゝる大事の天變ならば年代記にもつきすべしすてに年代記にもなし若此星のみえたる事もあるべけれ共他國の天へんなる事もあるべし(中略)さればこそ永祿以來文武二道滅却したり共おほへす中へより王道をさるへて武家より世をおさむる事又これ永祿以前頼朝の時よりの事なり云々
いやしきよりさりあがりて家老出頭になるもの人なみの人にはあらざる事目のまへにみえたりよき人の子なりとも愚鈍ならばいかせん次にこのへあがりの家老出頭のわざにて神佛二道をやよりたりさいふ事つめにいかなる大名の家にはありき聞つたへす随分まわき大名たりき聞ゆるもその國の宮寺をば修理しんりうはま給ふなり新作邪惡の宗旨はんとやうさはもし吉和支丹の事歟この法御政道はその種をたちたりされば目にもみえぬ事をなに博士とやらんが口にまかせていひけることを聞つたへこれを懸離して可笑記をつくり背理にあたりてよましむさいへりせがれがためにわらはるべきほどにはづかしからんことをば筆にはいひてあらはし遣ふとし又後生おそるべしこの故に卑下するまならは後生はさもあれまづ今の世にたしゆる書なり今の世に對して名づくべき事也

【東海道名所記】 六册 (年月未詳)

も此の頃の板行なりといふ、こは治く世の知るどころなれば費せず、同じ名所記にて

【江戸名所記】 七册 (寛文二年板)

【京名所記】 七册 (同五年板)

等あり。前者は『東海道名所記』と同じ体にて、二人の同行が江戸の名所を回るといふ趣向なり。後者はこれよりさき明暦四年板(万治元)の中川喜雲が『京わらべ』に倣ひ、其の泄れたる京都の町々、名所古跡の絶えたるまでを補ひたりといふ。されど喜雲の『京わらべ』の右に一步を出でれば、これらは了意が間に合せの作るなべし。

『江戸名所記』の文

谷中清水稻荷

谷中清水のいなりはむかし弘法大師御修行の時此所をさほり給ひしに大に喉がはき給ふ一人の廻り水桶をいたゞき遠き所より水を汲てはこぶ大師このうばに水をこひ給ふ願いたはしくおもひ奉りて水をまいらせていはくこの所更に水なしわが年きはまりて遠きころの水をばこぶ事いさくるしきよしなかり申しけり又一人の子あり年ころわづらひふせりてうばがやしなひもしく侍へるを歎きければ大師あはれみ給ひ獨站をもつて地をほり給へばたちまちに清水わき出たりしそのあちはひ甘露のこまぐ又はひや、かに冬は温也いかなる炎天にもかほくこまなし大師又みづからこの稻荷明神を勧請し給ひけりうばの子此水をもつて身をあらふに病すみやかにいへたりそれよりこのかた此水にてあらふものはよくもるくやまひいへずさいふこまなしこの故に清水のいなり申す又人の家たちつゞきてすなはちこまを清水町と名づく神木は杉なり千載集傳郡有慶の歌に

いなり山まるしの杉のさしふりてみづのみやしる神さびにけり
こまみしも時にさりてはおもひあはせらる

あらへたどけがれにこる人こるまみづのいなり神のまにこ
来てみればいなりのまみづ庭澄てやさる月さへくまなかりけり

了意が名所記は、文章には潤色あれども、事實は傳聞を其の儘記したれば、右の一話の如きも寺の縁起などにやあらん、傳聞に架空の事あるは是非もなし、風俗人情は寛文時代を表し、記事も大略は後世の事實として見るべきもの多し。當時交通の開けざる時にあたりて、旅行者を益せしこと少からず。作者もまた自ら世人を助け導く志にて、著はしなれば、後世の名所圖會とは異なりて、教訓の意を含みしことは、處々に挿みたる狂歌にてもまらる、此の類の書にては、もとより『東海道名所記』は名作なり。

『伽婢子』

十三册

(寛文六年)

『伽婢子』は、支那小説『剪燈新話』中の幾條の譚を基礎として、他よりこれに似たる神仙奇怪の譚を輯む、然れども作者が大體に於て『剪燈新話』を翻案したること其の序文に明なり。『剪燈新話』より取りたる條も、今嚴格にいふ翻譯にはあらず、國所姓名を我邦に直し、大意を酌みて省略字句に拘泥せず、かるが故に文もまた自在にして、趣味頗る深し。

眞紅の繫帶

『剪燈新話』中金鳳釵の譚なり、越前國敦賀に、濱田長八といふ有徳人ありて、一人の娘をもてり、其の隣家に槍垣平太といふ商人あり、一人の子を平次と名づく、長八が姉娘と許嫁の約あり、其のまるしに眞紅の繫帶ひとつ娘にとらせたり、然るに槍垣平次京都に上り五年が間歸らず、娘は十九の年、待たれて病の床に臥し、つひにむなしくなりければ、小鹽といふ處の寺に埋み、母

は平次がつかはしける眞紅の帯を黄泉までも見よかしとてむなしき娘が腰にむすびておくりける、三十日あまりの後、平次はやがて歸り來りぬ。

激田夫婦なみだながしていふやう、姉むすめは、そのころよりその御事を思ひあこがれ病をうけて去ぬる月の初めつた、つひにむなしくなり侍へり、久しくたよりのなかりつる事を、まこと恨み思ひけむ、これ見給へ現のふたに書をきたりさて、なく／＼さり出して平次にみせたり、その歌に

せめてやは香をたにはほむめのはなまらぬ山ちのおくにさくとも

平次これをみるに、我身のつらさ今さらに思ひまられてかなしき事かきりなし

かくて姉が執着心は彼の眞紅の繫帯に纏はり、これより妹の上に移り、平次は毎夜妹と契りをかはし、が、此の妹と思ひしは姉の妄念にて、妹は此の間病の床に臥して去らず、遂に病人は亡姉が所爲なることを口ばしり、親の許しを蒙りて、平次と夫婦になるといふ筋なり。彼の牡丹灯籠と同じ趣向にて、ともに亡骸と契りを結ぶにあり。其の他龍宮上棟といひ、十津川の仙境といひ、すべて實際に有り得べからざる荒唐無稽の物語を集む。

『香呂利狂歌話』 五冊 (年月未詳)

『百物語』 二冊 (万治二年版)

右二書は寛文頃の話し本にて、ともに狂歌に關する面白き逸話あり。後者は別に了意の作といふ證なければども、文勢殆ど前者と同じければこゝに附す。此の外明曆三年江戸大火の慘狀を記したるは

『武蔵殿』 二冊 (万治四年版)

にて、又何時の事かを詳にせざれど、地震の記には、

『うなめ石』 三冊 (年月未詳)

あり。

『安部晴明記』 七冊 (同)

は、晴明が一代記四巻と「人相之巻」「日取之巻」「天文之巻」の三巻にして、占方の大略を記したる書なり。

『浮世物語』 六冊 (延寶九年版)

は戯作として了意が作中の面白きものなり。如鶴子の『可笑記』元隣の二作同様、材を世話に取リ、隨筆の跡を脱して、やゝ小説の跡に近けり。これには主人公浮世房ありて、世の中の事に觸れ、悪しきことを諷諫する仕組にて、『東海道名所記』の樂阿彌、西鶴が『一代男』の世の助の如く、たゞ一編に連繫する方便に使ひたる人物たるにせよ、一進歩といはざるべからず。其の起筆に「浮世といふ事」を解釋してらふ。

今はむかし國風の歌に、いな物ぢやこゝろはわれがものなれど、まゝにならぬはさ、たがきもいやしきも、おまこも女も老たるもわがきも、昔うたひ侍へる、思ふ事かなはればこそ、うき世なれといふ歌も侍へり、よるづにつけて、こゝろにかなはずまゝにならればこそ、浮世さはいふめれ、香をへだて、眼を掻きかや、痒きをこるに手のこゝろをこくもあたるやうにして、ゆきたらす洗滌なものにて、我ながら身も心もわがまゝにならず、いな物なり、まして世の中の事ひもつとも、わが

氣にかなふことなし、されば「ネラキ世なれといへば、いやその義理ではない、世にすめばなにはにつけて、よしあしを見
 まく事、みなおもしろく、一寸ききは闇なり、なんの絲瓜（ひょうたん）の皮思ひおきは、腹の病當座（あた）にやらして、月露花紅葉にうち
 むっひ、歌をうたひ酒のみ浮（う）にういて、ながさみ手まへのすり切も苦にならず、まづみいらぬ、こゝろだての水の流るゝ、
 飄（う）のこころなる、これを浮世と名づくるなりといへるを、それ者は聞て、誠にそれくさかんとけり

蓋し「思ふことまゝならぬを憂き世」といへる詞の外に、うき世といふ事を説明したるにて、たと
 へ諧謔の意義たるにせよ、善悪共に明日をも定めがたきを、人々たゞ今日の事とのみ考へ、淫樂に
 耽りてうか／＼と暮らす状を浮世と名づけしに外ならず。これ後に起るべき、西鶴、其積等が寫
 す戯作の世界をいひ盡したるものにて、實に浮世草子の名の因める所といふべし。

浮世房とはうきにういたる瓢金なる法師にて、はじめは瓢太郎といひ、若き時は放蕩を盡し、或は
 博奕の仲間に入り、或は傾城買の樂に耽り、一たびは歩若黨ともなりしを、やがて他人と喧嘩し
 て牢人し、髪を剃りて浮世房と名乗り、侏儒となり、大名に仕へ、滑稽に托して君を諷め、世を諷
 諷す。其の容貌の醜きが如き、また諸大名を經めぐりて諷諫するが如き、『伊曾保物語』とは趣向
 を同らせり。されども浮世房は伊曾保のまじめなるよりも、むしろ曾呂利新左衛門のおどけたる
 に似たり。

『あかうそ』 一冊

(元禄十六年版)

『あかうそ』は了意の遺稿にして、『月見の友』の追加に版行したりといふ。『月見の友』は一名を『犬

延寶九年板『浮世物語』挿繪



つれづれと稱して、著者を詳にせず、男女の身だしなみ、または世渡り家事などの心得を教訓したる隨筆なり。『わかうそ』は老莊の意を述べたる寓言二三編を収めたる小冊子なり。

以上丁意は近代の一大著述家にして、學は八宗を兼ね、和漢古今に通じ、和歌の道にも入り、殊に滑稽の才に長じ、狂歌をよくし、戯作の中に挿入せるもの少からず、然れども丁意が特色殆どなく、一も自己娛樂の爲めに文字を弄せず、一意解義説明、教訓諷刺して、汲々として世人を導くに任ず、丁意が著述の目的たる全く衆生濟度の意に出でたりとすれば、能く其の本願を遂げたりといはざるべからず。蓋し寛永以降如備子、正三、元隣など出で、一方には一休を祖述して、佛教の無常觀を説き、一方には兼好を學びて、老莊が虛無自然を唱ふ、丁意はすべて現代の諸分子を併呑して、自家の立脚地となし、寛文に至りかな草子の大成をなし、其の解し易く面白き文章にて、最も多く讀者を有したればなり。もし彼の三子を川とすれば、丁意は海の如し、但し漠然と廣きに亘り、一も自家の創見を認めず、これ又當代の學者を代表し、作者を代表するものといふべき歟。文章は漢文より脱出し、古文よりも『太平記』等の軍書に取り、迂曲を避けて、簡明を旨とす、森嚴莊大の趣致を缺きたりといへども、洒脱流暢にして、容易く得がたき能文家と稱すべし。

第三章 浮世草子

(天和より明和に至る凡八十年間)

前章にも述べたるが、寛文の假名草子は一般に文學思想を普及するには力ありたれども、此の間には未だ創意に出でたる戯作なく、或は案を翻へし、或は文章を譯し、また一觀念を遊戯文字にあらはしたるに過ぎず、隨て文章もまた引例に見ゆるが如く、概ね此の頃の草子には、歌を挿み、解り易けれども侍ることばを用ひ、全く古き物語の體にならひ、然らざれば漢文の語氣を帯び、はた法語問答の體にならへるなど、當代を表すべき一様の文體になしといふも可なり。されど寛文の假名草子には、彼の王朝の物語が作者の地位につれて貴族臭味を帯び、宮中を代表せしが如く、當時の作者はあほむね侍のなれの果、または僧侶にありしかば、よの／＼其の階級を代表して、武家、佛者の好尚に適し、一般の社會をあらはさず。蓋し寛文は武家と僧侶の榮えたる割合に、平民は未だ振はず、かるが故に其を代表すべき文學を有せざりしも、延寶、天和に至りては、平民の勢力漸く加り、芝居流行り、遊里賑ひて其の状ものづから文學にあらはれ、戯作の特質も、文章も、一般の好尚に適するものとなりぬ。これ實に浮世草子にして、此の草子の發生地は、また當時最も町人の榮えたる大阪なりき。

浮世草子の名稱

浮世草子の特質は、古事、または怪異の物語ならぬ、當世の人情風俗を俗文もて綴れる戯作の總稱なり。そも／＼浮世草子の起原は如儡子の『可笑記』、元隣が『誰が身の上』、『小さかつき』など兎も角も當世の事態に着眼したる、其の端緒を發きたるものといはざるべからず。丁意の『浮世物語』に至りて、浮世の意義を説明し、浮世といふ文字の、狹斜の事情、漂客の痴態、さては今日の風俗を寫せる草子に被らすべき適當の題目とはなりぬ。されどこれ一編の標題に止り、未だ此の種の草子の總稱とはならず。其の何時より一般に唱へられしかは詳ならずとも、其頃の詞に、

傾城色三味線、又は曲三味線、禁煙氣の類のなきまみの書、各々様の御意にいり八文字屋は是より浮世本、評判本の名取りのやうに罷りなり云々

西鶴一流の戯作が、此頃既に浮世本にて通用せしことを知るべし。これより後に其嗣が『翁草』には、

八文字屋自笑の浮世双紙の編者に、江島屋其賣といへるあり、よく世の情をのぶ、

とありて、浮世双紙の題目や、判然と定まりぬ。

浮世草子は、既に『可笑記』に端を發きたれども、其の後明暦、万治の頃、女郎の名寄、延寶に至りては畠山笑山が『色道大鑑』等の諸材を集め、天和に至り井原西鶴が『好色一代男』となりて、はじめて元祿に榮ゆるに至れり、そは次なる井原西鶴の條に譲る。

井原西鶴

其一 緒言

當代に至り、普くは知られざりし文人の廣く世に知られし、一二のみならず、西鶴の如きまた其の一人なり。然れども徳川時代には戯作者輕視せられしかば傳記の傳はれる甚だ尠し、隨うて西鶴が詳傳あるなく、たま〜梅園堂、曲亭主人等が評論、及び其の他の記事にて、僅に其の一斑を窺ふに過ぎず。そも〜西鶴はいかなる家に生れしか。彼の西鶴を紹介せし淡島寒月氏の説(?)に西鶴は俗稱を平太夫といへり、平太夫といふ名より推せば、或は浪人のなれの果などにやありけん、又聞にきくぬ。果して然らんに思ひ當る節のなきにもあらず、『好色二代男』にいはいく

二本道具の大名も此の身變る事なし、先手はいく〜聲かけれども、天下町人の氣儘は足早にも除けず。と。其の語氣、今は町人になり下りたれども、もとは是れでも武士なりといふに似て、天下町人の氣儘といへるうちには無限の不平、否、負惜しみの見えて索性志のばるるなり。さはいへ馬琴が『燕石襟志』には「年來久しく大阪錦屋町に住けり」とあれば、永く市井の間に住まひしうち、あつから町人の風に染み、いつしか却りて其の社會の加擔人となり。

町人の末々まで脇指といふ物さしけるによりて、言分喧嘩もなく治りぬ、世に武士の外刃物さすことならずば、小兵なる者は大男の力の強きに、何時までも翻られものになるべき、一腰忍ろしく人に心をおくによりて、いかなる闇の夜も獨は通

るぞかし(好色一代女)

など時めける武士の跋扈を憤りては、彼等町人の爲に氣焔を吐き、さて一方には貧弱のものに同情を表して、乞食までを憫み、

相の山の袖乞までも心長く道者の機嫌をとりて肌す寒からず、身に粗布を飾り、連引の三味線に乗せて淡ましや心ひこつといふ一節、いつ聞てもかはらず、此一里のうち殊さらけに敵にもなれり、世に錢ほごおもしろき物はなし、あまたの購券りはあれども遂に此乞食のたんのうする程錢さらせし人なし、思へばわづかのこまなるによるこはせたまものなり(日本永代蔵)

一步違へば武士なればとて用舎はなきぞ、と脇差の柄に手をかけ、又或時は小兒も慣れやすき程の温顔慈容は、此の法師のもちまへ、思ふに彼れが任侠の性は、武士の牛後に列せんよりはむしろ町人の雞口に身をまきて、一世を諷弄せしものか。これ當代下流の人情に適ひし所以なるべし。つら〜西鶴が生れたる大坂當時の状況を考ふるに、三府の中此の府ほど町人の勢力を得たりしはなし。蓋し江戸は幕府の直管せし所なれば、武士の勢力は天下に冠たり。殊に元祿は武威盛なる頃なれば、此の府の町人は未だ充分に肩身廣からず、さてまた京都は王城、輦轂の下にして、所司代が意を用ひて政を施したる所なれば、こゝにも町人は頭を擡ぐるこゝ能はざりき。然るにひとり大坂には特別の事情あり、こゝには上より壓制を違うする程の大頭なく、殊に豊臣氏の遺民を慰撫すべき手加減もありたるべければ、城代はあれども、彼等は封建時代の國主といはんよ

りはむしろ保護者ともいふべき地位に立てり。さればこれが支配の下にある町人は自然と伸び上り、縦令今日いふ自由は得ざりしも、生活の自由ほどを得たること此の府民に如くものなく、大威張にて豪遊奢侈を競ひ、やしもすれば武士を凌ぐの氣風ありき。まことに專政時代には稀なる自由郷なりしかば、西鶴が不羈奔放の氣象は、此の空氣に養はれてます／＼粗豪になり、

世の中に市着切も腹の中からのそれ者にもあらず、百菊作るによつて花鬘下て咲出づる、平野の上人に備はれば、里人其まゝ有難し、公家も裝束無しには、膏藥賣の顔の白いものなり、一切の人間其職に移せばうつるものぞかし(『二代男』)

など、上下貴賤の階級を蔑視して、人間を平等に見做したるは、當時の大坂思想を代表したるものなり。もとより何故に此の世の中に階級といふもの存するか、何故に武士ひとり尊く、町人其の他は卑しきか、そこらに深き考ありて然りしにはあらざらめど、唯漠然と其の理由なきを疑ひ、

諸大名にはいかなる種を前生に轉給へるごにぞ有ける、万事の自由を見しときは、目前の佛といふてまた外なし、さればごに世に大名の御知行、百貳拾万石を五百石より釋迦如来入滅此のわたいまに永々勘定したて見るに、これを取つくとゞいふ(『永代藏』)

など、武士の祖先が鎗一筋の功名の、いかに永久無限に續くべきかを驚歎したる、やゝ社會主義の傾向あり、これを貴族の特權に對してはじめて鼎の輕重を試みし聲といふべく、幾分か平民主義の發達をも認むべし。然れども因襲の久しき、まかも元祿の樂天主義の風中に、彼の紳士といふ

ものがアダム、イザの當時にもありしかと問ふやうな極端論者の生るべき理由なければ、時勢と共に此の主義は泣寝入となりて、彼れ西鶴も此の疑問を解く能はず、已むを得ず自然の人徳に皈して、更に前の言葉をつゞけ、「大人小人の違ひ各別世界は廣し」と結びたる、流石に時代の見なりけり。彼れが實際的の眼にも到底世界は道理ばかりを以て推すべからず、幽冥のうちにあのづから不可思議の力あり、賤しけれども町人は町人の境遇に満足するより外なしと、敢て非望を懐かざりしは、これ西鶴の悟道なるべく、堅くいは、平等のうち差別を認めたるがゆゑなるべし。平等にして差別あり、凡て物の極端に走せざるは西鶴が本來の主義なり。更に西鶴が日常の生活に對する意見を探るに、また此の主義の實行に外ならず。これを正風の頭陀袋主義に比すれば兩者の差著きを見るべし。彼の其角が深川の住居は、僅に八疊敷一間にて、壁に丸穴を明けて出山の釋迦を安置し、鍋一つ、炮烙一つの外何もなく、嵐雪も爰に同居したれば、破笠もまた爰に同居して俗世間を離れ唯風流を樂みきと聞けども、西鶴は然らず、『元祿太平記』の傳ふる所によれば、大坂鹽町の住、木戸玄角といふ婦人醫者坊と同じく大盡の巾着に付添ひしこともあつたらし。尤も同書は西鶴を酷評したるものなれば、悉くはアテにならねども、西鶴が例の高踏超絶流にあらずして純然たる俗人たりしことほゞ明白、彼れまた自ら風流に居らず、「人の家にありたきは、梅櫻松楓それよりは金銀米錢ぞかし」(『永代藏』)などいへり。これ誰れもいひ破らんとしていふ能はざる所、外見に清貧を粧ひて、内心利己を營むが如きは、西鶴の罪人なり。彼れは公然と花

よりも園子主義を唱へたるものにて、其の理想的生活ともいふべきを同書に示して、

越下て三人口までを身過さばいはねなり、五人より世をわたるさはいふことなり、下人一人もつかはぬ人は世帯持さは申さぬなり、且那さいふものもなく朝夕も通ひ盆なしに手から手にまわりて女房もりてくふなどいかに腹ふくるればさて口惜しきことぞかし。

といへり。蓋し正風の重ずる所は精神の樂にあれども、西鶴の眼は肉躰の樂なしに精神の樂あるを許さず、肉躰安樂にしてはじめて精神安しと觀たるなり。これ西鶴が着眼芭蕉の高潔なる觀念に達せざる所にして檀林派の特質、むしろ元祿時代の大坂思想を代表し、天下の事何でも金々、金の自由にならざるものなしといふ實際的觀察の表白なり。とはいへ西鶴は極端嫌ひなり、金銀米錢ばかりにては此の社會の命脈を繋ぎ得べしとは思はぬなり、曰はく、
銀錢にて叶はざる事天下に五つ有、それより外はなかりき、是にましたる寶船の有べきぞ。

と。且五常の道の人間に欠くべからざることを説き、語を續けて、
見ぬ島の鬼の持し隠れ笠かくれ蓑も暴風の役に立れば、手違されがひを捨てて近道にそれぐの家職をばげむべし、福徳は其身の堅固に有、朝夕油断する事なけれ、殊更世の仁義を本として神佛をまつるべし、是和國の風俗なり。

などといふ。其の語意を強めて、道徳の重ずべきこと、職業の輕ずべからざることを教へたるは、町人の隠居でもいひさうなる普通の言ながら、然り、西鶴の主義は此の平凡普通の所にあり、物の中心を外れざるにあり、何事も程のよきにあり。夫れ中心を外れず、万事に程のよきは、平等の差別をかねたる形なり、是れ西鶴が理想なり。言葉はや、野卑にして戯れたれど、次の數言はよ

く西鶴が此の主義をいひ表はしたるものといふべし。

越下て出過ぎたる事によき物はなし、源助が頼も、まんが尻つきも寶物でなければ、同下くは人並がよし、大盡も内端なることと奥床し(二代男)

其積は西鶴を粹法師といへり。粹なる語にはいかなる意味あるか、嚴格には説きがたきも、万事に程のよきを粹の要訣とするは誰れも異論なかるべし。強きを挫き弱きを憫む、これ粹なり、尊きに媚ひず高きに諂はぬ、これもまた粹ならば、賤きに誇らず低きに慢らず、これもまた粹なるべし。能く稼ぎ、能く儲け、能く使ふものも粹、義理を辨へ、人情を知る、いづれか粹の道ならざる。蓋し粹とは人間の最も程のよき極點の總名を釋すべし。

予は粹の教によりて豪傑を作り學者を作るとは信ぜず、然れども封建時代の町人が則るにはこれ頗る恰好の教なり。や、其の弊に陥りたる傾向なきにあらねども、西鶴が半生の説法は、實に此の粹道の奥義を説きたるに外ならず。まことに西鶴は粹教の開山、當時の町人は概ね其の信徒なりき。これ西鶴が最もよく當代の町人を代表し、而して彼等の最も榮えたる元祿の大坂に於て、町人を代表したる文學、即ち浮世草紙をはじめたる所以なり。

其二 傳

西鶴は寛永十九壬午年に生る。幼き時のことは知れず、『元祿太平記』に西鶴が「某幼少より諷を好で和板に普き謠本、五尺手拭をはじめ、兼好塚まで空に覺え候」といへるは假作なるべけれど

も、さもあるべしと思はる。假名草子、俗語、院本、さては古文雅言の物語類、皆好みて讀みしなるべし。『俳家奇人談』が「國學を以て鳴る」といへるは、もとより間違なれど、『元祿太平記』、『燕石雜志』等が目に一丁字なき無學文盲と罵るも所謂商賈忌敵の傾向ありて正鵠を外れたる言なり。そも「我が邦に是迄學者と稱せられしものは、換言すれば物知りといふことにて、活きた字引、本箱等の綽號は彼等が甘受せし所なりき。されば曲亭馬琴も此の班に列せんとて、詩人の天職を卑んで隨筆に力を用ひたることあり。西鶴は此の目安から割出せば、學者といふ資格なし。彼れはあまたの和漢文を讀みしに疑ひなし、然れども其の大意を得て、己れが豊富なる思想を發表する媒介となしたるに外ならじ。されど彼れが我が古文に通ぜしとは、其の浮世草紙が概ね古文に胚胎せるによりて知らる（此の事後章にあり）。尤も『元祿太平記』の言の如く、彼れはいのことづらと午膝との同物異名なることを辨へず、曾子の詞を孟子の語に附會し、『枕草子』の文を『源氏物語』の句と思ひ誤りしが如き、定めし多からん。また彼れはてにはを逃れ、假名使を誤り、破格、無法、成程無頓着なりしには相違なきも、神來一過、興浮んで止まざる時は、筆の先に觸れてつかまらぬものもなし。『憂がちなる秋の夕、横堀に流るゝ塵埃をば西鶴が目には錦と見まがひ、春の朝茶白山の櫻を見ては雲と望む』これ西鶴が獨得の技術なり。彼れを學者といふも誤なれば、彼れを無學といふも誤なり。彼れは學者にもあらず、無學にもあらず、其の天職はあつから別にあり、蓋し西鶴は一詩人なるのみ。

西鶴は梅翁西山宗因の門下にして難波俳林の一人なり、一日住吉の社頭にて、獨吟二万三千句を吐きしにより、二萬堂また二萬翁とも稱する由『俳奇人談』に見えたり。幸田露伴氏の西鶴論『國民之友』第八十三號、當時の景況を叙して、

一日に恐ろしき多數の俳句を吐きて世を驚せしに、紀子といふ者あらはれて尙それより多くの句を吐きて西鶴を凌ぎたり、此の時恐ろしくは西鶴勃然として其下魂を振り起せしと見えて再度の興行には句數愈々多く遂に紀子に超り、集めて奇きなし歌を添ふ、其文を見るに毫氣横溢腹心に辟易す。

と云へる、盡くしたり。

松齋軒と號し、鶴永また西鶴とも云へり。

因に記す、西鶴の名はいつの頃に、將軍家の姫に鶴の名の差合ありて其の間隙を改めきとぞ。

また一書に初號鶴永、既に西鶴と改むと見えたり、二説とも未だ其の出所を確めず、按ずるに貞享四年板の『武道傳來記』『武家義理物語』等に鶴永の名あり、其の翌年（元祿元年）板の『新可笑記』同四年板の『俳諧石車』等に西鶴の名あり、依て貞享と元祿の境を鶴永西鶴の時代を分つべき年とするが、また元祿は概ね西鶴改名の時代とするが、然るに『男色大鑑』は貞享四年板、『一目玉鉢』は元祿二年板にて共に西鶴の名を刻せり、されば是等の號は便宜によりて並び稱せしものと見て可ならん、但し世間には西鶴の名あるを知つて他の名を知るは稀なりとぞ。

西鶴が浮世草紙のうち既に湮滅して今日に傳はらざるもあるべけれど、世に知られたる限りにては天和二年板の『好色一代男』を初筆とす。此の時西鶴は既に四十二歳、是れまでは單に俳諧師として世に知られき。延寶七年板の（天和より二年前）『難波鶴』に「俳諧點者鎌屋町井原西鶴」と

あり、俳諧師としての地位は、櫻庭萱村翁が「俳諧一斑」(『國民之友』第九十一號)によりて窺はる。

祖師妙智力ありといへども更に英邁なる弟子なければ其法弘通せず宗因浪華に一族職を立て京江戸の貞徳流と、戦ふうちに左右の翼を頼むべき弟子を得て宗因派つひに大勝利を得たり一を井原西鶴とし一を椎本才助とす一は宮崎の文才を以てし一は淡泊なれど氣韻あり才麗江戸に下れば西鶴浪華の本城を守り西鶴奥州に入れば才助代つて同門を率ひます一宗派を弘めける。

西鶴が宗因門下一方の將として勢力ありしこと斯の如し。其の名の噴々たりしはたま／＼敵を作る媒介となりしか、當時は俳壇の紛争烈しき時なりしかば『俳諧破邪顯正』(延寶七年板)には「阿蘭陀西鶴」と罵られて此の道の異端邪宗と目せられき。蓋し檀林風の俳句は豪放を躰となし、かば一方には悦ばれず、殊に西鶴が縦横の才を弄びて、傍若無人の振舞は彼等反對者の嫉妬を高めしや知るべし。西鶴が『後の大矢敷』(延寶七年板)の跋に「世を擧げて群雀噪々」と書きたりしは思ふに敵が賣言葉に對する買言葉の返報なるべし。當時此の紛争の衝に當りて屈せず、彼れも此の道の勇將なりけり。

斯く俳壇多事の時に當り、此の勇將が俄然旗幟を卷いて檀林を退き、筆鋒を他に轉じて浮世草紙の開山となりたるはいかに。接するに師の宗因が世を辭せしこと主なる原因なるべし。そも／＼宗因は寛永より天和の間、凡そ五十年間、俳壇の權を握りたりし弱者なりしが、天和二年三月廿八日、七十八歳を一期として大坂に身まかりしかば(『俳諧一斑』)檀林其の主を失ひて孤城落日、

西鶴が活眼また既に俳壇の權の正風に転ずることを知るものから、師匠存命のうちこそ將に覆らんとする大厦を支へたれ、今や大勢の向ふ所如何ともすべからざるを覺り、師の永眠を機として之れを他に譲り、自らは浮世草紙に筆を染めて、不知不識俗文學の開山となりしなるべし。蓋し浮世草紙の初筆、「一代男」の巻末に「天和二年神無月」の文字あるを見れば、師の翁が今年三月に身まかりし後着筆せしこと知るべく、且從來専ら俳道に力を用ひしことも窺はれ、師弟の間の交情深かりしことも窺はる。吉備遅月空阿が著『俳諧水滸傳』はもとより事實としては採るべからざるも、西鶴が宗因に事へて檀林の爲に力を盡くし、こと、師翁また西鶴を重任して、檀林を維持せしこと等、能く當時の有様を寫したり、次の一節また其の中にあり。

宗因北に檀林を築きて洒落の變風を世上に布んご欲して數輩の將集るといへども未だ俳風一統の治を得ざる中に其師早古稀に過ぎて日暮も危ふくおほはざるなし西鶴まばらく柄を執るに似たれども彼は其才双統雜話の文章に長けて梅露没後の主たるに堪へず。

西鶴が經歷の前半期は俳諧師として世に立ち、年四十二歳に及びて天和二年なり。予は一進を歩めて是れより浮世草紙の作家たる西鶴を叙すべし。

其三 俗文學の發達

俗文學の發達は其の由來する所多岐なるべしといへども、就中主なる理由と思はるゝは、櫻庭萱村翁の説か、曰はくそも／＼俗文學の大坂に發生したる由來は、足利氏の末に當たり、山名細川等兵

を擧げて應仁の亂となり、さしも久しく風雅の中心たりし京師も荒廢し、打續ける争鬪に、公家殿上人も詩歌文章を賞翫して風流を樂む餘裕なきに至り、果は一身をだに安んずること難く、おの無事の地を擇びて命を寄せんとせし折柄、當時周防國山口は大内氏の居城にして、其の威武山陽を靡かせ、京師の争亂にひきかへて此の國のみは荒き浪風もなく、おのづからなる安樂の別天地、こゝに便を求めて京師より逃れ來し公家のうちには歌人文客も少からず、かくして山口は漸次學者文人の淵藪となり、譬へば京師を以て風雅の本店とすれば、山口はさながら支店の如く、まかも本店よりは支店の方榮えて、文學藝術ひとり山口に盛なりき。こゝにまた泉州堺の港といふは、京師と山口との中間に位し、商賈繁盛の要區なりしかば、京師より山口に行かんとするもの、是非とも此の港に立寄らざるを得ず、兩地往復の頻繁より自然と堺の町人は山口に親み、こゝを上花主となし、兎角して彼等は其の頃山口に流寓する公家にも昵近し、商業を營む傍ら、學ぶなどにはあらざるも、見聞は彼等に文學美術の思想を傳へ、或意味にていへば、堺の町人は往々に物品を齎らして、販るに富み風雅の道との二寶物を天秤に擔けて販るの觀ありき。蓋し連歌の如き茶道の如き、從來は高貴の人へのみ賞翫せられしものが、此の頃より堺にては、はじめて町人の間に流行せり。これはた山口にて風流思想を發はれたりし結果に外ならず云々。

茶道のことは今こゝに要なければいはず、其の時はじめて民間に流行せし連歌こそは俗文學の種子なりけれ。風雅の道一たび公家の手より町人の手に渡れば、衣冠束帶の襟を變へて、前垂掛商

人の風にならざるを得ず、優美の形は洒落の姿と改まり、高尙の躰は平易に改まり、雅は俗と其の好尙の一變するは自然の勢なり、此の頃武家高貴の間に賞翫せられしは連歌のみにあらず、和歌もどより行はれたり、されど堺の町人は公家より直接に文學趣味を吹込まれながら、比較的に優美、高尙、雅趣に富める和歌を探らで、やゝ卑近なる、まかも平易にして可笑味の分子多き連歌を探り、かくて縉紳の裝束を一重脱ぎ次第に俗に近づきたり。

かくて時改まり星移りて豊太閤の天下を一定し、大坂に城を築きしや、堺の町人を移して之れが市民となしぬ、やがて大坂は殷富の都會となり、俗文學の種子も堺の町人と共に移し植ゑられ、其の後天下は徳川氏の手へ皈せしも、大坂は依然たる大坂にて相も變らず卑近なる文學思想は其の間に發はれ、連歌は再び形を變へて俳諧となりぬ。この變遷の時期に遭遇し、俳諧を興隆せしめんと努めたるは、實に西山宗因なり。さて大坂は俳諧の中心となり、寛永より凡そ五十年天和に至るまで、其の全盛を極めたり、これ檀林時代なり。是に於て貴族的文學は更に一層下移し、平民的文學の地盤と並行せり。蓋し和歌より連歌、連歌より俳諧と種類を替へ、公家より町人、堺より大坂と、斯く人と處とを替へて、天和二年に至り、西山宗因の門下なる俳諧師の手より浮世草紙といふもの生れて、平民主義の俗文學發達しぬ。而して寛文にありては古文註釋の結果として、『徒然草』より『可笑記』を生みしが、『源氏物語』は大部なる爲めに註釋後れ、『湖月抄』の如き漸く延寶に出で其の結果は浮世草紙の初筆『好色一代男』にあらはれたり。蓋し『好色一代

男』は『源氏物語』の翻案なればなり。

其四 浮世草紙

西鶴が浮世草紙を著し、は西山宗因の没年と期を同うしたれども、其の思ひ付は必ずや是れより以前にありしなるべし。蓋し流石に好色本となれば、師の翁存命のうちには遠慮して世に公にせざりしか。兎に角當時の流行は彼れが好苦心を驅りて筆を着けしめたるならん。當時の品位ある俳諧師は謝義など取らざりきと聞えたれば、如何にかして生計を支ふる必要ありて、西鶴の多才なる其の邊に脱なく、今日には傳はらざる一種の本の流行を機として、好色本を著し、後半年には少くとも著作料にて米糧を賑せしなるべし。『元祿太平記』に西鶴が池野屋二郎右衛門より『好色浮世體』といふ草紙の前金として、三百兩を借り入れ、此の約束をのびくにして果たさざりし間に、身まかり、池野屋は三百兩の損をなし、やう記せり。此の頃の金にて三百兩の原稿料は高きに似たれど、そは事實を潤色したるものとも見るべし、かゝる例はいくらも有りげなる事柄なれば、無下には虚談として排斥しがたし。これはなほ後年の事なれども彼是思ひ合すべきことにこそ。またはじめのうちの著作殊に好色本には西鶴の名を記さず、多く序文も掲げざる、一證なり。所詮金の爲にはじめは匿名にて是等の書著したるや疑ふべからず。然れども、彼れが天稟の才は遂に彼れをして囊中の錐たらしめ、覆面も被りおぼせず、西鶴の名は好色本と共に高く、後には之れを濫用して西鶴の名を冠せたる偽書の出づるまでに全盛を極めたり。『元祿太平記』の

らへるが如く「誠に西鶴こそわけの聖なりける」。

『好色一代男』(八冊、天和二年)

西鶴本は寛永以來流行したる假名草子と体裁を同うす、挿畫は蒔繪師源三郎の筆、其の名見えざれど、多くは此の人の畫なりと『浮世繪類考』に見えたり。蒔繪師源三郎は元祿の頃盛に行はれ、人倫訓蒙圖彙(元祿三年)などにも此の人の畫きしもの趣からず。

されども西鶴本の中には菱川師宣が畫きしものありと聞きぬ。師宣は土佐の畫風を好み、浮世又兵衛が筆意を學びて一家をなしたる近世浮世繪の妙手、浮世板下畫の始祖なり、天和、貞享の頃を盛時として江戸村松町二丁目に住へりきとぞ(『浮世繪類考』)。此の人の畫きし本あまたあれども煩はしければ省く。『一代男』は西鶴はじめての作にて未だ万事に巧者ならざりきと見え、板下畫の字跡には似ず文字頗る雅致あり、門人などが筆耕せしものなるべしといふ。他の作に比して挿畫は一段の出來榮あり、もし師宣が畫きしものありとすれば是等をやいふならん。馬琴がいへる如く「滑稽を盡すことは西鶴よりはじまれり」、『一代男』の特質は實に可笑的にあり。而して此の挿繪本文の特質を表して輕妙洒脫、眞に凡手ならざるを知るべし。

さて『一代男』が『源氏物語』の翻案なることを示さんに、好色の文字は『源氏物語』の好色事、好色心などより來たれると明なり。また其の趣向をいへば、許多の小話を串貫にして一編をなすは彼れも此れも相同じく、其の申なる主人公、彼れは源氏の君にして、此れは世の介、共に一編を

繋ぐ大綱なり。

西鶴の文の古文より脱化したる證は、雅致ありて敬語に富むと難解の句多きとにあり。

女めいわくながら、さもかくも云捨て、只何ごころもなく、みだれし烏羽玉の夜の髪は、たれがみるべくも、はしたなく、つがみさびして、つれの姿なりしに、かの足音してまのぶ、女是非なく、御ごころにかなふやうにもてなじ、其後小箱をさびし、芥入形おきあがり、雲雀笛を取そるえ、これく大事の物ながら、さまになに惜しがるべし、御なぐさみに、たてまつるさ、是にてたらせども、うれしさうなるけしきもなく(下略)

自笑其碩の文を讀みて西鶴の文を合味せば、是等の句調が純然たる俗文にあらざるを知らん。また『源氏』の文を味ひて更に西鶴の文を讀まば野卑なる事柄を寫しながら雅致風趣擲すべきものあるを知らん。西鶴の文の難解を俳諧の調にて當代の俗語を綴りたるに歸するものあり、これも一理由なるべし、然れども予は古文(但し隨筆體にあらざり物語體)の痕跡の未だ充分に拭ひ去られざるに歸せずんばならず。此の難解の所、雅俗半熱の所に西鶴文の妙味は勿論あり。

また『一代男』と『源氏物語』との間に事件の相似たる點を擧ぐれば、其の三の卷「口舌の事ふれ」にて世の介が人の女を戀ひて不義を仕掛けたるは『源氏物語』の「空蟬」の條と符合し、四の卷「因果の關守」以下の二三章は「夕顔」の卷に髣髴たる所あり。前後こそ異なれ「夢の太刀風」は源氏が何がしの院にて變怪に出逢ふところ、「形見の水櫛」は夕顔が物の怪に驚はれて身まかりし所に似たり。源氏が夕顔の死骸を見やりて、

恐しきけもおほえず、いさううたげなるさまして、未だ聊かはりたる所なし、手を抽へて我に今一度聲をだに聞かせ給へ、いかなる前世の契にありけん、普しの程に心を盡して、哀におほえしを、うち捨てて戀はし給ふがいかゞ事さ、聲も惜まず泣給ふこと限なし、(中略)右近は泣き給ひて、煙にたひぐひて泣き参りなんといふ。道理なれど、さなん世の中はある、別といふもの、戀しからねばなし、さあるもかゝるも、同命の限あるものになんある、思ひ慰めて、われをたのめこの給ひこしらへても、かくいふ身こそ生き留るまじき心地すれ、この給ふものもしげなしや。

『一代男』にては世の介が牢にて契りし女とかげちの途中、其の女を奪はれ、生死の程も覺束なく、とある墓場を通りかゝりし時、埋めたる棺桶を掘起す人あるに驚き、近づきてみれば死人は正しく

我尋ぬる女、これはさまがみつき、かゝるうきめにあふ事、いかなる因果のまはりけるぞ、其時連れてのかすば、さもなきを、これ皆我なす業さ、泪にくれて身もだへする、不思議や此女、雨の眼をみひらき、笑ひ顔して問もなく、又本の如く成ぬ、二十九までの一期、何おもひ殘さずと自害するを、二人の者、いろく押しどめ取る。

とあり。其の趣こそ異なれ、二人とも死したる女の生々したる像を見るが如き、悲哀に堪へかね、共に死なんと取亂したるが如き、作者の着想兩者同一轍なり。紫式部と西鶴とはまた申合せたるが如く寫實派の作家にして共に怪力亂神を語らず、一は平安朝時代一は元祿時代の人情風俗を有の儘に寫したる技倆の相同じきは西鶴をして式部の作を翻案するによく適せしめたり。『源氏物語』は五十四帖の大部『一代男』は僅に五冊なれば、之れを以て完全なる翻案とはいひがたきも、もと翻案の主意は換骨脱胎にあれば、『源氏物語』の趣向の如く、其の筋に變化なく、多くの話を集めた

る作は、一部を探るも全部を探るも同じ道理なり。而して唯『一代男』をのみ『源氏物語』の翻案とすれば、やゝ物足らぬ心地すれど、『二代男』、『三代男』など、西鶴が主なる作は皆同じ趣向の木匠のうちにもせられたるが故に、此の數部を合すれば、『源氏物語』五十四帖の大冊に匹敵すべし。『三代男』の卷末に「六十二帖の物語寫し終れば障子外にうかみし有様自ら消へて一物もなし」と結びたる作者の意もこゝにありしが如し。况や『一代女』もまた趣向は更に新しき事を見ざるをや。もし西鶴の作を小説の形より論ずれば實に『源氏物語』のため摸倣たるに過ぎず。さて源語と西鶴の作との異なる點は、『源氏物語』の優美なる特質は、これにては滑稽となり、高雅は卑近となりてあの一寫す所の社會の特質に適へり。蓋し『源氏物語』の上品なるは上流社會を寫したるに因り、『一代男』の下品なるは下流社會を寫したるに因り、未だ作者の着眼の異なるにはあらず。西鶴と式部とを同性質の人とはいふべからざるも共に事物の有の儘を寫す文才同じければ、もし兩作家地を替へなば、或は西鶴は『源氏物語』を作り、式部『一代男』をものせんか知るべからず。もし又世の介を殿上に生れしめば、光源氏なるべく、光源氏を民間に下らしめば世の介なるべし。世の介が榮花は光源氏の樂と異ならねば、光源氏の好色心は世の介の蕩心と優劣あるなし、美女三千雲の上の遊興も、花の街の戯れも、虛心に見れば同じことなり。畢竟『一代男』は下流社會の『源氏物語』、『源氏物語』は上流の『一代男』なり。斯の如く『源氏物語』は『好色一代男』に翻案せられて、貴族專有の王朝文學は、元祿に至りて西鶴の手によりて、平民の所

有とはなされたり。西鶴が俗文學上の地位は紫式部が有する雅文學上の地位と異なる所なし、共に文學史に特筆すべき功績といふべし。

『好色二代男』 (八冊、貞享元年)

『一代男』を天和二年に出だし、より三年目に此の著あり、此頃未だ多くの作なかりしを證すべし。然るに貞享三年にはあまたの草紙の一時に出板せらるゝに至りぬ。今年年板と目せらるゝものを擧ぐれば、

『好色三代男』(五冊)、『好色一代女』(六冊)、『好色五人女』(一名『當世女容氣』五冊)、『本朝二十不孝』(一名『新因果物語』五冊)等四部ありて、ことごとく名作なり、就中『好色一代女』は傑作と稱すべし。是等の名作の一時に出でしは『一代、二代男』が甚しく世間の嗜好に投じ、好色本の大流行を來たし、景況を察すべし。然るに表題の頗る白地なるより當局者の注意を引き、風俗を亂すの恐れあるものと認められ、是等の書の幾分かはさし止められきといふ。(年月未詳)されど當時の禁令は所謂三日法度とて、一二年も経ち、表題さへ改むればまた舊の儘の本を發賣するも差支なかりきと聞けば『二十不孝』の『新因果物語』、『五人女』の『女容氣』も此の理由によりて改題せられしものなるべし。

『好色一代女』 此書は西鶴本の心髓ともいふべき名作なれども、翻刻本の久しく行はれたる(今は禁ぜられたれど)世に筋書を語るも用なし。こゝに聊か作家の此の書に對する注意を述べれば、

こはひとり後世人が西鶴の傑作と見るのみならず、西鶴自らも頗る得意の作として殊に念を入れたるやに思はるゝ節あり。本の体裁は紺表紙美濃板にて、繪は蒔繪師源三郎の筆、且此の本には珍らしくも別に貼付表紙あり（たゞし此の本のみと思へるは見聞の狭き故かもされず）今は紙も半は磨滅して文字見るべからず、巻の四僅に讀まるゝものを記さん。

同ト女にうまれながら

人のたはふれ聞耳立るも

よしなき世や

糸による戀

物ぬい女

□□の袖口

明暮むれのもゆるは

ふトさいへる茶の間

ちぎりの中通の女半季に

六十目の金のわかれ

などあり。總じて本の体裁頗る古雅、物語本の製に倣へるや明なり、此の出版は西鶴の全盛時代、好色本流行の頂上を代表せりとおぼし。

翌貞享四年には『男色大鑑』（一名『本朝若風俗』八冊）、『武道傳來記』（八冊）、『武家義理物語』（六

冊）『懷視』（五冊）同年の出版あり。當年の諸作はおもに武張つたる表題なり。按ずるに好色本のさし止められしは此の前年なれば、「ナニ好色本賣ることが出来ぬとや、女のこと甘たる」といふなら、若衆念友のことかくべし」など、例の負る嫌ひの西鶴『男色大鑑』と題してまた此の道の粹を集めしものか。其の序文を見るに

日本紀愚眼に映けば、天地は下めてなれる時一の物なれり、形かたち姿しづの如し、是則神かみなる、國常立尊くにとこたかみをなす、それより三代は陽の道ひさりなして衆道の根元を顯はせり、天神四代よりして陰陽みだりに交りて男女の神いでき給ひ、なんぞ下くだ世のむかし、當流の投島田、梅花の油くまき浮世風にうきよ挽まぐる柳の腰、紅の湯具、あたら眼を汚しぬ、是等は美少人のなき國の事欠ことひ、隱居の親仁の飯びのたぐひなるべし、血氣壯の時酬を交はす、へきものにもあらず、述て若道の有難き門に入る事おそし。

貞享四年龍集丁卯除日

四 題

予が推測の如くならんには、此の序文は多少當局者を譏刺せるものゝ如し。西鶴が浮世草紙の質晩年に至り一變し、教訓を主とせりといふは、好色本の著なかりし故、表面を觀ての臆断ならん。兎に角好色本の禁止ありしは改題せし事實にて明なるが上に、今年作の上に此の變化を見るます、其の事實を確むるに足れり。以後年々一二部づゝの著述あれども、最早彼れが天才は法の爲に束縛せられて充分驥足を伸す能はず、漸く『日本永代藏』等片々かたかたの小話を集めて一編の趣向すら立てず、『永代藏』は同五年の出版にて六冊なり。同年板に『色里三所世帯』と題する好色本あり、西鶴の作と稱す、此の年元祿と改元あり。

『永代藏』と同年の出板なれども元禄元年とあるは『新可笑記』(五册半紙本)なり。元禄二年には『本朝櫻陰比事』(五册)『一目玉鉢』(一名『西鶴回國道之記』四册)著あり、『櫻陰比事』は『棠陰比事』の翻案、板倉公平裁許を面白く綴りたり他の作に比すれば文章波瀾なくや、見劣りせらるゝにより、或は西鶴の作にあらじと疑ふ、然れども年代を遡うて彼の作を讀まば、中頃より次第に著作の不出來を見るべし。殊に此の書翻案なればおのづから筆の延びざる節もあれど、偽書にはあらざるべし。『一目玉鉢』は未だ翻刻にはならざれど、面白き一種の道中記なり。淺井了意が『東海道名所記』とも其の趣に異にし、番圖を專にして記事は頗る簡なり。美濃板の中段を上下二つに割し、下には名勝風景の圖を示し、上に註解あり。名勝には所々古人の名歌を載せて興を添ふ。例へば鴨立澤には「心なき身にも哀はまられけり鴨立澤の秋の夕暮」を載せたり。此書の序文によるに西鶴自らの旅行記にて東は奥羽の端より西は對馬の遠きに及ぶ、足跡の至るところ頗る廣し。元禄五年には、『世間胸算用』の出板あり。此の頃は著作も多からず、追々冬枯なり。予が見たる限りにては、此の外は生前の年號を載せず。他に尙二三作あれど、そは次章に譲り、爰に逸事一二のり。

其五 經歷の補遺

『俳諧水滸傳』に「中頃西鶴も園女がもとに久しくやどり、園女に對句の調を作り」とあり。園女は伊勢松坂の人、女にしては學問もあり、和歌を好み、俳諧は荒木田守武の流を汲み、芭蕉其角

もまば、其の才を稱揚せし女なりとぞ。一時軒惟中の妻なり。夫死して後は江戸に出で、眼科の醫を業とせり、俳道の女秀才なりしかば、西鶴も其の道の友として交り、いつの頃にかありけん、西鶴園女の爲に、『俳諧温故集』による)

對園女辭

西鶴述

伊勢小町は見ぬ世の歌人今の世のいせの國より國といへる女の俳諧をわけて濱坂の原邊き浪連の里に志しての我に嬉しく二見箱覗の海にそめて筆のうつり行事□を□けるに思ふまゝにぞうきぬべし光良の妻登原の捨なご花にまほみて紅葉さちる世に詠の絶にしたに名をいふ月の秋に此女この所にまばしの舍りななし神風の住よしの春もひさしかなさぞ、こまぶき侍る

浪疾や當風こもる女文字

西鶴

また風來が『根なし草』に云ふ

今は昔澤村小傳次といへる若女形河内の藤井寺の開帳へ参り小山といふ處に宿しけるが小傳次曰く一日竹奥にゆられて血暈がせりしさいへるを連にて有りける竹中半三郎小松才三郎尾上源太郎など笑つて曰くいかに女形なればきて男に血暈さばと腹をいへけるを其座に西鶴も居合せけるが大に感下て曰く稚きより形も詞も女の如くならんさ日頃になしなみしより假初の頭痛を血暈と覺えしは扱々まほらしき事なりさいへりさなり。

西鶴が經歷の世に傳はれる、僅にかばかりなり、されども尙此の釋法師の爲人を窺ふに足る。此の人の交らぬ人なく、此の人の行かざる所なかりしが、今は缺の草鞋はきて地獄巡りさへしたりと、善惡なき後人にいひ囁されし迷途の旅だち近きぬ。「人間五十年の窮りそれさへ我にはあまりあるに、ましてや。」

浮世の月見過しにけり末二年

と辭世の句を止めて、元祿六年癸酉八月十日歿しぬ。時に享年五十二歳。墓は浪華八丁目寺町密願寺、本堂の西の裏手なる南向三側目の中程にあり。碑面には「仙階西鶴居士」と書し、下山鶴平、北條團水建之と刻せりとぞ。鶴平團水はともに西鶴が門人なり。團水は西鶴歿後京より浪花に來たり、七年の間其の舊庵をまもりきといふ(『燕石雜志』)『置みやげ』に如貞、言水、才麿等が追善の發句あれどもこゝには省きつ。其角が『句兄弟』(元祿七年板)に

兄

團は花は見ぬ里もありけふの月

弟

團は花は江戸に生れてけふの月

花なき里に心よりて二千里の外にこゝより一句の首尾殊に類なし申七字力をかえて啓榮期が樂に寄たりされば離波江に生れて住よしのくまなき月をめで前の魚のあざらけきを釣せて景寫嘆時のおもひ慇懃今讀

末二年浮世の月を見過ぎたり

題

さいひ置けん折にふれては願なつかし今は故人の心になりぬ
といづれか西鶴が名譽ならざる。

其六 西鶴本といふこと

西鶴の戯作中今に傳はりて、名作と稱せらるゝものは、多く無名にて、序文もあるは稀なり。こ

は前にもいへるが如く、流石の西鶴も好色本に公然名を署するを耻ぢしなるべし。されども彼れが非凡の才は、遂に隠しおぼされず、誰れいふとなく西鶴の名は評判と共に揚がりて當時の讀書社會を風靡しければ、後には西鶴といへばいかなる面白からざる書も世間に持囃るゝ株となりしこと、今日の事情に徴しても知らるべし。晩年に至り好色本變じて多少教訓の意も見ゆれば、是等には名をわかしたるもあれど、よき作には不思議にも名を記したるは尠し。但しこれは西鶴生前のことに屬す。彼れ歿せし後は、誰れか無名なるを西鶴の著と認むべき、爰に至りて確實なる保證なかるべからず。これよりして西鶴何々と其の名を書名に冠らすことはじまる『西鶴置みやげ』、『西鶴織留』、『西鶴名殘之友』等は是れなり。

『置みやげ』は元祿六年、『織留』は同七年、『俗づれ』は同八年、『萬の文反古』(元祿九年)、『西鶴諸國ばなし』は年號未詳なれども、按ずるに此の頃の出版なるべし。此の五種には作者の自序または門人が書添たる文ありて、前の三種は先師が遺稿なりといへり。果たして然るや否や、『織留』は文章も優れ、着眼また凡ならず、此の書は六冊ものにて前二冊を「町人鑑」と號け、後の四冊を「世の人心」と題す。團水が書添のうちには、

西鶴生涯のうち、述作する所の假名草子、棟に充、牛に汗して世にはびこる中に、日本永代蔵、本朝町人鑑、世の人心、これら三部の書名づく、(中略)永代蔵は其功なりて後、町人鑑、世の人心半書遺して過ぎし西の葉月に此世を去り、(中略)兩部の書殘されし、半冠をとり合せて一部となし云々。

これにて西鶴が生前の計畫、及び此の本の成りし大略知るに足るべし、殊に此の書には一題の下に數章の斷篇を集めたるが如く見ゆるもありて、げに西鶴が遺稿を取纏めて一部の書となせりと見ゆ、されども『置みやげ』『俗つれづれ』『彼岸櫻』などに至りては眞に遺稿なりや、或は書肆の請によりて門人等がものしたるを先師の餘光（遺稿に通ふも因縁あり）を借りて、其の名を濫用したるにはあらざるか、予先年此の道に精しき地方のさる老人に書を寄せて西鶴本のことにつき一二質し、ことありしが、『文反古』に對する老人の返答は左の如くなりき、

此文反古は三四條西鶴のもの見留申候へ共其他は贋物と見請申候一の卷五の卷に眞物三四條有べきが但評註は皆他人の手に出し見えて尤拙し西鶴は元禄六年八月十日没實物の證は序文の年號を其年其月と述べて五卷の末に元禄九年云々あり且任立もかり申候紙も違ひ申なりさらす共拙文云ばかりなし心を留て御覽可被成候御てはやるものには贋物多ければ學者にならんと思ふ人は此處に御注意肝要也

老人はもと國學者にて傍ら我が邦の小説戯作にも通じたる人なれば戯作に専門の人の見るとは著眼のづから異なりて文章に重きを置きたるや其の口吻に歴々たり。然れどもむしろ他山の石、評酷に似て却りて其の間に争ふべからざる鑑識あるを見るべし。

予は此の薄弱なる理由にて西鶴が作中珍らしき着想の『文反古』をば贋物とするに忍びざれど、さりとて此の完全したる五冊一部の書が西鶴の死後三年に發見せられたりといふは、前の『織留』より考ふるも多少疑しき事實なり、『萬の文反古』といふ斬新の想ひ着こそ西鶴の遺物なれ、そを増

し加へて一部にしたるは門人等の手に出でしなるべし。此の『文反古』に對する老人の意見は『置みやげ』『俗つれづれ』に對してますます正しげなり。誰れか『置みやげ』『俗つれづれ』をことごとく西鶴の筆を思ふものあらん。按ずるに西鶴存命中にも片々の小話を集めたるには此の手段或は行はれたりしか。總じて名を貸して出版する例は、今日名譽とか見識とか入釜敷世にすじ、學者の恬として顧みざる所、當時戯作者の地位にありし西鶴に此の事ありきとて咎むるには及ばじ、また好色本ならざる一話一章のみには名を貸すをたゆたふまじきをや。要するに晩年の作、殊に遺物と稱するものには眞物ならざるも多かるべし。

更に一步を進めて見ばまづかいな贋物あり、例へば『浮世榮花一代男』『小夜嵐物語』の如き是れなり。『浮世榮花一代男』とはそもくいかなる書なるか。其の序文を見るに、

美女はなまこの命を断る斧成さ吉人の言葉、有時戀の山入して花は連理の枝をさるにつまず、鳥は夜毎の別れを惜まじ、月は更にたはふれ酒の種にも成、花鳥風月の中に遊んで、色にそめたる身は、長生のせんだく仙家にちよせの流れをじるぞかし、されば世界は廣しむさし野の戀種の中に住ながら、色しらすの男のありしを陰陽の神の道ひかせ給ひ、俄に浮世の榮花物語、是を見る人虚實のふたつ有、時に移れる心にして見る事、同く夢にも、玉殿の手枕まはしも染みふかし、元禄六のましの春

松壽軒 四 題

と、立派に記名して、茶表紙四冊物、本の体裁はほゞ西鶴ものに似たれども、『一代女』の書き出しを讀みし人は、此の序文の西鶴の筆なりや否やを判ずるに難からざらん。文章の剽竊なるが上

に拙、まかも此の作の着眼卑しく、猥雜更に甚し。然るに元祿六年の春は西鶴存命の中なれば、斯く年號を刻したるがそも、曲者にて、後に本屋が錢儲けの爲に物したる陰謀なるべし。

『小夜嵐物語』(十冊、元祿十一年)の奥付には西鶴と大書せり、此故にや此の書は西鶴の著書中に加へらるれども、辨ずるまでもなく贋物なり。『新小夜嵐』(三冊、正徳五年)『續小夜嵐』(六冊、年號未詳)には西鶴の名はなけれども皆同じ種類の書なり。此の外『西鶴傳授車』(五冊、正徳五年)の如き、『西鶴冥途物語』(五冊、元祿十年)の如き、『新武道傳來記』(作者未詳)の如き、全く別人の作と知れたるものも、凡て西鶴本と稱して世に知らる。されど西鶴本といふことは西鶴の著作といふよりは廣き意味にて、例へば八字屋ものといふうちには自笑、其碩、南嶺、其笑、瑞笑等の諸作を含めるが如し。但し後者は出版者の名を冠せたるものにて、即ち今日いふ博文館物などいふに等し、前者西鶴といふは作家なれば聊か其の趣を異にしたれども、共に戯作の一大シリーズといふべし。

其七 雪冤

此の稿を起すに當たり、かねて上野圖書館にはあまたの原版を藏すと聞き、参考の爲に一覽せばやと、一日同所に赴きしに、近頃博文館より出版になりたる西鶴本の發賣を停められたる出來事より、禍は延いてこの圖書にまで及び、好色本は悉く禁閱覽と書して人に見せず、遺憾の至なり。西鶴本は當時に停版せられたるに、一時に止まり、やがて改題して解禁せられし由前に述べた

り。其の後二百有餘年、風俗史の参考として、俗文學の一本山として持離されたるに、今に至りて此の禍に罹るはそも何事ぞや。蓋し西鶴本は多少猥褻なれども、猥褻はむしろ我が過去の小説類一般の瑕疵にして、ひとり西鶴には限らず、もし嚴格に論ぜば、此の缺點は高潔第一と稱せらるゝ馬琴といへども免るゝ能はず、况や其の他をや、現時の出版に對し相當の取締あるは勿論のことなるが、既に是まで公許したるものを二百年の後に禁ずるとはさて、合點行かずと其の理由を求めしに、左の答案を得たり。即ち一は世間の盲評家が古人の解説に雷同したると、他は氣の弱き翻譯家の杞憂とが、當局者をして未だ美醜の如何を判別せざる前に、今回の禁止を催さしめたるに過ぎじと。

先づ第二に就いていはんに、今より三四年前、はじめて『五人女』の翻譯せられたるが、翻譯者は〇〇をもて或箇所を文字に替へ、且いへらく「原本卑猥の句多きをもてモウレーがボツカシオを刪除せしに倣ひ云々」然れどもかゝる心配は實に無益のことといはざるを得ず、原來英國人の風習として下がつたる事を口にするを忌む、且やモウレーは多少教課書にも充てん心ありしに似たり、さすれば彼の注意はさることなれど、我が邦人の感覺は幸か不幸かはまばらけ措き、未だ英國人ほどにあらず、且久しく『夢想兵衛』の悪態野語に慣れ、『梅ごよみ』の誘惑痴話に慣れたる耳目は未だ西鶴が滑稽的難解の文字の爲にはさまで感覺を害せらるゝ恐れなし、然るに従來例の無き〇〇を以て文字に代ふるを見ては、讀者揣摩臆測を逞うして、さてこそ西鶴本は甚しき猥褻なる

ものと想像するに至り、諷刺者の注意は水泡に屬してむしろ定木の當て違ひの爲に禍を延ぐの縁とぞなりぬ。

また一方を見れば西鶴本非難の聲は喧しく、而して其の出所を糺せば梅蘭堂にはじまり、曲亭馬琴に盛なり、『元祿太平記』は西鶴本を猥褻なりと罵れども同書もまた〇〇を以て埋めざるを得ざると思すれば其の罪は五十歩百歩にして、著者が爲にする所ありて嘲りたるや明なり。『燕石雜志』はさうらく

滑稽を盡すことは西鶴よりは下まされり、さばれもつはら遊廓の上しなごのみ繰りて、其書猥褻なりしかば世の譽を得脱れず(中略)但その文は物を賦するのみにして一部の趣向なし、入文字含自笑、江島屋其讀、西澤一風等に至りて、西鶴の筆意に倣ひこれを調色して一部の趣向をたてたるもあれば、ますく浮世體にして俗客老圃の頤を解せしかば、これらも其名を噪くせり。

馬琴は我が邦はじめての批評家と稱へらるゝに拘らず、其の批評は往々僻したり、蓋し彼れは胸に狹き勸懲主義を蓄へ、且や自ら我が邦最上位の小説家たらんことを期せし野心家なれば、兎角有力なる作家を貶せんとするの傾向あるは『作者部類』にて窺ふべし。西鶴に對する右の評もまた此の筆法に出でしにあらざや。たゞ怪しむ、かゝる偏黨なる評論の今日まで或勢力を有すること。『日本文學史』西鶴を論じて

著者もより深遠なる學識あるにあらざ、高雅なる理想を有するにあらざ。従つて其作何れも猥褻卑陋にして、後世讀者の

譽を免かれず、(中略)其當り處の題目にして、少しく高尚優美ならしめば、文學上尙一層の高地を占め得べきに、唯眼を極寛の一方、殊に花柳の巷等の、俗陋なるものみに注ぎしは惜むべきの限りならず、云々

此の文學史は今や有力なる學校の教課書に採用せられ、彼等教師のあまたは此の口吻にて西鶴を講ずる片手間に浮世草紙、好色本の父母ともいふべき『源氏物語』『枕草紙』を有難さうに説き、西鶴が姉分ともいふべき紫式部、清少納言の才徳を稱揚して措かず、豈世の中は奇妙なものにあらざや。かくいへばとて予は『源氏物語』『枕草紙』を學校以外に放逐せよといはず、また『一代男』を教課書に採用せよといはず、唯同じ種類の書にして、一は講堂に上り、一は禁錮中に在ることの公平を欠くを難するのみ。然れども此の奇妙なる調子に實際世の中は進みて、かゝる教師の假聲を使ひかゝる説に雷同して、夫れく文壇に立つ輩は正直にも馬琴が唱へたりし奮めかしき非難を其儘繰返して、一口に西鶴は猥褻なりといふ。予はむしろ彼等が猥褻なる箇所のみ眼を留めて美なる點を等閑視するに驚くものなり、當局者はまた呆氣にとられて例の禁令を下したるに相違なし。此の禍に罹りたる西鶴こそとんだ災難なれ。議者或はいはん、われくが西鶴を難ずるは局所くの文字の猥褻のみにあらず、遊里洞房の事のみ寫出したる小説の世界全体的猥褻にありと。然れども是等の説は物の進歩發達を無視したる僻事なり。彼の歴史のはじめを見ずやエデンの花園なる裸體の姿をみだりかはしとすべしや、『古事記』を讀みてその中の或記事を襲なりとすべしや。これは是れ原始の有様としてむしろ天眞の觀こそあれ、誰れか猥褻なりと論ずる

ものあらん。かゝる境遇より今日の燦然たる文明の域に達したる次第を述べたるものは國史なり。これ吾人があらゆる古記を重んずる所以なり。文學もまた國史の發達の如し、和文の戀愛小説に負ふところ多きを思はば、今日讀書社會の大部分を支配する俗文が、西鶴の浮世草紙等より來たれることを思はざるべからず。蓋し元祿時代の風俗は肌をぬきたる儘表を歩くも笑ふものなれば、男女入込の湯も異しとするものなし。花街柳巷の遊びも程よくすれば通人、若いうちには一度此の道に入るもまた世故に行渡るの方便と、間違ひにもせよ、上下あしなべて粹を通せし世なれば、今の道徳の標準より非難するは酷なり。人はいふ、今日の新聞に遊女のことを記するは、國の耻辱なりと、然らば何故に之れを公許するか、社會は既に娼妓なるものゝわれ／＼同胞に存在するを認むる上は、社會の耳目たる新聞紙に右様の記事ある異しむに足らず。むしろ内に斯の如きものを蓄へ、表面には之れなきが如き顔する偽善家を笑はずんばならず。或時は遊女をよきものと思ひ、或時はよきものとは思はざるも、己むを得ず公許す、これ皆歴史上の現象なり。今の道徳更に一進せば、廢娼も實行せらるべく、然る時にはいかなる繪入新聞にも洲崎吉原種を斷つに至らん。其の時に至りて明治の出版物は女郎遊廓の記事あるが故に風俗を亂る、宜しく絶版して發賣を禁ずべしと主張するか。予は思へらく、社會は斯くの如く野暮的に進むものにあらずと。元祿文學の粹なる浮世草紙を禁ずるは今より數十年の後明治文學を禁ずると何ぞ擇ばん。蓋し浮世草紙は或意味にていへば今日繪入新聞の艶話つやなはななればなり。西鶴の才超凡、普通の新聞記者

に異なる所はあるべし、然れども現在目前に起りたる事、または傳聞を其の儘録して之れを公衆に示せることまことに今日の新聞紙と異ならず。浮世草紙は俗文のはじめにして、當代の反映たる風俗の記録なり。些細の瑕疵を以て此の豊富なる寶の山を棄つべからず。思ふに西鶴本の禁止は一時のことなるべし、他日解禁再び世に出づるの時あらん。聊か西鶴本の爲に冤を辯ずること然り。

西澤一風

享保の頃、紀海音、竹田出雲、文耕堂、並木千柳(宗助)此の四人を、淨瑠璃作者の四天王と稱し、また錦文流、櫻塚西吟、西澤一風の三人を、たとへ其の趣向筋立は前者に及ばざるも、文者三傑と稱しきとぞ。西澤一風は名ある淨瑠璃作者の一人なり。然れどもこゝには、淨瑠璃作者たる一風は客とし、主に浮世草子の作者としてこれが傳を叙せんとす。

西澤一風とは淨瑠璃作者の號にして、本姓は山本といひ、通稱は正本屋九右衛門(『今昔操年代記』には作者正本屋九左衛門と記す)といふ。大坂心齋橋南四丁目書林板元を業とせり。(住所は移轉せしこともありきと見えて一様ならず)享保頃出版の淨瑠璃本の奥に、

京二條通寺町四へ入町

山本九右衛門板

大坂高麗橋二丁目出店

山本九右衛門板

と記したるものあれば、本店は京都にして、大坂の山本は京都の分家なるべし。
一風は寛文五年に生る。八文字屋自笑は同六年に生れ、江島屋其碩は同七年に生る。一風は年齢に於て、此の三人の長者なるのみならず、また浮世草子の作者としても、西鶴に次ぎて大坂に出で、其碩よりも先輩なり。たとへ其の文才は其碩に及ばずとするも、著作の多きことは、ひとり其碩の多作を除きて、他に一風と比肩するもの少し。而かも一風は、自笑が虚名の作者にはあらず。

其一 與志と一風とは同人なり

元禄より享保の間、浮世草子の作者に、西澤を名乗る者三人あり、すなはち西澤朝義、西澤與志及び西澤一風なり。此の三人同心人の別名なりや否や詳ならずしが、寶永五年(?)板の『茶傾ひそり顔』といふ草子に、

融に陰陽和合の里なれば、此歌のあいだはしや、さいはい朝興志ふてまめなれば、さつこ一作あそはし、ふし付てわたさるべし云々

右は西澤氏作にして、作者自らいふ言葉なれば、與志は朝義の畧稱なること明なり。さて與志と一風との名に就きては、既に古人に別人なる由をいひしものあり。但し『元禄太平記』(同十五年板)には、

新色五番賣、御前義經記、寛文會我、女大名丹前能の作者西澤九左衛門

とありて、其のうちの『御前義經記』(同十五年板)を見るに浮太郎冠者實名與志編と記せば、これは九左衛門なる一風と與志とは、同人なること判然せり。今浮世草子に記したる西澤が名を吟味するに、元禄の末より寶永頃の作には、與志の名多く、享保に至りて僅に數部一風の名を記したるがあり。たとへ一風は、淨瑠璃作者と、浮世草子の作者と、其の生涯を分つといふなどの四角張たる云分もなかるべけれど、一風は淨瑠璃の方に多く用ひ、草子には與志を専ら用ひしなるべし。

『諸譯名女たば粉』(享保廿一年板)作者華亭の序にいふ、

僕御當地に罷有り……香林何茶に油を引れて元禄頃我も下心は有れど今時此辨なる世の中口を明ぬ先にそれと香込殊更色道の跡は遠く難波の二萬番近くは都の錦、西澤の與志、錦文流、八文字をば下め筆をふるふて世間の目を輝にした跡なればさりとほむつよし

實にやこれらはみな相應に名ありし作者ながら、浮世草子はひとり八文字屋の専有の如く、思はれしかば、今日に至りても、僅に一風の名は淨瑠璃作者として傳はれしと、與志とふふ作者名は殆ど知るもの稀となりぬ。

其二 西澤與志の作

前に『元禄太平記』に載せたる書目以外に、元禄年中の作尙あまたあるべし、其の一として見るべきものは、『風流今平家』(六冊、元禄十六年板)なり。此の作は、其の頃奢侈に耽りて、没落し

たるある町人の身の上を、平家の驕奢に擬へて作りしものなり。一名を「町人身の手鑑」といふ。駿河の府中に富める何某、惣領に世をつがせ、己れは一人の愛女を伴ひて、江戸に下り、谷中に住居して、榮耀に暮らしけるが、女心地常ならねば、大勢の侍女ども氣を揉み、御慰にとて、替女かへりめのよしといふを招き、何にても變りし音曲をと所望しけるに、替女が手わざは琴三味線より外を知らず、幸ひ此の程さる屋敷にて、風流今平家といふ本を讀まれしを聞きたれば、昔の平家物語に事よせ御話し申さん、と此の替女、彼の琵琶法師に代りて、當世の諺になぞらへ、琴三味線に今平家を合せて語る、といふ發端、戯文げぶんなれども頗る面白し、次に

賭行無常の鐘の聲をやくめつわらくの響きあり、花羅剎はならかしの色の盛者必衰のことはり、おこる者久しからず人界の有様は夢幻の如し、猛き人も遂にはたぶさなり、云々

書はじめは、文も全く『平家物語』に似せ、さて其の人物まで、彼れに擬して、

伊丹入道可運を 清盛に
重右衛門を 重盛に
宗右衛門を 宗盛に
友之助を 重衡に

役割したるなど、なか／＼意匠を凝らしたる作にして、際物さいぶつなれども當世人の奢侈を戒めたる寓意を含めり。文また頗るめでたし。

作者は此の序文に、『平家物語』の作者を詳しく紹介して、とていふやう。

今平家の作者は文官にして文字まづうまかりしが、竹馬より假名草紙を好み我を番集め、我を棒にちりばめ、我を樂み、世のそしり笑ひ、筆を筆にして又十二巻を著し、來る春櫻にききませ世のつひをいさはず

と、作者が自分の經歷をほのめかしたるもまたあかし。

寶永に至りては、與志が全盛の時といふべく、草子の作甚だ多し。今其の主なるものを擧ぐれば

『傾城武道さくら』 五冊 (寶永二年板)
『邊髪五人男』 五冊 (同年板)

此の作は雁金文七等の事を綴りたるもの也

『風流三國志』 五冊 (寶永五年板)
『御前二代曾我』 六冊 (寶永六年板)
『野傾友三味線』 五冊
『傾城御羅三味線』 五冊
『野傾百物語』 五冊
『男傾城式枕』 五冊
『衆道戀暮櫻』 三冊

以上五部は、板行の年月詳ならざれども、寶永年中の板なることは確實なり。其の一部分は、入文字屋ものの『色三味線』類の遊女の名寄に屬し、その他『今平家』または『御前二代曾我』などは、其の體を昔しの軍書または淨瑠璃に取りて、當世の人情、殊に狹斜の趣を寫し、或はまた野郎、

傾城の内証事を綴りしものにて、其の系統は純然たる好色もの作者なり。併しながら中には、當時の事實其の儘を殆ど酒色せざるもあり、或は隨筆様の著もあり。されどまた當時代の事實として、採擇すべき點は、興志の作に多し。

『茶傾ひそり顔』(四冊、寶永四五年の板)の如きは、其の一にして、一半は戯作、一半は隨筆なり。

一之巻

色里腹立顔

二之巻

茶や腹立顔

三之巻

茶傾腹立顔

以上三冊は戯作、但し三之巻の『色里大和詞』は、京、大坂の傾城屋、茶屋にて、其の傾さまぐに通用する號馬の詞を集めしものにて、例へば、

女郎の聲名

あてんさいふなてきちり、さいふ

客の聲名

傳をつたへ、平なひら、六なし。

又家名の頭字と名の頭字にてよぶもあり河内屋の庄吉をいせし。

の如し。もとより通人には耳に馴染の詞なれど、當時初心の粹士が其の門に入るの教科書なりしこと勿論、今日とても淨瑠璃本などに、不審紙を貼る人々には、此上なき小辭典なること疑ひなし。

四之巻は、『音曲色酒盛』と題して、此の巻には、一中ぶし、半太夫ぶし、土佐ぶし、若太夫ぶし、祭文等、其の頃遊里にて口説みし音曲二十四編を集めたるものなり。

此の外にも井上播磨が、生涯のふし事數百段あるを、全部三冊に收めて板行ありしに、長年の火災にて焼失したりといふ。こはなは後の事なるべけれども、音曲集に因みあればこゝに記す。

以上列擧したる浮世草子は、西澤興志、もしくは稀に朝義の名ある作のみにして、凡元祿の末より寶永年中の板行が多し。正徳に入りては、興志の作を此の中に發見せず。思ふに興志の名は寶永頃のみ用ひしなるべし。

其三 一風作『後室色縮緬』

享保に入りては、草子の作少し、其の數部には西澤一風の名あり。

『後室色縮緬』(五冊、享保三年板)は、一風が草子中の名作と稱せらる。また一名を『色縮緬百人後家』といふ、其の謂は、東山の片邊りに夫婦の老人あり、一日老女は、五條川にてすゝぎ洗濯をなしたに、美麗なる詩繪の盃、中には野郎の姿をかゝせたるが、ウカ〜と流れ來りしを、老女拾ひ上げて呆然と眺め居たる所へ、二十ばかりの女、髪を切りて後家わけに結び、こゝへ尋ね來りしかば、老女は盃を彼女に返して、其の身元を聞きしに、これは此の川上に住ひ、世に歡樂を極め玉へるあるやんごとなき後室の侍女にて、こゝに給仕する女どもは、みな後家の風俗して事へ奉るとなり。さて此の盃は後室の秘藏し玉へる器なるを、今日しも納涼の宴を開かせられ、

水上に浮べてはしなくも流失しけるが、老女のお庇にて再び主人の手に入ること、まことに嬉しき限り、何とぞ此の返報致したし、幸ひ加賀の菊酒、越中のこけら鮎、上野の待夜の玉子、山海の珍珠を集め擬應申さん、イザ玉へと老女を案内して、後室の御前に誘へば、後室はまだ三十前後の美婦、盃の手に戻りしをいたく喜ばせ玉ひ、これより亂れ酒、御前にて御馳走あまた頂き、後室の御所望、何か御慰みにもなるべし、とつれあひの老人を伴ひ來りて、世の中のありとあらゆる後家話をして、御機嫌を伺はん、と百人後家の發端は斯くの如し。毎卷二編、即ち二條の物語を一冊に収めれば、都合十人の後家の話にして、百人後家の題には僅かに其の一部分を充したるのみ。此の發端は、前の『今平家』の筆法と一様にして、西澤慣用の手段なり。其の序開き頗る面白くこれ西鶴の『一代女』等を學びしものなるべく、其他はまた『五人女』を眞似たる書き風なるべし。但し此の作の價値は、『百人後家』といふ標題のすばらしきにありて、もとより西鶴の作と比すべき作とも思はれざれど、一風作の尤なるものなり。

『熊坂今物語』(五冊、享保十四年板)は、熊坂三郎、同四郎とて兄弟の悪漢、長崎丸山の遊女町に遊び、兄弟力量を鼻にかけて、むたいの色情より喧嘩をはじめ、散々の亂暴を働きし事實を三番つゞきの狂言に仕組み、片岡仁左衛門(元祖なるべし)存生のうちこれを演じて、大當りを取りし事あり。作者は元來覺のよき自慢の人とて、其の筋の大畧によりて、此の一篇の草子に綴りきとぞ。種類は前の『今平家』と同じ跡にて、傳奇ものなり。浮世草子の事はこれにとり、淨瑠璃作

者の事につきて一言すべし。

其四 淨瑠璃の作

一風は豊竹座の作者にして、紀海音と時を同うし、海音が盛に作りし間は、一風はむしろ其の作多からず。初筆は、元禄十六年の『井筒屋源六戀の寒暄』なるべし。これに次ぐは正徳三年の『傾城國姓爺』なり。此の外になほ作りしやも知れざれど、兎に角、享保の中頃までは、淨瑠璃の作至つて少しと見て可なり。此の間は却て草子を専ら綴りきと思はる。然るに享保八年頃より頻りに淨瑠璃の作あり。すなはち

『慈仁寺供養』

(享保八年)

『女 蟬 丸』

(同 九年)

『頼政追善願の芝』

『昔米萬石通』

『身替弓張月』

(同 十年)

『南北軍問答』

以上はみな田中千柳の手傳なり。斯く一風が一時に作りはじめしは、是より先き豊竹座の立作者なる紀海音、まばらく劇壇を退きしかば、西澤一風奮發してこれに代りきと見えたり、されど『女蟬丸』の如き、定めし面白からんと待設けしに、見物初段を見てせいきをつかし、「拍子のない出がたり出使ひ」に評判よろしからず、作者意外に驚き、續いて翌十年も作うけよからず、豊竹座

大に失敗し、芝居不景氣を來しければ、これは容易ならぬ事と、すなはち並木宗助、安田蛙文などいへる一味の若手を誦らひ、彼等元來淨瑠璃の一段づつも書きえぬ器量にあらざればとて、一風采配を取つて二人を指揮し、大に工夫を凝らし、幸ひまへかた書き集めたる假名草子の『北條時頼記』に思付き、其れに近松が作『最明寺殿』の雪の段を補綴し、淨瑠璃五段を完結して出し、作者の骨折徒勞ならず、此の作非常に當り、殆ど二年間打續け、近松が『國姓爺合戦』以來の大入りを得て、豊竹座の不景氣を挽回せしは、實に一風が盡力なりきとぞ。これ有名な『北條時頼記』にして、享保十一年の作なり。

其の後『難波みやげ』は、「近松の作の女鉢木雪の段を切加へて五段の都合、首尾全し、かく古き名作物を取合せ玉ふ所偏に作者の機轉なり」と評しぬ。所詮一風の作は、草子も淨るりも創意に乏しけれども、後世人の如く、毫も其の形跡を曖昧にせずして、明白にこれを公言せしは、昔しの人

の樸直思ふべし。一風自らいへらく、
近松門左衛門は作者の氏神也、年來作り出せる淨瑠璃百餘番、其内當り當らぬありといへども、（註） 鑿するに何れかあしきはなし、今作者といへる人々、みな近松のいきたる手本とし慕ふものなり。此道に學ぶ近松の像を繪畫、晝夜これを拜すべし、又あるまじき連入おそるべし。

蓋し作者は恐らく其の近松を祭りし氏子の一人なるべし。また當時の作者の有名なる人々を擧げ、

平安堂の流なくんで一作なまる人々近年出来

- 一 紀 海 音 一兩年休足
- 二 竹 田 出 雲 手芝居自作
- 三 松 田 和 吉 是も休足
- 四 並 木 宗 助 當年より作なり
- 五 安 田 蛙 文

四澤 一風 今は老人なり心斗り

あらまし此通り淨瑠璃の作者すくなきもの當り淨瑠璃は稀にしてあらはれはつれ也

といへり。はじめの宗助、蛙文等を推して、自分はあれども無きが如くす。これ先賢のつとめ、一風が老後の思ひ出なるべき歟。(以上『操年代記』による)

一風が『今昔操年代記』(二冊)は享保十二年の著なり。もとより精細に調べ、諸書を参考し、あまたの研究を積みし著述にはあらざれども、自らいへる如く、著者は「音曲に身をよせ、播磨風より筑後、豊後の淨瑠璃、替る毎に見物せぬといふ事なく、就中播磨になづむこと深く、此の流義を稽古したる事もあり。今は老年に及び、齒も殆ど脱げ落ち、言葉漏れ、舌自由にまはらねど、富士の牧符の道行などは最も得意にて、今の太夫の語るを聞きては、もどかしく思ふなり。かく名人と同席につらなりしも不思議の縁にて、此の流義のそもくより今日までの來歴」其の大畧をこゝに述べしものにて、文飾もなく、記憶の儘なれば小冊子なれども、後人の資料とすべき書なり。

一風は享保十五年『本朝擅特山』の淨瑠璃を出し、翌十六年五月歿す、享年六十七、辭世の句に、
散り行くや風に常盤の木の葉雨
墓は大坂下寺町大蓮寺にあり。法號常寒貞寂禪定門といふとぞ。

都の錦

都の錦は是迄其の氏名さへ詳ならずしが、近頃櫻庭篁村翁『早稲田文學』に『小説家の人物』と題し、此の作者の經歷に就き珍らしき一語を掲げられたれば、それを借りて本傳とすべし。篁村翁の文に云く、

「元祿以前の作家の人物は、一角ある者が、世の厭石に角をあさへられ、丸く碎けて出たるが多し、鈴木正三が異教退治、淺井了意が佛法弘通、皆な藥を包む爲の餡なるが如し、西鶴も俗名を平太夫と呼しとるよりあもへば、浪人出の野心坊主、今少し早く世に出しならば大坂へ籠るか、天草へ集るか知れざりしならん、謀叛氣即ち作氣のあと其作によりても知らるゝなり、近松門左衛門これはまた云でもの事なるべし、中に尤とも奇骨稜々たるは此頃作家四天王の一なる都の錦其人なり、其經歷は次に出す同人の訴狀によりて知るべし、此人京都にて大和莊子、御前御伽婢子、元祿曾我物語其他數部を著したるが、何事をか巧み出しけん、元祿十六年江戸にて召捕られ遠島の申渡しを受け薩州山ヶ野の金山へ徙されけり、江戸より薩摩へ護送さるゝ船中にても源氏物語を

講じて役人を驚かしたりといふ此時年二十九歳(元祿太平記に「惜かな都の錦其功いくばくもあらずして行年廿七をかきりに西海の波の泡と消る云々」とせしは傳聞の誤りなるべし)山ヶ野金山を遁れ去らんとしてまた捕へられ牢屋に入られしが獄中の苦に堪へず、寧ろ早く死せん事を願ひて左の訴狀を出したり。

乍恐奉願口上覺

本國常陸夫戸郷宇都宮八田之流石大將頼朝公同腹兄左衛門尉知家二十一世

生國攝州大坂

夫 戸 鎮 舟

申三十歳

藤氏系圖一卷

田代藤左衛門殿へ預置

洲渡太刀六孫王經基より傳來

大坂御堂前森田正九郎へ預置

父 松平万右衛門康富

家康公より諱字賜

母 廣幡大納言豊忠女

六年以前に死去號心月院

私儀攝州佐用郡の鎮主佐用姫大明神之社領百四十石此外山林河海等池田輝政之寄附也神主職を相務八田上宮内少輔從五位下光風と申候然るに二十一歳の時儒學爲修行致上京御幸町通竹屋町下る處に借宅住り伊藤源助維禎門下に屬し經書之講義を承り理學辨論の間には北村季吟法印に隨ひ聽歌書の講釋を烏丸亞相資慶卿の御會書に免され於是和漢之書に眼を曝し已に六年也然るに同學の惡敷友立に誘引せられ二十六年の春に與風花月之集興を催し終に艶色に溺れ島原に行通ひ適々學問之爲貯置たる金銀過分に遣捨剩へ祖父廣幡家の所持町屋敷を三條堀手謀計を以て密に賣捌其代並秘藏之書籍を始め衣類等迄無殘賣拂すて申候に付親類縁者の勘氣を請朝夕難續迷惑仕候故翌年二十七歳の春新黒谷門前に引込小庵を結び佛法修行を志し山科大宅寺の月波和尚に參禪し即鎮舟と改名し或口業の爲假名書物を述作いたし書林に與へ其禮物を請渡世候事二年六月其後立身の爲に同學の方より書狀を請け東武の親類にかくれ密かに未四月三日江府へ罷下添書の方を尋候處に彼方此方行通ひ相尋候へとも近き頃類火に逢ひ行方知れず罷成候に付當分滯留すへき住家無之候て町々徘徊候間無宿故布施孫兵衛様に見咎られ則寺社御奉行永井伊賀守様へ御引渡有之同冬十有遠流に處せられ御當地山ヶ野金山へ召放され御養育を請候事難有奉存候野拙儀幼少之時分より日置流の弓術を好み笛掛犬追物まで無殘處習ひ得候に付金山に於て御役人衆中様へ被召寄折々弓術を御尋成候故朝夕心安く出入仕り右之衆中より御厚請に預

261192

り候に付流入中間の源次郎と申者恨深く自然と某儀を横道を以て無理と宛行申候に付無念至極に存當七月二十二日之夜小屋を忍び出自害可仕覺悟にて深山に引込已に絶命可然と存候處に俄に變心出來いやく死は輕して生は重し一旦此境を逃出天運に任せ可申候心跡一途に極め其夜直に柵を越へ申候へ共御國中不案内故小河内にて於て天の網難逃其ま被召捕同八月四日に御當地へ入牢仕候是元より重罪と云ひ勿論過去の業因による雖後悔愚夫の迷路分別しかたく恐を不願歎き申候意趣は赤米一合も無汗にて被下候へは退日衰勞仕生ながら餓鬼道の苦を受け二六時中苦痛止事なく來世に於ての罪障又思やられ歎々數存候間おはれ願くは御仁心を以被召出忽ち首を刎られ被下候は生前の大幸難有奉存候

半髮譏大極 善惡則天明

捨にけり今日の命はしからでなきからになる恥のかなしと

私事京都にて都の錦と申候由緒は諸藝太平記と申ものに有之於御當地金山半七など能存し申候

流入

鐵

舟

寶永元載

申霜月十八日

御客屋御奉行様

系圖立と云ひ自ら才學藝術を吹き立つるところ謀叛氣山氣歴然たり、難有奉存候をつけて首を切られん事を願ふ其心根憐にもまた大膽豪氣にあらざや、左れども此の訴狀によりて獄中の苦を免され、同國鹿籠の金山に徙されたり、此所にてはやや取扱もゆるやかになりけん寶永五年に播磨杉原三冊を著はす（赤穂義士の事なり）其他著作ありしならんがいまだ知らず薩州藩市來辰右衛門といふ入都の錦の詩歌等持傳へたる中に寶永七年と記したるあり、首を刎られん事を願ひてより七年はたしかに生たるなれど其後の事を書留たるもの山ヶ野鹿籠にもあらずといふ惜き事かな、小説家中これほどすさまじき經歷ある人前後になし其著作またあもふべし、都の錦は自身小説中の大立者、また小説史中に異彩を放つものといふべきなり。」

右の『諸葛太平記』とは、『元祿太平記』にはあらずや、との説、もし此の説を然りとすれば、都の錦の霸氣は、ひとり其の實生涯に止まらざりしに似たり、蓋し『元祿太平記』は、西鶴を無學と罵り、

京其方は難波の住人にして、西鶴をひるきの餘りに、ほめ過したるいひやうかな、勿論西鶴が軽口われ文の發明、諸國に聞へて其身譽れなるとに似たれど、譽は群りの基とて、元より西鶴文官にして書法をもち、其證據には、好色一代男世の助島渡りの段に、いのこづらな午膝と別に書けり、……新様は世俗まで辨へたる事さ（考へぬ西鶴なれば、況て其外の事さるに足らず、或は曾子の詞を孔子の語となし、枕草子の文を源氏物語にゆづりたるも、凡て西鶴が作れる双子には、小大の誤あらずといふ事なく、只管片言を載せずといふ事なし、然るに西鶴は難波の立物にして、われ文の類は獨大坂のみ

勝れたるやうに思はるゝは、茄子を踏で蛙と思ひ、水鳥の羽音を聞て、敵と疑ひ給ふが如し云々、

當時都の錦の眼中には、ひとり死せる西鶴あるのみ、故にこの強敵をさへ打倒さば、生ける仲達取つて代り、戯作の霸權を占むること容易なりと思ひ、かくは一擧を試みしなるべし。而して我が佛を尊んでは、

當春（元祿十四年）より都に、都の錦といへる物出来たり、和文を發明し西鶴を輔けんと思ふ、本より此男和漢の書に濟りければ、理を説く事委しく、枕詞は春の花の匂ひ多く、……漢文の意氣地なみかき、牡丹餅のやうな柔な中へ、又かきもちの如く堅い事を交ぜ、或はつと笑ひ、或はつと恐る、誠に文質彬々として、面白く可笑くあはれに、殊勝におほへ侍る、西鶴なくなりしめて其道絶しにもあらず、……ひたもの新しき趣向を書つてくる事、是ぞ今此都の錦が智裏袋、口を開けばめつたに秀句をいふのみ

と飽くまで手前味噌をあびて、さて其の著作どもを紹介していふに、

其都の錦の事は、未だ世上に知る人なし、やうく當秋、兎の毛の先程古人の糟を吸り、元祿會我物語、大和莊子、御前御伽傳子、風流神代卷などを作れり、彼が文を伺ひみれば、大概西鶴が詞を盗み、其外時のはやり詞を盗り集め、後前揃はな文章なり、誠に目くら千人の世の中なれば、都の錦が作りたる草子をもてあそぶものもあるべし、おのれが學問を拾ひ出和文にいらざる聖賢の語を澤山引集め、所々に性理の沙汰、去さばなめ過ぎ侍るなり

と大坂ものゝ詞を借りて、わざと非難させたるやうなれども、なほ學問を誇り、更に大坂ものゝ詞を續けて、

西鶴先生之を聞ば、極樂に於てさぞ尊明にて候はん、實にや都の錦が元口より、新式五卷書、御前發經記、寛酒會我、女大

名丹前能の作者西澤九左衛門が作りし文こそ、遂に睡れて聞へ侍る

と、浮世草子作者にては、さまで取り所のなき西澤一風を引合せに稱揚したるには、聊か理由のあることにて、必竟西澤は『元祿太平記』の節にもある如く、都の錦を世に紹介したる先聲なればなるべし。斯の如く百方手段を運らして、一時に名聲を博せんとしたるは、其の腹赤しとはいふべからざるも、壯年血氣の文士にはありうちの事なるべし。此の筆鋒にて、傍若無人、當代の文士をあげつらひたるは、『御前お伽婢子』の總論なり、彼れ是れ對照すれば、『元祿太平記』の著者が都の錦なることいふ明かなり。また同書が伊藤仁齋を稱へ、

今此時に存へて眞儒といへるは誰々ぞ、お江戸の沙汰は申もおろが、先づ都の名にめでし、博學明辨性行を兼備へたる君子之學、今は唐にもあるまいと朱子を非に見る伊藤源助古今無双の大儒なり

といひ同門生なる林九兵衛が學を稱へ、書林仲間の學者の筆頭にあく、みな謂れあることなるべし。たゞ惜むべきは此の英物、不幸にして世を早うし、充分に驥尾を伸ぶる能はざりしことなり。

錦文流

錦文流は浪花の俳人にして、また錦頭軒と號す、氏名を詳にせざれど、竹本座の淨瑠璃作者にして、近松と時を同うし二三の作あり、『東海道虎が石』は其の一なり。浮世草子にては、西澤一風、都の錦等の書きぶりに似て、一編を通じたる脚色は、西鶴にこれなきところ、後來續きもの、小説

は、此の人々の作をはじめとするに似たり。元祿の末より寶永に至り數部の戯作あるが中に、

『風流今兼好』 五冊

『家大門屋敷』 五冊

は寶永二年版、後者は淀屋辰五郎の事蹟を綴りたる戯作なり。また敵討ものには

『熊谷女編笠』 五冊

あり、寶永三年六月七日京下立賣堀河の東へ入る民家にて、賤女二人姉の敵を討ちし事ありしをやがて一編の草子にものし、同年版行に附しき。思ふに當時の出來事を直ちに草子に綴り直すこと此の頃の流行にして、作者もこれを得意とするが如し。なほ

『好色手柄咄』 五冊 (寶永五年版)

『本朝諸士百家記』 十冊 (同 六年版)

等あり。前者は女郎名寄せ風の草子なり、後者は名の如く、諸士百家の俗傳にして、一とせ文流が堀江の河岸に居を占めて、靜に病を養ひし其の砌り、聞きし諸人の話しを綴りたるものなりといふ、宇治亞相卿が『拾遺物語』にならひたる隨筆なり。此の書は全部二十冊、右十冊は其の前輯なり、序文に「浪華津誹諧僧文流撰之」とあり。

八文字屋もの

上 自元禄十二年
至寶永八年

元禄享保の間、盛に行はれたる小説の一端を前に浮世草子といへり。此の浮世草子、今は元禄に榮えしものと、享保に行はれしものとを區別し、前者を西鶴本、後者を八文字屋ものと呼ぶに至りぬれど、其の以前までは、或識者を除きては、一般に浮世草子を總稱して八文字屋ものと呼びき。而して此の八文字屋ものうちには、前の西鶴本を含み、其の西鶴本がまた西鶴一人の述作ならざりし如く、後の所謂八文字屋ものも、當時八文字屋一手より出でし本のみにはあらず、即ち作者も數人あれば、板元も數軒ありて、是等が一躰となり、享保の俗文學を大成したる譯なれども、他の作者、板元は知る人稀れになりて、一般に八文字屋ものにて通用せしなり。然れども斯くまで八文字屋が名を揚げたるには理由なかるべからず、蓋し八文字屋もの、名聲を博したるは作者江島屋其積と版元八文字屋自笑の力なり。

其一 元禄寶永間の戯作界一斑

團水が言葉に「京より大坂へ十三里、とても結ぶ夢を伏見の一夜船」と。「元禄太平記」は、此の伏見の一夜船に、京都、大坂の書肆二人を乗せて、當時出版界の有様を物語らせたるを聞くに、左の言葉あり。

大坂の本屋は京へ登り、京都の書林は大坂へ往來して、互に本を替へ云々

其状況見るが如し。實に京都、大坂は路程僅に一日程、三十石船に乗り、淀河を上下する交通の自在なること比なし。されば京都の出版物は、大坂へ、大坂の出版物は京都へ、互に交換せられて、京坂の間文學思想の流通することに速なりしかば、寛文に京都に發芽せし假名草子は、大坂に其の種子を齎らし、元禄に大坂に榮えし浮世草子が、今回は京都に復版し、享保を盛時として、八文字屋もの、こゝに榮えたり。

そもく井原西鶴が、天和二年に『好色一代男』を著し、次で『二代、三代男』、『一代女』等、同じ趣向の草子が、大坂は勿論、京都の風流社會に、いかに歡迎せられしかば、今より容易く想像しがたけれども、寶永、正徳に至りて、同じ趣向の草子、殊に『好色一代男』の後日、又は之れに擬したる草子の、予が見たる限りにも、六七種に及べるを察すれば、はい、西鶴崇拜者の數は推量せらるべし。蓋し西鶴の作が、斯くまで持囃されたるは、是迄に例なき俗文もて、寫すところは粹人の理想世界、即ち此の人々の心には、一代男世の介となりて、日本國中の遊里を經廻り、なほも餘命が續くならば、女護の島へ渡航をなし、人間無比の歡樂を極めばやと、われも人も極端の肉樂主義に走せたる所へ、思ふ笑壺に適中たればなり。

西鶴が元禄六年に身まかりし後は、其の作者一時絶えたるに似たれど、元禄の末より、其の系統を繼ぎ、名乗り出たる作者あまたあり。西澤與四、北條團水、都の錦、月尋堂、あついで得意の

筆を振ひ、文華一時に燦然たりき。爰に其積は最初職作に名を掲げざりしかば、其の初筆を詳にせざれど、八文字屋板に確證ある元祿十二年を出世の時と假定するも、先輩としては西澤一風に相前後し、而して他作者は、或は不幸にして驥足を延べざるに世を早うし、或は一時僅かの作に止まり、遂に歸する所は當時無名の作者其積にありき。元祿より享保を通じて凡そ四十年間、其の述作するところ百部に下らず。年代よりするも、文才よりするも、西鶴に繼ぐ者は其積なり、京都を中心とせる浮世草子、役者評判記の板元は、實は其積を圍繞せるに外ならざりき。

其二 江島屋其積の傳

其積は通稱を江島屋市郎左衛門といふ。京都京極通り誓願寺は、淨土宗の本山にして、本尊は佛師春日作の大佛なり、此の寺の門前に、むかし餅を賣る家あり、大佛餅とて世に持囃され、いたく繁昌して、富巨萬の財主となりぬ。其の後豊太閤洛東六波羅の南に、方廣寺大佛を建立せられしが、他家の餅屋こゝにも出來て、新たに大佛餅の店を開き、今に連綿として繁昌人のよくまる所なり。扱京極通りの餅屋は業を轉じ、誓願寺通り柳の馬場へ宅を變じ、子孫あつと奢侈に耽り遊里にあまたの財を散じて、風流をこれことす、其積即ち其の子孫なりとぞ(『翁草』等)其積は西鶴より後ること二十五年、近松よりは十六年、寛文七庚未年に生る。其積若かりし頃放蕩を盡し、遂に産を傾けしが、其の經驗こそ生涯の述作となりけれ。元祿六年西鶴の没せし時は、其積既に二十七歳、今日何の消息をも傳へざれど、粹法師と稱へたる人に、生前いかに相見

ざることのあるべき。又一方には近松門左衛門の盛時、而かも其積は役者評判記の作者として、時代を同うすること久し、其のまばく相往來せしや必せり。あはれ是等の文豪を前驅に立て、後進に名作家なき理いはず由なし。其積の出るは偶然にあらず。

元祿十二年の役者評判記『口三味線』は、八文字屋板にては其積作の最初のものなりといへど、『目利講』によれば、此の以前「松本治太夫方へ淨瑠璃本を作り遣はし、其の語り本を八文字屋にて板行させし」事實あれば、『口三味線』以前に多少の述作ありしは勿論なり。唯今日傳はれるものは八文字屋板より數ふるの外更に證なきを憾みとするのみ。

其三 八文字屋の起業

八文字屋八左衛門は、京都蘇屋町誓願寺下る町の書肆なり。いつの頃より業を營みしか、慶安四年、經佐渡七太夫正本に、八文字屋八左衛門板とある由『南水漫遊』に見え、貞享二年九月印本の『京羽二重』に、淨瑠璃本屋として、二條通寺町西へ入山本九兵衛(又正本屋九兵衛とも稱す)、同南側鶴屋喜右衛門と、八文字屋三軒の名を載せられたれば、既に久しく京都にては、淨瑠璃本又は草子類を賣ぐ家なりしこと知るべし。然れども所謂八文字屋の名の顯はれしは、此の淨瑠璃本屋にはあらず、浮世草子、役者評判記の板元をなし、大に世の喝采を博したるによれり。

當時の八左衛門は、即ち雅號を自笑と稱する人にして、姓は安藤、寛永六年の生れなり。其積よりは一歳の兄、『口三味線』を板行せし元祿十二年は、自笑が三十四歳の時なり。當時は徳川氏の

全盛期、元祿時代の風俗が、豪華奢侈の頂上に達したる時とて、上下あしなべて遊興に耽り、耽樂をこゝとする折柄、遊里、芝居の繁昌は前代未聞の有様にて、名妓もいでたれば、名優もまた出でたり。而して之れが反影として第一に流行したるは、遊女、役者の姿繪、又は其の狀態を寫したる浮世草子なり。『元祿太平記』の所謂「當世は只堅い出物を取置いて、商賣の勝手は、好色本の、重寶記の、類が増じや」と京、大坂の書肆の眼が此の俗受に注ぎし時、八文字屋は、既に淨瑠璃本屋といふ草子類を出すに因ある家柄なれば、世才に老いたる八左衛門、其の邊には些も抜目なく、其の頃若手の作家江島屋其磧、後世浮世繪師の名家と仰がる、西川祐信、此の二人を籠絡して、専ら自家出版の作に従事せしめ、且つ板下書き、板木師も名工を選び、製本には意匠を凝らし、萬事流行に先立て、他の板元より出す本よりは、一見して躰裁よく、奇麗に出来上りをもること、實に今日われわれが他板と比較して、容易く認め得べき事實なり。されば當時他の板元は是等の數點に劣り、忽ち八文字屋に壓倒せられ、遂に浮世草子、役者評判記は八文字屋の縁となり、前より多少名を知られたる鶴屋、正本屋をはじめ、谷村、柏屋、菊屋、中頃は其磧自ら江島屋を名乗り、多くの本屋と連合の策を運らし、齊しく八文字屋に抵抗したれども、一たび收めたる八文字屋の名聲に到底敵しがたく、遂に元祿の末より、寶永、正徳、享保、元文、寛保、延享、寶曆、安永を通じて、凡七十年間、草子類板元の權を握り、其磧の外にも作者を聘し、年々の出版少からず。即ち八文字屋八左衛門の銘打たる本の、多く書肆に商はれ、多く讀者の眼に

觸れしかば、他の板元よりも、相應に出版はありしに拘らず、其の多數に制せられて、さながら曉の星の如く、世間は一般に此の頃の草子類を呼んで八文字屋ものと稱ふるに至りぬ。蓋し八文字屋の創業に、其磧の功多きは勿論のことなれど、而かも自笑が文學思想に富みて、統御の術を得たるにあらざれば、寧ぞよくあまたの名家を繋ぎ、此の全盛を致すを得ん。京都蘇屋町八文字屋は櫻木の名所、自笑は一個の豪傑也。

其四 役者評判記の起原 八文字屋の評判記

寶永五年板の『役者替古三味線』の開口に云ふ、

(前略)東の山の端白く、芝居の一番太鼓に、正月程あつて、早くたゞき出せば、今日は是を、さう早くに春狂言見ませいで、帯しなをして立出れば、表には蓋たらしの役者姿繪を、轆にして賣男、一文に一本づゝ賣品に、それの役者評判申して、是をそへにしてあきないける、いひまは昔は芝居すいたものを見えて、ふんもしつたり、こゝへも一本、坂田藤十郎をいひ申さう、れん入て評判をそへてたもれ云々

古き所にては此の類の役者評判も行はれしなるべし。併し役者評判記と稱する冊子の起原は、明暦、萬治の頃より既に板行になりし遊女の細見に基き、其の位付もまた遊女の位付に胚胎せる思付なるべし。而して此の評判記はいつの頃より行はれしといふに『三升屋二三治劇場書留』には、天和二年より三ヶ津評判記出る由を記せど、天和に三ヶ津評判記あるべしとも思はれざれば、此の説

頗る覺束なし。『南水漫遊』には、役者の技藝を評したる書は、西鶴團水に擧りて、其積自笑に至るどあり。『近世奇跡考』に、「貞享五年役者評判記野郎立役二町弓といふ書ありて、此の頃の評判記は、おほく半紙本にして位付なし、元祿の末横切本となり位付あり」と、初代市川團十郎の藝評をさへ採萃したれば、これらをや古き評判記とすべし。元祿に至り八文字屋以前の評判記にては、同十一年の『役者櫻欄帯』あり。今假りに此の評判記を、元祿に行はれたる評判記の例とし、さて八文字屋の評判記に比せんに、『櫻欄帯』は一冊もの、紙數七八十丁の枕本にして、挿畫もなく、字跡も細かく、舛裁頗る簡潔なり。今年(寅の年)の評判を新評と呼び、其の後へは古評を集め、新評の足らざるを補ひたれども、藝評として見るべき點少し。此の評判記の口上書にいふ、

此評判京大阪江戸三ヶ國の役者何役によらず少くもせしほまやうはさいふほどの役者なれば不遜是にまゐりし申候(不明)

と、蓋し京、大阪、江戸三ヶ津を合併したる評判記は、此の頃をはじめとするに似たり。此の本は和泉屋八左衛門板なりとぞ、後に其の證あり。『立役上々吉之分』として、

京 竹島幸左衛門 京 山下半左衛門
京 坂田藤十郎 京 中村七三郎

右は一例のみ。次に竹島幸左衛門の評に至り、

扱評判作者いづれも横に、しかられまするこが御ざります、當年は改て此人を巻頭へなしました云々

蓋し此の『櫻欄帯』の作者は、當時の名優坂田藤十郎をいいて、竹島幸左衛門を巻頭に直したる申

譯なり。

『役者口三味線』(枕本三冊)は八文字屋評判記の最初のものなり。元祿十二年三月版、京、大阪、江戸の三巻に分つ。これには挿畫あり。『立役之部』にて、

上上吉 坂田藤十郎 萬大夫座
上上吉 中村半左衛門 同座
上上吉 竹島幸左衛門 早雲座
上上 大和屋甚兵衛 同座 (以下略す)

此の目錄終れば、次に開口と稱する序言あり。例へば

或有福の家に生れて、後家親に頼り、よろづ心の儘に成長し子息、天性藝道を好み、朝夕芝居の噂のみして、即しなく、苦もなく、女房もなく、ちまもなく、金計りはありあまる大さん、世わたりを手代にまかせ、ある春雨のまげく降る日、日頭出入する慶安といふ儒醫を招き、若衆遊びの粧をいひ合ひて、「酒心よき折ふし、次の間に田舎より學文の爲上京せられし出家、うち見は殊勝に見ゆれども、是も内証は菓子屋の客をおぼえて、佛書ひろげながら役者まゆるうは、きに眼をさらし、所々にふま紙つけて、是一事をかまへたる法師、障障敷の眼なるにおどり出、三人衆道の根本を論じ、役者の品評に及び、果ては此の法師」さてこの事に、京三芝居の子供役者の、善悪の評判をなすより名をさしてたづねませう、のこらす仰きおされい、是まはいまりめ口三味線にのせられ、よしなし事をうか／＼と申ませう。

と是れより役者の評に移り

立役之部

上吉。坂田藤十郎 替名伊左衛門

「法師の問てはいく」役者まゆるは、きには、竹島をあらため巻頭になし、竹島のせらるゝ事、にせてにせられ所あり、第一げいまやなれば、げいは役者の大根なれば、巻頭におくこの断り、尤可也、藤十郎には、げいせいといふ云たてより外、さらに今迄は、り所作を見ず、何のゆゑに巻頭におくる、ぞや、大志んこたへて「尤前評あしきにあられどその今迄は、りたる所作もせずして、ひさく、京の見物に見あられず、藤十郎く、と稱美せられ給ふは、さんだりはれたり、げいのありたげはたらがる、方よりは、まさりて徳有上手にあらずや。原來此人まげの役者に生れつられたる所有り、されば此人、たつき玉ふさきく芝居はさながら、大まげのやうにきこえ、見物思ひ入格別なり(下巻)

右の例にては全豹を窺ひがたきも、此の評判記は、前の『櫻桐帯』の評判に對し駁したるもの、坂田を揚げて、竹島を抑へぬ。當時は未だ定まれる評者なければ、所謂通なる人々が、最負く役者を評判して、之れを本屋に與へ板行せしものなるべし。されば評者は成べく名の知れざるを欲し、且は他人を是非することなれば、開口を設けて他人の口に依て、評判せしむる方法を講ず、必竟役者へ對する斟酌に外ならじ。又一種の敬語あり、例へば此人といひ、或は殿といふ、兎角遠慮勝の所多し。但し前の『櫻桐帯』の一口評にはこれも要なけれど、『口三味線』に至り、段々懸評の微細に入るに従て、此の思ひ付あるは當然のことなり。然るに此の『口三味線』の作者が、年々評判記を作ることもなりても、此の法則を守り、開口は儀式のやうに附することとなり、又評判は大勢の口を假りてなさしむる任組となり、即ち問答辭を用ひ、今日にては此人など一種の敬語が、役者の評判には先例古格となりて存するもあかし。

此の『口三味線』が『櫻桐帯』に比して、いかほど進歩したる評判記なるかは、先づ三ヶ津を三巻に區分したること、挿繪を附し評判記に光彩を添へたること、開口を附し、多くの判者を接へ、一種奇警の着眼と輕妙の文を以て、斬新なる問答辭の懸評を擧め、所謂八文字屋評判記の基礎を確立したる等主なる點なりとす。但し位付は『櫻桐帯』も『口三味線』も、上上吉、上上、上、中、中、中と階級は五段あるに過ぎず、爾來百五十年、維新前までに、評判の仕方が巧者になり、膝裁にも多少の變化はありたれど、要するに舊格を守り、『口三味線』以外に一機軸を出さざりしを思へば、此の評判記は此の時既に充分の發達をなしたるものといはざるべからず。『口三味線』一たび出て、評判記面目を改めしかば、二條正本屋九兵衛よりも右の作者に『役者一挺鼓』を作らしめき。八文字屋は商賣上喜ぶべきことにおらざれば、いかなる約束を結びしかは知らねど、遂に其礎をして其の筆を縛り、正本屋方は圓水と號する人に書かしめ、其礎は八文字屋の爲に専ら筆を執ること、はなりぬ(『役者目利講』)。これ此の評判記が世間に喝采を博したる事實なりとす。『役者一挺三味線』は元祿十五年の八文字屋板なり。評判記の躰裁は前に同せければいはず。さて是より寶永年間の評判記を擧ぐれば、

- 『役者三世相』 (寶永二年)
- 『同 櫻古三味線』 (五年閏正月)
- 『同 櫻 六條』 (七年三月)
- 『同 友吟味』 (四年三月)
- 『同 册内接』 (六年三月)

等なり。右のうちには端本もあり、月日を記せざるもあれど、大概は三月付にして、正月付のものも閏月なり。依て此の頃は未だ一年に一度づゝの出板とおぼし。即ち正月に顔見世の評判を板行し、三月に二のかはりの評判を出す例は未だ行はれざりし如し。尤も此の外に正月板のものあるかも知るべからず、今は唯一部分に就て推量したるのみ。

此の頃評判記は他よりも板行せしと見え、『難波入江船』(上下二冊、西川喬風、板元未詳)の如き、大坂のみの評判記あり。原來役者の評判には最負ありて、依怙の沙汰も少からず、兎角公平に流れ、くろくとは淺ましきこと、思へりしか、其の開口に

(前略)成程御ていほう御意の如くすこじにても、挨拶の、最負があつては評判にあらず、去年の役者の評判を見るに、何ぞやら挨拶らしく、役者どもにも殿様つけて、いひたい事をも遠慮して、得いはねやうすの香やう、まつわれくは合點まいらぬ、よきはよく、あしきはあしく、齒にきりきせす申すべし、後日に子共、役者聞てむれんにぞんたなば、すいぶん壽に氣を付てはげんだがよいはづ云々

此の評判記は畫の襟、膝裁より見れば、八文字屋板と殆ど相似たれど、或は柏屋にて出来たるものなるべし。そはともあれ、右の數言は今日よりいへば役者評判記に革新を催し、評判記の作者をして、批評家の如く、嚴然と局外に立ち、公平を保ち、是非の判者たる地位に高めんとしたる聲といはざるべからず。これ實に一進歩なり。

又寶永五年柏屋勘右衛門板『役者色將葉』は、全部六冊の大評判記なり。これには挿畫なく、開口

もなし、江戸の巻は、日本ばし小川彦九郎板を、柏屋にて取次げるものなり。頭書に云々

此評判は子(寶永五)の正月に及、三ヶ津役者不殘評議致板行仕候、尤前々より世間に評判多く出るまゝ、毎年同様にして板返し之如く……其上推長書又は最負勝名々の詰開、上中下共に相違依有て、此度三ヶ津の役者一人宛所作細に改、大評判役者色將葉大全編目と名付け全部六冊に仕板行いたし申候、御寫勞々機能く御吟味被成御求被下候

とあり。これ八文字屋評判記が大に流行するにつれ、他の書肆にて競争をはじめたる一兆とも見えるべき歟。後に永代評判と稱するは是等をはじめとすべし。位付は寶永四年より白字の上を用ふ。

其五 遊女の『傾城色三味線』

其破の作、浮世草子の八文字屋にて板行になりし初めは、『傾城色三味線』なり。『色三味線』は枕本五冊、繪は西川風、元祿十四年板にして、『口三味線』より二年後に出でき。一の巻「島原女郎惣名よせ」、二の巻「吉原女郎惣名よせ」、三の巻「大坂新町女郎惣名よせ」、四の巻「伏見鐘木町女郎名よせ」、五の巻「播磨室津女郎名よせ」等なり。一の巻「島原女郎名よせ」にて例せば、

▲ 中の町一文字屋七郎兵衛内

一太夫	夕ざり	引舟	あやめ
一太夫	おしはき	同	つがは
一太夫	小ぐら	同	まつ山
一太夫	きり山	同	おとば

一太夫

からはし

同

もなが

(天神以下の名譽す)

右の如く、先づ大まがき六軒の名よせより、太夫、天神、鹿戀の總名よせ、端女郎、揚屋町廿四軒の揚屋、出口の茶屋、北の茶屋合せて廿軒の名、女郎の揚代、正月節句の庭錢が何程、揚屋の取錢がいくらどいふこと迄、廊中一切の諸式を明細に書記して卷首に掲ぐ、即ち純然たる遊女の細見なり。而して此の細見に附するに、一條の小話を以てす。小話は必ず遊女のこと、吉原の細見にはまた吉原のことを綴れり。役者評判記の開口とは、文の長短、趣向の立やうこそ異なれ、彼にては粹のなれのはてが藝評をなす迄の順序を、面白く一條の小話に綴りて讀者を歎ばすと一般、此れにて小話は細見の景物なり、其の景物が本文の細見よりも丁敷の多きなどは、蓋し古風の愛嬌なり。一方には役者評判記を出し、一方には遊女の細見を板行して、専ら俗受に訴へたる八文字屋の着眼、なか／＼鋭しといふべし。然れども遊女細見をかねたる草子は、ひとり八文字屋のみにて出し、にはあらず。例へば『遊女懐中洗濯』(年號板元未詳、但し寶永頃の板)、『美景詩繪松』(寶永五年菊屋板)、『傾城手管三味線』(年號未詳中島板)等あまたあり。

因に記す、傳文節の『珍木全集』に收めたる『色三味線』もこれと同本なれど、此の細見の部分を除きたるは、出版者の注意によるべけれと惜むべし。

此の細見は此の後八文字屋より出でし草子には餘り見受けず。『色三味線』に次で出版の早きもの

は『曲三味線』なるべし。

『傾城曲三味線』(枕本六冊)此の本、元板二種に就て調べたれど年號を詳にせず。されど其碩の言葉にも「色三味線、又は曲三味線、禁短氣」とあり、又『傾城伽羅三味線』(西澤朝義作)の序に、

世に三味線の類本みち／＼たり、或は曲色二挺連友細などいづれも恐なく、さまざまの秘曲を奏し云々

とあり。而して此の『伽羅三味線』は寶永五年もしくは六年板といふこと確實なれば、『曲三味線』は少くとも寶永五年前の板なるべし。『色三味線』以來凡六年の間には、八文字屋板にては僅に此の一部といふ譯はなけれど、今はたゞ所見に就ていふのみ。前に數挺の三味線を擧げたるうち、『曲、色、二挺三味線』は八文字屋板、『連三味線』(寶永二、菊屋板)、『友三味線』(寶永五、板元未詳)等として、此の頃三味線といふ題號の流行思ふべし。これ又八文字屋板の『口、色三味線』に負ふところなかるべからず。

因に記す、『曲三味線』といふ冊子は、『色三味線』、『家大門屋敷』、『長者機嫌袋』の三部を翻案したるものにして、其破の作中の尤も佳作とあれど、右は大概寶永三三年頃の板にして、未だ孰か先なるを知らず、されば『曲三味線』を右三部の翻案なりとは容易に断定しがたし。また此の本が尤も佳作といへるも、覺束なし。

『傾城傳受紙子』(枕本五冊、寶永七年、作者自笑)此の草子は赤穂義士敵討の話を綴りたるものにして、義士に縁故ある傾城みちのくさるが、辛苦艱難して、高師直が妾となり、四十七士に内應して、義士の爲に手柄とあらはすと云筋。

『野白内證鏡』枕本五冊、寶永七年、作者自笑（俗に字並とか稱して、永錢を以て吉凶禍福を占ふ法により、野郎白人の内證を許きたるもの、毎巻錢占の圖式を掲げたるなど、當時にありては斬新の思ひ付、頗る意匠を凝らしたるものなり。こゝに聊か注意すべきは、從來評判記に限らず、浮世草子にても、八文字屋板には、作者の名を署せざるが例なりき。然るに此の年（？）の作より、序文に作者八文字自笑と署せり。殊に本年二部の作あり、更に『禁短氣』板行のまらせあり。八文字屋の漸く盛大に向へるを知るべし。

『傾城禁短氣』枕本六冊、寶永八年作者自笑、此の草子は其碩の傑作とて、既に人口に膾炙し、且は博文館の『其碩自笑傑作集』に收められたれば、世の知る所なるべけれど、當時法話、談義の流行につれて、賛歎記より禁短氣の名を命じ、宗論に准らへ、談義にことよせて、衆道女色の優劣を辨じたる草子なり。此の趣向は寶永五年菊屋板の『風流三國志』三の卷「志の男色譚談」、「志の禁談義」などに其の端を開けり。作者も自ら得意の作とほしく、前の『傳受紙子』の卷末に、紙子傾城が敵討の後、尼となりて法話を演ずる所に、『傾城禁短氣』のまらせあり。又『内證鏡』の三卷末にも、

扱音標へお断申上ます

傾城禁短氣先へ出し申管に評判の本に書かせ候へ共、少しは候ゆへ此内證鏡先へ出し申候、此跡へ追付來月中にちがひなく出し候、それゆへ書まるし候

とあり、世間にも餘程待設けしことと思はる。而して少しは候ゆへとあるは何のいはいかぬるか、其碩自笑の争端は此の邊にありしにあらざるか、そは次に説くこととすべし。此の『禁短氣』いで、八文字自笑の名は高くなりぬ。又『禁短氣』がいか世間に持囃されしかば、是より凡三十年の後、寛保四年に、其の後篇として『情の手枕』（作者其碩）あり。更に後れて明和二年に、江戸大傳馬町鶴隣堂より、『禁短氣』の次編、同三編（作者未詳、五冊もの大形枕本）を出し、又文政十二年には、大坂にて『禁短氣』を再板せり。以て其の一斑を窺ふべし。

中 自正徳二年
至享保四年

其 一 八文字屋と江島屋との對立

寶永七八兩年、八文字屋板の多きに比すれば、正徳二三年は、むしろ板行はかゝしからず。あもふに板元と作者の間に、既に紛紜を生じたるや明なり。そもく其碩が八文字屋の爲に、『口三味線』を著はし、以來、一年正本屋へも『一挺鼓』を遣はしたる所、當時直に其の正本屋を断りて専ら八文字屋の著作に従事せし事情は、今得て窺ふべからざるも、此の時八文字屋と其碩との間に

は、或約束なくて叶はず。今より推測すれば、八文字屋は正本屋よりも高き報酬を拂ふとか、或は發賣高の歩合を入手せしむるとか、即ち板元と作者との間に、利益上の或約束ありしなるべし。されば自笑は、其積の作にて充分の利を收めながら、なほ其のれが名を世間へ揚げんどの野心ありしかば、もとより其積承諾の上にて、寶永七年頃より、作者八文字自笑の名を掲げしが、世間は是迄も八文字屋本の作者を知らんと待設けし矢先き、自笑の名を見て、はじめて其の奇才に感伏し、忽ちにして自笑の名廣まりしや疑ひなし。然るに其積は初より名を出さず、又承諾の上にて自笑に名を記せしめたる位なれば、今に至り名を好む心はなけれど、されど自家の勞力にて他人の名聲を高むるが如きは、特別の場合を除きては、快からざるは人情なるべし。されば『禁短氣』を出すに當り、自笑の名を署することに就て、多少の悶着を生ぜしならん。蓋し故障ありて其の出板の遅れたるは参考すべき點なり。而して『禁短氣』は、著者板元の待設けたるよりも、更に世の喝采を博せしかば、自笑の名はますます揚りぬ。此の時自笑に謙讓の意あらばよかりしに、計こに出でずして、虚名を以て唯世間を瞞着せしに止まらず、なほ朋友知己の前にて『禁短氣』は自作なりと吹聴しつらんを、其積は之れをきき、快々樂まざりしならん。蓋し争端は此の點なるべし。其積は自笑に掛合しも彼れ頭として應ぜず、乃ち作者争ひの端を開けり。就中『禁短氣』の作者争ひは後年まで絶えざりき、『自笑樂日記』にも、

愚者若かりしより、數多の戯言を著す事、十萬言に過ぎたり……樂日記を著して、筆を止むるに付て、時思ひ出し、

昔禁短氣を述べて板行し、其後佛原の狂言によせて、禁短氣の後編を書けりし云々、

と自ら名を署したる證を以て、旨く驚を鳥にいひ黒めしなり。其積は名を奪はれたる事に就てはなほ忍ぶべき情實ありしなるべし。思ふに當時發賣高の最も多かりしは、草子よりも評判なるべければ、其積は此の評判記にて、其の利と彼れの勢とを殺ぎ、かくて自家の骨折に報い聊か不平を慰めんと思ひしなるべし。依て其の子をして江島屋市郎左衛門の名を繼がしめ、新に本屋の店を出し、さて八文字屋へは評判記の相板を申込みしに、自笑又斷乎として之れを拒絶したるのみならず、自家板行の草子もしくは狂言本等にて、あしさまに江島屋を誹謗しければ、其積は最早是迄なりと、遂に八文字屋と分離し、正徳四年正月には、評判記『役者目利講』を突然と板行し、口上の文を以て、單刀直入、八文字屋が内幕に斬入たり。

東西くさて別けて御断を申すは、役者野判本は中頭出水通和泉屋八左衛門と申草子や板行いたし、年々古板に書加へて或は役者舞臺、又櫻楓等なまじり外題を替へて出し候處に、此役者目利講の作者其積と申すべきもの三ヶ津を三卷にわけ、ひさ切つゝの序をつけ、御断に上申又は白字の上など申位付を致して、役者目利講と題號をつけ、ふや町八文字屋八左衛門へ進し申せば早速板行にいたしぬ、それより毎年せがまれ、酬酌ながら年々仕り進し候處に、又二條通正本屋九兵衛がたよりも一年餘儀なく頼まれ、止む事を得ずして、役者一挺つづみと申を仕置候、然れども八文字やと、正本屋兩方かけ持に同十事なりがたく、正本屋がたは開水と申す好入へ頼み、八文字屋方は例年たえず仕置し候、五六年以來は評判の處ばかりは先格を以て、其年の狂言の當りを見て自分にもなるべき事と、評判の仕方を教へ、八左衛門に致させ、外題目録三ヶ津の序を仕置し候、然るに此作者其積、一所の江島屋市郎左衛門と申す新本屋と役者野判本は向後八文字屋と相板にいたされ、末々

迄入魂にせらるゝやうに、作者いろ／＼申せども、八文字屋一人していつまでも仕るべき由申きり、不同心にて却て江島屋方をさして似せ本、又はまきらはしき草紙など出し候と、八文字屋より断書出し候段作者身に仕候ては、心外の至りに存候、そも／＼八文字屋は京芝居の申草子屋は、何にて世間へ廣く名を發し候や、二條正本屋、同鶴屋は、古來より淨瑠璃本にて名を取、八文字屋は京芝居の歌舞妓本を板行仕候外、その名家名を御存知にても無之候、然る處此作者其積、松本治太夫方へ淨瑠璃を作り遣し、其辭り本を八文字屋へ遣し、板行させ候てより、年々の評判本は申におよばず、傾城色三味線、又は曲三味線、禁短氣、傳受紙子、色情あい離形、御伽會、我の類なきみの書、數年あまた遣し候處に、各々様の御意にりり八文字屋／＼はより浮世本、評判本の名取のやうに罷りなり候事、八文字屋の功にて候や、作者其積のにて候や、此段は、りながら世上の人さま御了簡可被下候、殊更作者の實名を出さず、作者八文字屋自突致させ候程の深切を、へりみす今にては八文字屋と、名を取候上なれば、たゞへ島の母と書て板行仕出しても、八文字屋と申名にて賢申との所存、高島盛て真弓のくるとやらにて、功を立遣し候作者の申分もちひす、作者一所の江島屋を削り、一人の功に可仕ぞんれん、是によつて當年より、江島屋方に役者、評判本、板行仕候以來は、毎年出し候間、御求可被下候、八文字屋方には今迄名をもち候作者の功を奪ひ、自分の功に仕度存念有之候へば、右之所世間へ披露いたす事氣の毒に存、おふき本、罷り看板等に、此方似せ本の或はまきらはしき本など、小書をして八文字屋より出し候、右之通少しにても違ひたる事を、かく長々數寄あらはし板行になるべきものに候や、まきらはしきと申小書仕る手間にて、眞實まきらはしきの似せ本の申は、たゞへば八文字屋八左衛門板など、仕出し候は、まきらはしきと申べく、あの方は八文字屋板、此方は江島屋板と仕候に、まきらはしきと申わけは無御座候、其儘その作者の仕りたる振にて、新作出し候、八文字屋とまきらはしきと申べけれ、近頃片腹いたいせんと、此方のは數年おなトみの作者、御佳例の評判本、新編の作の八文字屋評判と、御見まがへ不敬遊、御求御覽可被下候、扱京芝居の評判は、一座づゝ座づゝに仕候間御まんべんに御一覽奉願候、追付評判のは、まきら、まやうに御心得なされませう

正徳四年正月

江島屋市郎左衛門

滿を持したる其積が鬱憤の矢は放たれ、而かも一々標的の圖星に命中したり。之れに對する八文字屋の復讐はいかに。其積に出し抜かれて、八文字屋一時の狼狽大方ならず。『目利講』に後ること一ヶ月、同年二月に漸く『役者色景圖』を出し、『目利講』の露骨的口上を打消し、自家の地位を保たんとして、ヤツキと盡力したるは、實に一奇觀なり。『色景圖』京の巻に、「祇園牛頭天王御託宣」と題し、

(前時)毎毎年役者評判を書つて、八文字屋が板行する事、芝居の爲役者のほげみにもなること、いかほと神慮よる、はしき所に、當年午の年大評判とまるし、毛をふいて紙を求る目利講、古道具を買あつめるわけもない評判也、然るに年來八文字屋評判と沙汰する事、既に家の景圖なれば、當年の評判を役者色景圖と名づくべし。爰に目利講といへる評判本に、八文字屋が作を雜言したる慢心、いで／＼と替てまらすべし、先目利講の口上に、上申又は白字の上など、申位付をいたして、役者口三味線と題して、江島屋の新作者がつくりたり出たり、その口三味線よばり、八乳の猫の腹の皮などいふんぞや、白字の位は口三味線より八年後、役者友吟味より付じぞ、是八文字が他の作を借ざる證據なり(下略)

然れども八文字屋の辯駁は一も肯綮に中らず、唯些細の揚足を取て、僅に罵られたる怨を報ずるに外ならず。八文字が他の作を借ざる證據の如きは、實に薄弱にして、『目利講』の大打撃を打戻す力毫もなし。然れども『色景圖』はなほも飽き足らずや江戸の巻にて「評判の毒付」と題し、

一京都は四芝居にて名代をばしつ初太夫、座本光山七三郎座、正月廿五日が頭みせ仕候、他所より出し候目利講の評判には此座なく候

一京都名代はつ梅之丞、座本中村新五郎座は、二月四日が頭みせ仕候には目利講の評判に右の新五郎座をのせ申候は

すいりやうにて仕りたるものにて候間用ひ玉ふべからず
 一 手前を出し候評判は、萬の役味をきんみ任り調合に念を入れ、少しもそまつに仕らす候ゆへ毎年廿日附、おそなはり申候、
 左様に御心得御もごめ可被下候（當年は二間の顔見せ延引ゆへ存下の外おそなはり申候）
 右のみ汁酒にて毎食用ゆ

誠然『目利講』の此の粗漏を敷へ立たるは多少道理あるに似たれど、其の實あて推量の評判、また
 些細の間違は、ひとり『目利講』に限らざれば、これはた出版延引の口實に外ならず。又自笑が作
 者たる地位に對しての辨駁は、『伊勢風流』の序に、

後世にちすまよはるゝ此古入道、久しく通器の遺冊を讀みて、かれこれ書つちねけるに、世には物むつかしき人あり、それ
 も是も他の筆なかりて、我名を顯はすまへり、されば同慶相れたむならひとは侍れども、是又糸竹の道にもあらず、生兵
 法のほでんが、殿座者の手稱語、いけすのよれの客よははり、儒者の堅い自慢、世間法師の愛賢談議、いつれがそじりの
 種ならんはあらざりき、今いせ物語の六の巻、北の巻をたて、風をふせぎしつれんぐにまゝのひぬ。耻なりく、現圖の策、
 世に喧嘩の中買あらば、手は道なよけてあらそふ事をまめかれ、水で作りし鶴の時もつくらば、露爪の生るまいに幾久し
 く、筆さきにて御意得ればならぬで、こざりますと爾日

作者 八文字 自笑

これ又徒らに文を弄したるのみ。もし自笑にして、『禁短氣』を自作と強辯すれば、其積が没後『樂
 日記』に述ぶべき要やある、何ぞ此の時一言『禁短氣』に及ばざりしぞ。蓋し世間を欺くも、流石
 に作者其の人を欺き得ざりしならん。かくして其積自笑の争論は、正徳四年に端緒を開き、是れ

よふ年々絶えざ。同五年江島屋板の『役者返魂香』の口上にも、評判作者其積として斷りあり、

此反魂香の作者は去春も目利講に印候通、八文字屋八左衛門去る卯年（元祿十二年）口三味總と申評判記を綴り候てより年々
 八文字屋方へ遣じ、去る巳の年まで十五年が間任候作者にて候へ共、八文字屋身が成仕形在之候に付、去年の春より此江
 島やかたへ仕遣し候ゆへ、八文字屋方には去年より素人の新作者をやまひ、右年々の作者のふりを仕、世間の人様へがつけ
 申候、殊に去冬狂言本の口書にめつたる評判出し候まはいか成申分に候也、毎年御佳例の作者の評判は此反魂香と申本に
 て御座候間、外題御吟味なされ御求め可被下候、尤八文字屋方出版評判本其外風流本共に、まへの作者さかはり素人の新
 作に御座候、自今は江島や申本の方が御なすみの作者に紛れ無御座候間珍敷趣向共御よみくらへ被遊、御覽可被下候、
 総數申者存之候故御断申上候

江島屋方にては八文字屋の先を越さんと出版を急ぎ、八文字屋は新作者にてはかゝりしからず、
 兩方とも正月の評判記なるに拘らず、今年も亦八文字屋方にては一ヶ月も遅れて出でしと見え、
 直に右評判記の缺點を搜し、『役者懷世帯』は、

例年の評判に功成名遂けて争はぬ凡例
 一念を入れればならざるもの
 一 早過てうけとられぬもの
 一 益の廻りも役者評判
 一 競馬流儀馬扱は番船にひきこく他と争ひて早を賞状なりせば、評判本も霜月の中比にも出し御目にかけ候半なれども、す
 でに當年も大阪の芝居京の芝居をさひひかれ、漸く今日にまかりなり候
 一 京よし澤あやめ紋所、桐のまをさやうにいたしてあり（即ち『反魂香』京之役者女形極上吉よし澤あやめの紋所丸のう
 らに桐のまをさやうに印せざるを指せぬなり）

一大阪は五芝居なり、他所より出候は三芝居計評入れ、尤八重桐座と風三右衛門座不足
 一京葛城常世座いまだ顔みせ仕らず、まかれ共名代座本相極るうへは此懐世帯にはあらかた役者立を印し申候
 一大阪の座本藤森正松當顔みせより宗八と名を替しを、他所の評判に宗八といふ名みえず、是等の畧を御考下さるべく候、
 作者争ひは去り申又當年手前より申もおこなげなくやき、いづれも様のお手前を存じましひかへ申上候已上

作者 八文字自笑

此の外評判の句中他の草子にも互に争ひの文字はあれどみな省きつ。以上引きし例にて、其破目
 笑が争點は粗知るに至りつべし。要するに八文字屋方は始終受太刀の姿にて、其破が『目利講』の
 攻撃に應ずべき手強き辯駁は一も出でず。これ實に八文字屋が此の事件に就ては、重々の弱點あ
 りばなるべし。

今日に於て作者眞偽の争をしたらんには、忽ち其破の方へ人望の歸すべきは疑ひなければ、當時
 は既に久しく八文字自笑の名聞えて、却て江島屋其破の名はじめてなれば、實は八文字屋が作者
 の正統と認められ、江島屋はよし或一部の人には信用ありきとするも。到底俗受の讀者を動かす
 能はず、江島屋こそ驚を鳥にいひ黒めんとする似而非板元と疑はれけん、評判記、草子どもには
 かくしく賣れず。是等の事情は、正徳四年五年あたりの板には、單に江島屋市郎左衛門と記せ
 ど、六年より享保二三年頃の板には、評判記は正本屋、鶴屋、江島屋三軒相板となり、其破作の
 草子は江島屋、菊屋、谷村などより出版し、互にえらせを交換せり。これ併しながら江島屋なる
 新本屋が一本立の出来ぬにより、日常八文字屋の盛大を抑へんと思へる本屋ども、其破を助けて

相連合し、八文字屋に敵對せしものと知るべし。然れども八文字屋が一度收めたる信用は、彼等
 遂に奪ふ能はざりき。然れども八文字屋は、よし其の信用は落さざりきとするも、立作者の其破
 に脱せられ、他の本屋は虚に乗じて我れを陥れんとする有様なれば、久しく對峙の望なき勿論な
 りと、自笑早くも之れを觀破し遂に我を折て和を其破に申入れし所、即ち其破も困り、八文字
 屋も困り、こゝへ中裁入りて相方漸く和解するに至りしならん。評判記の上にて見れば、兩家確
 執の氣焔は次第に薄らきて、享保二三年には、其の痕跡を認めぬ迄に和さぬ。宜なる哉、享
 保四年には、兩家和睦を事實の上に徴するを得たり。同年正月板『役者金化粧』の序に、

女は己を悦ぶ者の爲に容り、おもはぬ者の相手にはたのんでもならぬものなり、傾城買のくせつも我おもふものならん
 はせぬ物ぞかし、愛を以て見た時は、きのふ迄譲りあふたも、互に心にいさむら、おなほ筆先を貸まいといさむし、今
 日もおひななしてみれば、夕霧が口舌にひさし、去春よりいひあふたきか、しい顔をつくりなをし、わつさり金化粧し
 て、いつ迄もはらぬ中の相板、すりあげた額に角の立ぬやうに、まん丸びたいの置盤の、渡中になつたは下地がきれぬ心の
 糸の、引あふた口、三味線の柏子につつて、三々津の役者辭評を弘め初てより、毎年定て御佳例を成て、世の人さまのおもて
 難しに預る此奈さをおもへば、そちもこちも木望のいたり、随分氣をつけて評判に念をいりや、五六年も譲りつけた口ゆへ
 か、ちと此座の評判にもいひたい所があるが、一不審もつてまいらふが、メテソリや春永に役者五重相傳の、二の替りの評
 判で聞もいたさふ、申もいたさふ、先爰は今までちぢふて、あらたまりぬる春のめでたき、中なりの手は下めなれば、
 互に機嫌よくにつこり笑ふて引幕く

于時めでたい年のうれしい春

作者 八文字 自笑 其破

此の評判の奥付には、

享保四年亥ノ正月吉日

八文字屋 八左衛門 相板

と記しぬ。右の序文は其積の筆なるべく、此の評判記は八文字屋方にて作りしものなるべし、されば其積はなほいひたき節はあれど、今度はいはずとなり、相板はもと其積が申込み、自笑は此の和睦に就て、充分地歩を譲りしこと明なり。江島其積の名が述作の上に記されしは此の時をばじめとせり。爾來其積の作には必ず名あり。八文字屋より出板の本には自笑と連名し、他の菊屋などより出したるものは單に其積と記せり。然れども享保以前の作には、其積の名あるは稀なり。其積自笑の確執は正徳四年に端を開き、享保四年に和解せり。正徳は六年にして改元ありしかば其の間實に六年なりき。

其二

八文字屋もの、變化
傳奇もの、氣質もの

八文字、江島兩家對立の間、相方より出板したる草子の主なるものを擧ぐれば、

八文字屋版	
『百姓盛衰記』	五册
『風流薩平家』	五册
『磯經風流經』	五册
兩家分離前の板行	
『百姓盛衰記』	五册
『風流薩平家』	五册
『磯經風流經』	五册

『分里難行脚』	五册	(正徳六年)
『傾城野群談』	五册	
『野傾咲分色存』	五册	(享保二年)
『野傾裝透油』	五册	
江島屋版		
『丹波太郎物語』	三册	
『野傾族葛籠』	五册	(正徳五年)
『世間子息氣賀』	五册	
『當世名代男』	五册	(正徳六年)
『世間娘形氣』	五册	
『國姓爺民朝太平記』	六册	(享保二年)
『役者不斷容氣』	六册	(享保三年)

三ヶ津永代評判

右は板行の一部分に止まるべしといふも、また其の一斑を窺ふに足るべし。蓋し『百姓盛衰記』『民朝太平記』、是等は傳奇ものといふべきか、即ち他家騒動、敵討、さては軍談等に胚胎したる草子なり。そも、傳奇もの、爰に一生面を開きしは、既に二十年來、世間は彼の輕浮なる傾城野郎の内幕話に聞き飽きをして、何か變りたる趣向の讀ものを要せし折柄、恰もよし、是より以前『通俗唐太宗軍鑑』(元祿の末)、『十二朝軍談』(正徳の頃)等、漢土軍書本の翻譯成り、一方に

は『武道三國志』(正徳二)の如き敵討もの、『義貞功記』(正徳五)の如き雜史類行はれ、又當時實際に生りし家騒動の事件を時代ものに敷衍すること行はれしかば、是等を母として、八文字屋ものに、傳奇ものを生みしなり、されど其の實は唯世間の流行に随ひしまでの趣向なりき。更に一機軸を出だしたりと稱すべきは、氣質ものは是れなり。『役者我身賣』の奥に、

一世間子息氣質

全部

五卷

付り 一度は出さるる海濱を色狂ひせやくもあつてきた身

右はりし趣向をあつめ本出し置申候御求め御覽被下候

とのひろめあり。これは其積が自笑と分離中、江島屋にて新案の作なり。かたぎの名は西鶴の『女容氣』にはじまりしならん。されば八文字屋ものかたぎものはこの『子息かたぎ』ぞはじめなる。これに次で『娘形氣』あり、谷村板に『遊女容氣』あり。此のかたぎもの、出しは、八文字屋もの、變化のみにあらず、作者其積が蕩樂の夢裡より脱して、漸く實際界に入りし作者身上の變轉といはざるべからず。此のかたぎもの、新案は、其積が如何しても八文字屋を壓倒せんと刻苦したる賜なり。『役者評判記』は、兩家對立の間、前に載せたる外、『役者職敵』、『同我身賣』二部ともに江島屋板、八文字屋板にもなほあるべし。さて評判記の變遷は、唯役者の位付繁多になりし外には、一種の褒美づけ、即ち「無頭」、「今風」、「當り男」、「功者」、「風替り」など簡單の語を以て、役者の特質をあらはしたるが此の頃の評判記に見ゆ。

下 自享保五年
至 寶曆、明和

其一 作家としての其積
畫工西川祐信

前章に述べたる如く、江島屋に於ては、八文字屋と競争の結果として、新規の工風のかたぎものを案出せり。然るに八文字屋に於ては、此の新趣向なきのみならず、當時の風潮につれて傳奇もの一二種の出版はありしも、『百姓盛衰記』は、むしろ其積が作に屬すべき年代の板なれば、他は概ね野郎傾城の内話、即ち好色本類似の趣向を脱せざりしかば、此の間に於て浮世草子の上に一異彩をも發せざりき。蓋し『役者目利講』の説によれば、當時新作者を頼みて、著作に従事せしめたりといへり。今日にては自笑は多少の文才ありて、著述もいくらかあるべしとの説もあり。尤も自笑は其積の教を受けて、役者評判記の筆をとりし人なれば、思ふに八文字屋の板の草子、此の間に自笑の作あらば一二部もあるべし。又新作者にも頼みしならんか、されどいづれにもせよ此の時の八文字屋板は、評判記、草子ともに拙劣にして見るに足らず、之れに反して江島屋板は、其積が一生懸命の作のみなれば、評判記の開口といひ、草子といひ、殊に傑出したるもの多し。さて其積は自笑と和解したる後も、江島屋なる本屋は依然として存立し、其の當座は八文字屋と相板せり。而して江島屋が全く本屋を止めしは、享保九年なるが如し。其の證は享保八年板『役者春空酒』まで、八文字屋江島屋の名を列記すれども、同九年『役者三友會』に至りて、江島屋と

相板の名目全く消え、其の後は江島屋の名を見ず。依て江島屋の銘打たる作は、正徳四年より、享保八年迄の板と知るべし。此の頃より役者評判記はますます行はれ、八文字屋の外、鶴屋、正本屋よりも出版し、其積が序文を附したるもあり。兎に角作者争は無功にあらざりしが如し。其積は新本屋を出し、経験なかりし爲に、其の本が賣れず、板元にて少からざる損乏を來したるに相違なきも、之れが爲に其積といふ奇才の作家、これ迄八文字屋ものうちに潜みしことを世間へ紹介したるは、即ち有形に負けて、無形には勝利を得たりといふべし。是より其積の名聲は高く揚りぬ。享保中頃よりは草子を出板する程の家は、争て其積が稿を求めき。其積は此の時に當り、最早八文字屋抱つけの作家にあらず。彼れは世間の作家として立ち、多くの板元をして其の門に伺候せしめたりき。是れ其積が全盛の時代なり。今享保の初年より其積没年に至る、主なる作を擧ぐれば、次の如し。

- 八文字屋
- 『傾城薩昭君』 五册 (享保四年)
 - 作者未詳
 - 『役者色仕組』 五册 (同五年)
 - 『女將門七人化粧』 五册
 - 『櫻管我女時宗』 五册 (同八年)
 - 『風流七小町』 五册

- 菊屋其他の板元
- 『出世攝虎昔物語』 五册 (同十一年)
 - 『本朝合稽山』 五册 (同十三年)
 - 『肥後曾我女黒船』 五册
 - 『善悪身持扇』 三册 (同十五年)
 - 『風流東大全』 五册 (同十六年)
 - 『奥州軍記』 五册
 - 商人家職訓』 五册 (年號未詳享保十六年迄)
 - 『義経倭軍談』 六册
 - 『花實義経記』 五册 (同十五年)
 - 『世間手代氣質』 五册
 - 『鬼一法眼虎の巻』 七册 (同十八年)
 - 『商人軍配團』 五册
 - 『波世身持談義』 五册 (同廿年)
 - 『咲分五人地』 五册
 - 『武道近江八景』 五册 (同廿一年)
 - 享保二十一年元文改元
 - 『御伽名代紙衣』 六册 (元文三年)
 - 『其積置土産』 五册

『磯太平記』	五册	(同十七年)
『桶軍法鑑』	五册	
『傾城歌三味線』	五册	
『那智御山手管絃』	五册	(同十八年)
『傾城友三味線』	五册	(同十九年)
『梅若丸一代記』	五册	(同二十年)
『風流四海現』	五册	
『風流連理燈』	五册	
『風流軍配團』	五册	
『浮世親仁氣質』	五册	(同廿一年)
『高砂大島臺』	五册	(元文二年)
『兼好一代記』	五册	
元文六年寛保に改元		
『其磧諸國物語』	五册	(寛保四年)
『傾城情の手枕』	五册	

右のうち其の八分通りは京都寺町通松原上町東側御屋七郎兵衛開板にして、御屋は八文字屋に次ぐ草子の板元なり。

右書目ば八文字屋には、其磧の作ならぬも混じ居るべく、又年號に多少の前後あるかも計られず。

これを總ぶるに、享保以後の作は、好色本退々跡を絶らて、傳奇もの次第に榮えしを見るべし。而して其磧が此の間の多作、前年の比にあらず、但し享保以後の作には、『諸國物語』其の他三四部を除きては、實に千篇一律、是れ又寶永正徳の趣向に一々變化ありしとの比にあらず。要するに前は主に創作に屬し、後は専ら翻案にかかれはなり。又本の形よりいへば、八文字屋もの、早き所は概ね枕本にして、享保の末、殊に菊屋板は普通の美濃板なり。故に其磧は前半期に名編多く、また枕本に佳作多し。

こゝに一言加へたきは番師西川祐信が事なり。『浮世畫類考』に「八文字屋本にて祐信が初心の頃畫きぬと見ゆるもの多し、畫名は記さしれども此の人と見ゆ」と記せり。祐信は師宣以來浮世繪の名家にして、其磧、自笑と時代は同うせり。其の畫本は菊屋喜兵衛板最も多く、其のうち『繪本答話鑑』『同噺卿』『女風俗玉鑑』などは、其磧が小書したるものといふ。八文字屋よりも『西川ひな形』『百人女郎品定』其外風俗畫を多く出版せり。今西川が畫風より察するに、八文字屋板は、評判記、浮世草子ともに、元祿より享保の末まで、過半祐信風の筆意に似たり。菊屋板の其磧作も西川畫風なり。八文字屋、江島屋、菊屋を通じて、其磧作は大概西川派が畫きしものと思はる、而して評判記、浮世草子、西川が筆になりしもの百を以て數ふべし。八文字屋もの、速に世間へ廣まりしは、其磧といふ才筆の外に、祐信が艶麗なる畫風與て力あり。希代の二名家を得て、板元の利と名とを兩全からしめたる自笑は僥倖の人とやいはん。

其二 其積置土産

其積は享保を盛時として終に他界の客とはなりぬ。今其の事蹟を傳ふるものなし。たゞ元文三年菊屋より出し『其積置土産』にて、其の消息を得たり。同書の序に

風はつちなふして松にひびく、いにし三萬騎の遺札を味はふて其積生涯中述作する所の假名草子世にはびこりぬ、堅固なるよりの七十年はたつこのさしのみな月比に此世をさりぬ、書殘せし反古のうちより一書を得たり、書林何某自出度春の一興にもせんご名にまかせて其積置土産と名付るものなりし

洛東愚子 其 跡

とあり。其跡は即ち其積が子息にして、江島屋市郎左衛門の名を継ぎ、新本屋の主人となりし人なるべし。按ずるに辰の年は元文元年に當れば、同年六月に七十歳を一期として身まかりきと覺ゆ。されば其積が名ある作にて元文以後のものは、享保中に述作したるを、本屋にて彼是れ遅れて世に出ししものならん。かゝる例は前にもあり、『傾城歌三味線』は享保八年に追付板行のまらせありながら、實際は同十七年、此の間九年の有餘あり。併し『傾城情の手枕』は寛保四年、其積没後九年目に於て、板元もむしろ縁故薄き、江戸書坊升屋、信濃屋、京書林川勝等なり。眞偽のせんさく今は要なければ止むべし。

其積が述作百に上るといへども、其の事蹟傳はらず、天明の頃其甥翁が『翁草』に其の一斑を記し、且其の文にも論及したる節あり。

(前略)又中頃此(淨る)文句の作者に近松門左衛門といふもの出て、彼の文勢は人を寒かしむる言葉多し、譬は蝶の翼の

白粉を草にこぼして梢には蝶の霜毛を脱掛る等、是等は老杜が對句を厭すべし、又八文字屋自笑が浮世双紙の編者に、江島其積といへる有り、よく世の情をのぶ、筆勢をさく、近松に並ぶ所曲、三味線、色三味線、契情榮短氣はたもろくの容、氣類などは、今の世の人をも驚かす、されども淨瑠璃を書く亦は成らず、近松は又双紙を作るを得ず、其差別をいかにいふに、其積が作文にては、人形の動き、近松草紙を綴れば、文勢過ぎて人情くは、しからず、己が得たる所古今以同と、實にや近松と其積とは、ちのづから其の才異なれり。蓋し近松が戯曲作者となり、其積が小説家となる、皆これ天稟とやいはん。『翁草』の如きは、しめて其積が知己と稱すべし。

其三 八文字屋の衰運 作者多田南嶺

其積に代り、八文字屋の作者となりしは、多田南嶺なりき。南嶺は國學者にして坪井鶴翁が門人なり。典故に通じ又俳諧を半時庵談々に學び、男婦と號す。後ち南嶺と改め又桂秋齋とも號しけり。南嶺は別に一家をなす人なれば、其が詳しき事は他日に譲り、爰には唯八文字屋に關係の大略を述ぶるに過ぎず。性質不羈豪放、所謂學者風にあらずして、好んで戯作に従事しぬ。其の作は朋友知己の間に起りし事、又其の人物を譏りたるもありしかば、兎角學者間には今に外道の如く目せらるゝといへども、而かも其の奇才たることに異論なし。當時南嶺は自ら名を掲げざれども、左の書目のうち幾部かは南嶺が作るべし。

『武遊双紙』

(元文四年、作者自笑)

『善光倭丹前』

(同 六年、荷自笑其笑)

『女非人殺録』

(寛保二年、作者自笑其笑)

『鎌倉袖日記』

(同 三年、同)

『今昔出世扇』

(延享二年、同)

『自笑樂日記』

(同 四年、同)

『花楓御本地』

(寛延二年、同 其笑瑞笑)

『道成寺校柳』

(同 四年、同)

就中『武遊双巴』『袖日記』等は南嶺作として今世に知らる。又南嶺は草子のみならず、評判記にも指を染めきと見え、『翁草』に「近時南嶺が書きし役者大全、或は耳塵集など」とあり。すなはち『役者大全』(寛延三年)は三ヶ津役者の總評にして凡そ十年に一度づゝ改むる仕組の永代評判記の一種なり。又『耳塵集』(同年)は俳家七部書の一部にして、昔し道外形の名人と聞えたる金子吉三郎が云殘せし言葉を集めしもの。其甥翁の説の如く、かゝる果敢なき編輯に預りぬとすれば、南嶺が手に成りし評判記も幾部かあるべし。八文字屋の内幕には、いつも有力の作家潜伏し、表面には自笑、其笑、瑞笑の徒、責めに當れり、彼等は畢竟作者の署名人とも謂つべき也。

自笑は『樂日記』を名残りとして此世を去りぬ。其の跋に、此の『自笑樂日記』が筆をさめなる由を述べ、其笑は子なり、瑞笑は孫なりと二人の相續者を紹介して、其の終りに

霜枯はさもあれ龜の長齡草

八文字 自

笑

と記せり。齡は「九十歳に近き長壽」と其の序文に見えたり。此の『樂日記』には延享四年とあれど

も『曲亭漫筆』には、自笑は延享二年十一月没し、年八十餘、京二條寺町本覺寺に墓ありと記せり。蓋し『樂日記』は板行の年月を記せしものなるべく、馬琴は親しく其の家に就て聞きし所なれば、確實なるべし。

其蹟が稀有の文才を一生我物顔に操りて、九十にちかき高齡を有ちし僥倖の老翁も天命には打勝たれず、八文字屋も最早末運に近きけり。

かくて自笑身まかりし後五年、南嶺もまた五十三歳にして、寛延三年九月十二日没しぬ。『世間母親容質』は、其の遺作なり。南嶺が没後二年、寶曆二年板行せられき。八文字屋の主髓たる其蹟、自笑去り、又南嶺之れに續きては、其笑、瑞笑、白露幾人ありとも、唯作者の名を汚すのみ。『翁艸』に云ふ、

(前巻)南嶺は其蹟を除く計に作意巧なれ共、其情陋うして、其蹟が上に立ん事なれし、それより下つた、譬て云ふべき作者なし、今世にちらばふよしなし事を見れば、つゝまへ所もなき莊子のうへ行、うその出来損ひにて、筆しぶり文章なまりて評すべき類にあらず

と、其甥翁暗に白露等の凡庸を嘲りしなり。當時の作者は其の器にあらず、徒らに古人の糟粕を嘗めて、唯一時の出板に間に合せたるに過ぎず。されども、流石に五六十年の老舗、殊に役者評判記、芝居道の書物などは、別に天才を要する次第もなければ、老練と経験とにて家名と信用とを保ちしは、まことに先祖の餘徳、所謂精力の作用なり。寶曆に至りては、其笑は自笑と改め、

其の他八文字屋の作者に、自碩、李秀、素玉、かんろなどいへる名あれども、未だ彼等の何人なるかを詳にせず。なほ八文字屋は明和安永の頃まで續きけれども、此の頃は眞に名あつて實なし。小川顯道が『塵塚談』に

京都八文字屋浮世双紙五冊、役者評判記の事自笑其破といふ者述作して毎年正月二日定式にて大傳馬町鱗形屋孫兵衛といふ繪草紙問屋賣出せり、五冊ものにて名文も多し、評判記は京大坂江戸芝居歌舞伎役者の顔見せ狂言の善悪の評判なり、顔見せ狂言十一月朔日よりしむれど三日の内は式のみにして狂言は省略す、やうく五六日頃より取る(？)狂言なるを評判を記し梓行し正月にて江戸にて賣出む、誠に速なること驚入たる仕業なり、延享寛延のころは兩書とも皆人待兼ねる事にてありしが、五冊物は寶曆の末より絶て梓行なし、評判記は京都にて作りて今以て出れども正月二日より出す、租過ぎて江戸へ来るなり其故に折ふし江戸にて役者ばかりの評判をこしらへ梓行しけれども江戸作は人々まらに賞読せず

と見えたり。馬琴は享和二年の夏漫遊の序に親しく八文字屋に就き、其蹟、自笑が傳を尋ねけれども詳ならず。當時の主人は四代目にして、近頃京を去りて大坂安堂寺町に移り住みきとぞ。さし久しき櫻木の名所も、こゝに絶えて今は名のみぞ香しく残りける。

因に記す『曲亭漫筆』に、最初其蹟自笑名を争ひ和隨したる後、再び争論して絶交したるやに記し、又南嶽は其の絶交の時、自笑に頼まれて草子を作りし如く記せど、其蹟、自笑の争ひは一度にして、南嶽は其蹟没後の作者なり。漫筆の記するところは前事實を混同したるに似たり。

これを要するに、八文字屋ものは、上は西鶴を受けて、元禄十二年よりはじまり、寶永、享保、寶曆を通じて、凡七十年間、下は文化、文政度の中間を繋ぐべき、文學史上、長き小説の連鎖なり。

教訓もの及び怪談もの、作者

『好色一代男』出で、草子はこゝに一變し、戯作は過半好色もの、の押領するところとなりて、寛文に榮えたる教訓ものは其の領分を縮少せられたるは事實なれども、なほ一方に割據して其の餘威を輝かしけり。西鶴の如きも好色もの、の作者なる外には、當時有数の教訓もの、の作者にて、其の著また少からず、すなはち『本朝二十不孝』、『武道傳來記』、『日本永代藏』、『胸算用』の如きこれなり。これと共に寛文の假名草子中より脈を傳へて、好色ものに對峙して勢力を逞ふしたるは、彼の了意が『伽婢子』の種類なる怪談ものにして、元禄寶永の間其の作者頗る多し。今これらに屬する主な人々を列擧すれば、教訓ものには、北條團水、月尋堂あり。怪談ものには林文會堂、青木鷲水あり。降て享保、明和に至りては、これに類する戯作枚擧に遑あらず、彼の『古今奇談英草子』(寛延二年板)其の後編なる『繁夜話』(明和三年)さては『兩月物語』の如き、みな伽はなし、百物語の系統を承けて、江戸時代に稗史の一要素とはなりぬ。近路行者の津賀六藏、和澤太郎の上田秋成も、小説家としては實に此の怪談もの、の作者に屬す。

北條團水

團水は難波俳林の一人にして、はじめ椎本才磨が門人なり。白眼居士と號す。生涯清貧を樂んで

阮籍が操を守りきこいふ。(『俳家奇人談』)

『西鶴名残之友』に序していふ。

洛陽を去て七年、瀛海西鶴の草庵を守る云々

團水は後ち西鶴の弟子となり、其の歿するや、自ら西鶴庵の跡を継ぎ、俳諧點者として、其の舊庵を守りしこと實に七年に及び、此の時京都に歸りしと覺ゆ。團水は俳諧師として立ち、戯作はもとより餘業なれども、文名は當時に聞え、月尋堂等とならび教訓もの、作者なり。

戯號を風城團水といひ、又滑稽堂の主人、團粹然和南などを用ふ。正徳元年正月四日歿しぬ、享年實に四十九。

團水の作は、

- 『日本新永代蔵』 六册 (正徳三年版)
- 『本朝智恵燈』 五册 (同年版)
- 『おとこだて』 五册
- 『一夜船』 五册
- 『正月揃』 六册
- 『武道一覽』 八册
- 『獨站線論』 二册

一名『武道強合大鑑』ともいふ

等は、板行の年月未詳、隨筆牀の戯作にして、寛文頃の戯作に一進歩をも與へず、殊に其の得意とする所の博識は、これ又自ら古今和漢の書に涉りて得たる知識にはあらず、全く前の元隣、了意等が唾液を舐めたるに外ならず。或は儒釋道に辿り、或は諸史百家に出入して、全文殆ど古人の秀句、然らざれば古事の點綴、其の書目を列擧するや、作者はさながら一個の雜書架の如し。此の瑕疵の少きは『新永代蔵』にして、團水作中の名作なり。然れどもこれを西鶴が作に比するに、團水の筆は暢びず、たゞ事實を記するに止まりて趣味に乏し。

月 尋 堂

月尋堂は未だ其の何人の號なるかを詳にせず。寶永、正徳の間三四部の浮世草子に、其の名あるを見て、此の作者あることを知る。今世に傳はれるは

- 『今様二十四孝』 六册 (寶永六年版)
- 『兄弟善惡車』 六册 (同年版)
- 『子孫大黒柱』 六册 (未詳)
- 『武道眞砂實記』 五册 (明和九年版)
- 『世間用心記』 五册 (明和十年版)

等あり、其の標題を一見したる所にて、教訓もの、作者なることを知るべし。後の二部に明和

の年號あるは、再版もしくは、作者存命の節は、餘り流行せざりしが故、版木を其の儘藏して、後に年號のみを改め版行したるものなるべし。

月尋堂は北京散人、また篆書にて看花齋と讀まるべき別號あり。又『用心記』の序には「定延狂書」、「廉長」の押印あれども、未だ其の通稱を考へず。其の作は多く京都の書肆より出版せられ、北京散人と號するに依て考ふるに、或は洛北の某所に住へりし人なるべし。畫家などの例によれば、號の頭字に月の字を有するは多くは桑門の人に屬す。そもく月尋堂は俗なるか、僧なるか、看花といひ、月尋といふ、いかさま世塵を避けて風流を望むの意ならんが、さるにても看花齋とは餘りに通俗過ぎたる號といふべし。思ふに其の頃さる寺の住持などの、世を忍ぶ戯れの名にや。よし歴々なる僧籍に在る人ならずとも、たしかに長明、兼好が人行を慕ふの世捨人、彼れは松雲子丁意の徒ならねば、恐らくは西鶴が流れを汲むの隠士なるべし。

駒の情は春くれば風にいはい、物は秋におんよくををこすといへり、まして人の心の美風麗姿になづむ事、かしこい人はただけのはまりあり、虚は虚のますこし、半梓もさらなり、さく土農工商坊主も神祇も色にあふてはらつちもなふ身を棒にふる事、まがる人もまがる人も、まんでいにおわてははらす、世のあらましいふにわたるに此うまさ事、外に似たたのしみもあらず、すつる命をちりとも思はず、のがる、世の露、草に起、木かげに寝て、月にむかしのまのぶ夜をこちあつてすぎたるはこゝろすにくせつのはらみ句、樂なる身は今のすみぞめ、またる者なしまがる人もたす、法師は木のまたからむまれたやうに、色ごとつうせぬさおもおひしや、われら今までのあくしやう、申さばくらびるもちびなん、春ばうつばりに充らん、まふて見たあさは空々、下やくは金銀、是なふてするはあほうのうはもり、あつてせめつばにはげ

なや、かいたきの木もくぞうまぞうにもむかはず、うき世は是の思ひ出に、つえのさくびにけし油取にきせるをわすれず、朝日見ぬ内の一ふく、けふりな物すきにふきなし、くれちかき野鳥のれぐら、ひざりはれまどあらそふ聲も鳥もまやらくまやま、やれわらんとにきびす小石にあたるも、するまならに、道いそぐすがた、給にいたやうにあるを、『今様二十四孝』

これ髣髴たる作者の儚ならずや、我れとても其の以前は随分と遊興も盡し、悪性も働きし身の果、其れを一々書き綴らんか、巻は積みて牛に汗し棟にも充ちなん、過ぎし昔しを想ひやれば、何に譬へんあさびらけ、漕ぎゆく舟のあとの白波、悟て見れば空々寂々、嗚呼我れながら愚なりき、と覺めたるに似て覺めやらす、感慨無量、慙愧心に充ちて汪溢此の二三篇をなしたるか。あはれ作者は如何なる人の末路ぞや。

『今様二十四孝』

『兄弟善悪車』は未讀の書なれども、他の四部のうち、月尋堂の名作は『今様二十四孝』なるべし。二十四條の孝子の話し、當時の世話を、一部に收めたる作なり。勿論續きものにあらざれど、短き物語の好模範として見るべく、文は俗文なれども、其積ほど野卑に流れず、むしろや、平易なる西鶴の文なるが如し。今其の中の一篇「布施にひく三味線」を約して、聊か作者を知るの媒介とせん、一人の世捨人、夕まぐれた、こぬか雨に袖かさしつゝ行けば、

次第にほろつきて、此頃もよほせし空のけはひ、是は本雨になりけるよき、たすむ野の露門、まほらしうは見えながら、荒たるかへにまびねいづらのわがまにはびり、おそくちる銀杏の黄葉、秋のなればなだまりがほなるもよしなく、す

いきに秋に菊もま下りて、なぐれあり早咲ありて、それよこれよと、わが庭の草むらなしわけ、ぬしがましき女、半ひらきの花ぶき、一えだ二えだ手折て、内へ入さまに見つけて、旅のほんさまいわぬ雨もふるなり、おやご申すもおかしけれ、お茶ひとつままれ、いふこそ世のなまけ、うれしく内へ入ば、そごから見しよりはなほ物わびしく、宿のある下さいせんの子を見えて、二十ばかりの座頭、三味線の糸ついでたりしが、御出家さまはへくさぐり出で、挨拶する内に、お役何やら、くめんに行るゝていを見るより、是申し、すこしもお心づかいむやく、今のさまたくもいたしたれば明日の朝までは、物たへ申すふくあいにあらす、われを招き入れられしは、定めてお志の台夜にてかなあるべし、亡者の戒名を仰せられ、御まご申すべしと申せば、座頭成程母人招下申されしは、御出家に頼みあぐる事の、あつてのゆへなりまがし未来の供養にあらず、御苦勞ながら現世祈禱の爲に、投落だらにの親音經を、御讀み下さるべし、このぞみけるゆへ、不審ながらだにほんを讀經申せば、座頭はうしろにたてたる琵琶をさつて、平家をこそ弾下ける、互にいさなみはれば、入つ手の業に番夢のれり餅、妻木の折寄をそへて、はづかしきもてなしと、涙にまじやくして、母人もりかへけるこそ、わひしなむらの風流、むかしゆかしく扱もあはれなり、其後おふせを引申すべき事なれど、御覽の通りの零落てあくべきものもなし、されども御經の御ふせ申さぬ事、罪深しさらばお布施に押者、今やうの三味線を引ておき申さんて、さいせん糸つきたる唐桑の三味線、ほそほのね下めゆたかに、みずをあげせむかし聞にしこの島、まなざやむまい世にあるならひ、なげふしな歌、はて本手間にあるあり、あはれあつて、まやこの小野川、あづまの淺利、愛にうつの姿、天人も雲のはしよりのぞるべく、おもしるふ感下て後、

旅僧は不審をたて、仔細を尋ぬるに、母子涙にくれ、もとは備前長田家の士にて小島浪右衛門といひしもの、故あつて浪人し、兄なる子が眼を煩ひしをふびんがりて、浪右衛門は娘を傾城に賣り、其の代にて兄が眼の療治をさせ、後に聞きし兄の悲み、さて又妹はつえをいへるは、脚に

て深く男どかたらひ、亡命して行衛まれば爲りしが、亡人は所の守護に訴へ、はつえの飯り來んまで過怠として、父浪右衛門を、三年このかたの牢しや、さるにても二人持ち玉ひし子供に、是ほどまで苦勞なざる事、又世にあるまじ、これも畢竟我れ故と兄の座頭は、かねて習ひし琵琶を弾じ、平家を語りて神佛に祈ること三七日、今宵願の満づる日に、幸ひ旅僧の雨やどり、うれしく招き入れて御經を願ひしとの長物語、旅僧小膝を打ちて、

さてくさあるよな、我はづかしながら、其はつえさちなみ深く、いひはせし唐琴爪之巫、……心なあげせ、命にかけぬすみ出し、東國へ一たびは赴きしに、世になさげなきは去年の霜月、はつえは木枯しのあした、風の心地といひし、つひに其月の廿七日にむなく成ぬ、此時のかなしさつらさ、さきに消えなん命と覺悟きはめけれど、一たびながれにまづみし女のつみ、未來も誰かはさふべきと、惜からぬ命ながらへ、かく姿を曇染になせし秋は涙の川、身も流すべくぞなげきける、

これより爪之丞上に訴へ出て、浪右衛門が苦役に代らんといふ、然るにおのゝが孝心、天も納受まし／＼けん、亡人が心も何時しか和ぎ、浪右衛門をば家に飯らしめぬ、此の上は夫婦もる共に剃髪して、四人ひとしく行ひすまし

これもそればかりの宿、夢さき川の松かげによるき庵は今も残りぬ
と筆をどいひ、一編義理を主眼とす。

『今様二十四孝』は、浮世草子中、稀に見る所の名作にして、これを西鶴が『五人女』に比するに、悲哀を寫す點は同じけれど、運筆彩色に至り、二者はものゝ特異の畫なり。彼れは艶美春の景

色の濃なるが如く、これは冴えたる月の歴はしきが如し。

林文會堂

名は義端、字九成、通稱を九兵衛と稱す。京都の人にして家世々書肆を業とす。伊藤仁齋の門人にして、復古學派の一人なり。扁して文會堂と號す、此の堂の記は仁齋の子東涯の作る所なり。戯作は専ら淺井了意が『伽婢子』を模倣して二三部これに類する作あり。もとより本領とする所にあらず。書肆としても儒者としても、戯作は此の人に取りて些々たる餘業に過ぎず。『玉簪子』の序に云ふ、

僕竟日文會堂に座し、こぼくの書編を左右にし、まばく披閱していさゝか聖賢道統の藩籬をうかがはんとするに、やいもすれば巻を終らすして眠をおもふ、凡情のたしむる俗習、いまだのぞきざるにや、たゞ怪しく新なる雑話小説を聞およびては、心によるこび筆にしるして倦きを知らず、ひゞり書編に求るのみにあらず、凡當時博識好事の人々、此堂に通れるには、先その郷里を問、その所に聞えし奇事をたづねて来るしとせむ、かく書編に搜り人々に使へて草稿せしを、先年友人のもよめに應じ、筆寫して玉簪子七卷をあらはし、了意翁張子の續集になぞらへり、今年猶またその遺るを集め、いまだ皮まらぬ田舎人の慰めにもせよとす、むるに、例の井邊にたへすしてまた玉簪子六卷をいだしぬ云々

文會堂の戯作は左の如し。

『玉簪子』 七冊 六冊

(或は『玉簪子』七冊と同本歟)
(寶永三年版)

『當世智恵燈』 六冊

(正徳二年版)

『近代御伽百物語』 (?)

(?)

『武家堪忍記』 八冊

(?)

『智恵鏡』は、林喜兵衛二千風といふもの六十六部となり、諸國行脚の路次、東國に巡りける折しも、ある日の夢に源三位頼政を見て、古今の成敗、善惡の去就を論ずるに筆を起し、右二千風が四國中に出會したる奇事異聞を輯めたるものなり、此の作には往悔子の名ありて、文會堂の押印あり往悔子は九成が戯號なるべし。

林九成が歿年を詳にせず、或は元祿の末といふ、但し戯作はおもに寶永以後の版なるが多し。

青木鷺水

青木鷺水は京都の人、俳諧師野口立甫が門人にして、また俳諧に名あり。名は五省、通稱は次右衛門、白梅園と號し、また歌仙堂ともいふ。享保十八年七十六歳にして歿す。戯作者としては、淺井了意が系統を承けて、伽婢子、教訓もの作者なり。

『御伽百物語』 六冊

(寶永三年版)

『近代因果物語』 六冊

(同四年版)

右二編に續編六卷を合せ、都合十八卷を全部とするの計畫ありし由、但し續編は版行になりしや

否やを詳にせず。

『本朝新編』

七冊

(寶永五年版)

了意が『世忍記』に倣ひし作なれど、了意のは多く和漢の古事より其の材を取り、露水のは當世の話しを輯む。此の外に、

『丹前野男』

『芭蕉翁諸國物語』

『風流吉日鏡會我』

六冊

八冊

(年月未詳)

あり。戯作ならざる著述數部あり。戯作の文はよく事を叙したるまでにして、波瀾もなく全趣に趣味を缺けり。

上田秋成

第一章 秋成の生涯

ハムレットを繙きしものは、かのオフィリア姫の、忽然詩中に顯れ來たり、又忽然詩中の幻を絶つ様を見しなるべし。彼れの詩中に來たるや、さながら羽衣の雲間より舞ひ下りたる如く、彼れの詩中を去るは、小磯による池の浪うつまに、くうせ去りたる如し。忽にして詩中に現じ、忽にして

詩中を去るものはオフィリア姫なり、忽にして現世に來たり、忽にして現世を去るものは秋成なり。秋成の現世に來たるや、又實にオフィリア姫の詩中に來たるが如きか。彼れ父なくして來たり、財なく、子なく、家なくして逝きぬ、詩的に出で、詩的に去るものは秋成なり。秋成は現世に處して事を爲し、人物の如くあらで、月の隈なき夕べ、獨り前裁に出づれば我が後に隨ふ影法師の如し。蓋し秋成自ら「無父不知其故」と云へば、あだし人いかに之れを窺ひ得べき。彼れ京師に生まれしか、浪華に生まれたりしか。これを京師の人なりと見たるは「假名世説」「小説史稿」の作者、及び「辨物語」の評註家、小林歌城辨物語の序に「又云此作者京人なれば其土に生まれたるものとせり」、撰者曰く、これより福門笑子「言狂作書」を引き、上田秋成が彼の崇禎寺馬場の敵討に因める生田傳八郎忘れがたみなる由を論ぜられしが、其の説や、俗傳に近ければ省けり。「花洛名勝圖會」には彼れ自ら記せるものありて、曰はく、秋成年老い南禪寺に寓するや、當寺先々の住僧玄門和尚といたつて親しく交遊せり。一日其の死期の遠きにあらざるを知り、自ら土もて己が像を作る、今猶其の中に遺骨を納むといふ。即像の管書付に自筆にてあらましの傳を記せり、

無勝生浪華客于京師二十六年。無父不知其故。四歲母亦捨。有倅上田氏所養。性多病時。發瘧。後世依戀。愛成長。年三十七交遊。三十八係回。歸失居。始於赴京。攝之間移宅。凡十餘度。每地在。神如。迎似逐。生活。商戶破產。一爲醫。患疾。不立。樂泊然二十年。其間玩好。國文。國詩。不以爲樂。年五十七頓失。左明。六十五健。伴過。神醫。得。左明。又及。右眼。後母給。

仕^{スル} 五十三年七葉續三十八年今年七十伍。嗟乎天爲何生我耶
老われば世の人致うには江のあしがるわざの男なりしな

吾人秋成の傳記を探らんと欲して、未だ其の信據すべきものを得ず、されば彼れが生活の大略を此の雜文に徴して知らんとす、諸書の傳ふる所又誠に此文を根據とせるが如き感あればなり。

第二章 前期の生涯

秋成姓は上田、通稱東作、餘齋と號す、又別に休西、無鴈、鶉居、前枝崎人、和氏譯太郎、等の名あり。享保十七年に生まる、四歳にして母を失ひ、上田氏に養はる、六歳にして養母亦逝く、遂に後母の手に成長しき。幼より書を好み、稍長するに及びて學衆に抜く。嘗て云へらく、男見生を此世に受く、宜しく奇功を立て、國恩に報ずべし、徒に紅を剪り、紫を裁して、譽を一世に街ふが如きは、丈夫兒の屑とせざる所なりと。花洛名物園繪 出石野記等 其の身汚賤に居るを恥ぢ、家什を鬻ぎて千金を得、悉く書籍に換へ、小屋を某街に借り、醫を以て業と爲す。然れども性拗戻寡合、俗に容れられず、此を以て其の技售れず。古學小傳 近世雜記 遂に病を以て醫を廢す。花洛名物園繪 勝國繪 秋成の傳記を得んとするもの、唯漢として雲を捉ふるが如き感あり。彼れ漢學を何れの人に受けしか。和文はた誰に學びしか。其醫を業とせしは浪華の地にあらで京師なりしか。歌城は

上田餘齋秋成京師に住居して醫を以て業とす然れども放蕩不羈にして行狀狂人の如く赤貧なれどもこれを意とせず直瀨に従ひて國學を以て任とす

と云へど、秋成は眞淵に従ひて國學を得しものにあらず。彼れ「阿刈腹」に於て自ら云へることあり、曰はく

假字問答は往年美樹子に過し時借し與へられしを寫職したるなり其間の理は魚彦の古言材の發端に美樹のいはれし言を見そなはしての事なりと談せられき更に他人の僞作にあらず美樹がたけなくも御名を犯すべからず秋成又師名を僞はらず下

これを以て見れば秋成の師は、藤原美樹加藤字 万伎なりしこと明なり。歌城由兵衛と稱し四不出齋と號す藤下 動む幼より學を好み初め長野美波留に從て和學を學び後に本居實長に就きて古學をば其の時代客と相同じく、宣長に同ひ又傍ら漢學を修む幕府の季暮人の古學を以て聞えしものは此人を以て御楚とすは其の時代客と相同じく、宣長に従ひ、且熱心に「癖物語」を評せるより見れば、多少秋成を知らざるべからざるに、其の言の他と矛盾せるは世人多くは秋成を度外視して顧ざりしによるべし。又自ら際通して世を避けたれば、其の經歷は生存中と雖も、既に明ならずしならん、况んや今日に於てをや。

藤原美樹浪華に上りしをり

こは何れの年なりけむ美樹通稱大助家の名を靜邊屋といふ幕府の大番の騎士なり高二百俵淺草三筋町に住けり眞淵に學びあまたの著述ありけれど多くは家に秘して外に出さず又和歌も堪能のきこゑあり毎に京攝に勤番せられしをり門に入り教を受くるもの少からず上田秋成など高足とす寶永九年(秋成の生前廿年ほど)浪華に勤番に赴かれけるとき岐嶺日記あり又東海道を登られし時の日記もあり明和五年(恐らく此時秋成其門に入りしものなるか、これ兩月成る年にして三十六歳の時なり)復浪華へ在番のおり金の黄金そくばくを盜める者ありければ其縁坐にて美樹も公庭にめされしがいく程もなく其盜人出で、罪許されき又安永六年京へ赴れけるが此年六月十日ふさ病に臥して二條の小屋にて身没られぬ三條三寶寺に葬る法號了庵院眞淵眞徹居士碑は木曾路龜甲原にありさいふ美樹が母乃自も懸門にて聞えたる歌よみなり

秋成其の門に入り、和文また和歌をよくす。學成り別かれし時、美樹香を送れり以上古

秋もやいふけゆくものから猶土さへ裂けぬべき器を如何ものし給ふらんさうしめたりしを御せうそくを得ておちぬ侍

りのひさ日まう登りしうし何くれさあるし給ひしぞ奈けなきまことに出たちもいさちがづきの今更別れまいらする悲しき
思へばなにしににに世の事には馴れむつれけんさやみになん古郷に至らん後も御文もて御問ひごき聞え給はんさなぢな
き御答も聞えかばし侍るべしこん年には吾妻へまうで給ふべきうちくにはおきても給ふさなんいのではかり給へげにかす
まの御おくり物いさ器なう珠にかへしるの料紙は折柄わきてめで侍るなほまう登りて御給やも聞えつきぬ御名残も思ひ給
ふるなきのふ今日にひさきもりらこに至りて問かばし事ごも何くれさいさこしければ又の御面合ははかり難しいよ
つきぬ思ひになんいもの君へもくれくよきに聞え賜ひてよ

東路のふしの芝山まへに馴ても思ふわかれするかもさこえ給ふ御歌の奈けなきに答へまつるのみなり何事も限りある筆
にはえつくしやらすなん完壁遠文
集覽

ふみ月つこもりつ

う 万 伎

上田のぬしこたへまいる

此の文を以て見れば、美樹秋成は師弟の如くあらで、朋友の如し、彼れ深く其の師に鍾愛せられ、
其の師深く彼れの俊才を嘉したること知るべきなり。この前期三十八年間の生活は如何なりしか。
思ふに當時の秋成は歌城の言の如く、放蕩不羈なるものなりしならん、時としては大言を吐き、
又時としては妓樓に夢を結びて、曉を知らざりしならん。彼れ眞に紅を剪り、紫を裁することを厭
ひしならば、又何ぞ『妾形氣』『癖物語』を著して今日の名聲を得るに至らんや。

音男ありけりならぬ狂言をかりにもてかしがりけり其なたとて云はば儲者たちの經濟りきみ國學者の上古のわれ(國學

者とは神道者に三筋毛の多いまでの學業なり。こは秋成の自註なりいたく宜長え歌よみの万葉ぐるひ俗めたまの座禪觀法二
代金持の縁者のみぞ世になし人の先祖よばり小僧家住の茶の湯よまるひ又醫者の漢魏見識もおな事ながら仲景孫思邈東
垣丹溪も痛をますなふ入はらひそるげん爺も嶺が餅になほすが正銘それをおきては引經運氣論も病因隨症も筆端勢正は
水太刀の芝居事いづれも其まるしを見ずには信下られぬ事ごもなり昔人はかくいりたりわればしこなんりきみあひけ
る蘭釋

この一段歌城は「當先寫出作者胸中之事語々駭人言々驚人」と評したり。實にこは作者の思む所
のものを寫せりとは云へ、老後より願れば、幼少の秋成は、多少この境遇に立ち、かくいちびり
たるわれがしこぞなんりきみあひける」ものなりけらし。

おほいたのおやまはうちの息子をむつま下まの娘なごはかへりて申あしく心あはぬものにてよき絹なごをなしてみて若せ下ま
するな息子はけつくあるが中によきをえり出してはれの夜の面目をおこさするほごにおやまのかたよりいつし思ひつくも
のなり薄染など逢者に打ぬらむさいふおやま打みて粹さおほして黒かりたまへさいまへかたなりこのむすこさんに限
らすなへて今の息子さんたちは色事心に入れ賜はずおほ。たは茶の湯俳諧學文とやらいふ事をこり賜ひて人形淨瑠璃ものま
ねなご古風なちそびし賜へるはあらすま答へけるさなり

こは蓋し娼家に生まれし子の、尤もよく經見したるまこと譚ならん。

又歌舞伎役者は五十にして天命を知り舞臺をひくを見識さしおやま鬚子は四十を猶老たりせす花やかがるになん下
あるは自賭鬚子などかくし妻さなりていふかひなく跡次の奥住居にまきはきの朝ゆふのいさまに鏡湯髪ゆひごころに來ては
かなまわが音語なごしつゝあな太平やなど後ゆびさるゝをもえしらでなんあるいさ淺まし

是二例なり秋成遊里の事情に委しきは『くせ物語』六十一、六十二より六十三ページにかけて見よ

こゝの塵敷の娘衣女郎の手くたも佛の方便を蒙らるゝに罵れば誠に名うてのすつばの皮背中はげし藝子や
 云ひつゝ、壯時の夢を貪り、數度花柳の巷を徘徊せしなるべし。されば彼れ身の汚賤に居るを恥ぢ
 たれど、未だ全く其の縁を絶たざりしか。これ自由放肆にして詩人たる資格を損せざる所なり。
 されど汚賤に居るを恥ぢ、丈夫見の嘆を發せしが如きはいまだし。眞の詩人ならば、寧ろ此の言
 なきにしかず。詩人は詩のために詩を究め、天下を見るも詩的なれば、秋毫を見るも猶詩的なり。
 其の境遇に對して美感の伴はざるなし。故に能く國を忘れ、家を忘れ、已れを忘れて詩を作るに
 至る何ぞ「奇功を立て、國恩に報ずべし」など云ふの暇あらんや。果してこれを秋成の口より出
 でしものとすれば、彼れ未だ幼稚なりし故ならん云はずとすれば、幾許子以下の士已れを以て秋成
 をはかりし言なり。余を以て見れば、秋成はだゞ一時の腹立まされ、意の向かふまゝに家什を賣
 りて書籍に替へ、又一時情の移りゆくまゝに書籍を賣りて妓を買ひしこともあめり。

むかし色好の賢き男ありけりかれはつはれぬおやまはわれに身をうつさしつれにほこりていひけりまはいへど相應に
 れもつひけりまはりこゝろ人にすぐれていとするごとくありければ達こゝの娘はもてわつらいにけり

これ尤もよく願れたるものに非ざるか。余初め秋成の家什を鬻ぎ書籍に換へ、自ら丈夫見の嘆を
 發せしを見て、竊に勤勉素直にして遊惰ならざる如く思ひ、歌城を以て其の人を誤れるの甚しき
 ものとしき。善く遊廓の内部を知れるは身こゝに生れたるが故なり、彼れ茶人なり、茶を好むも
 の、自ら酒を好むものと異なり。必ず幼より茶を好み「小借家住の茶の湯ふるまひ」をして樂めり

しならん。若し屢、妓樓を訪ひ飲酒三昧に世を送りしものならば、年若いて幽樓の域に處し、自ら
 酒もてやるべきに、酒を好まざるより遂に茶もて戀を慰めしものならん。果して幼より酒を好ま
 ずば、何すれど茶を酌みて妓樓に夢を貪るを得んや。秋成は性磊落なりとは云へ、放蕩無頼の徒
 にあらざ思ひき。されどつらくに考ふれば、こは皮相の見たるを免れず、當時の遊廓は今日の
 如くあらで、別の遊戯を樂しましむるものなりきとなん。凡そ天下に生とし生けるもの、一たび
 戀愛の美感に接し、此の力の著く襲ひ來たる時は、已れを忘れ、他を忘れ、天下の物を忘るゝに
 至るものなり。この美感は諸の新なる物を作りて、自然を緋縮緬の色もて包み、朝な夕なに花を
 降らし、微なる物音にも心を躍らしめ、微少なる事物にも記憶の興なる蕪底を亂さしむ、戀人來
 たれば凡て眼となり、戀人去れば其の身全く空しき思ぞする。秋成の如き放肆なる少年にして、
 遊廓に親あり族あるもの、嘗て一度も之れを顧ざるの理あらんや。彼れ既に一度至れば其の時こ
 そ青年の情緒世界を改造し、家什を賣りし時の人は別界に去り、初めて万物を見て、意味あり、
 生命あり、自然も亦意識あるものとなるなれ。梢に囀る諸鳥は、其の心理に徹し、あらゆる響は
 皆音樂となり、仰げば天上の星さながら眼を開きて彼れを眺むる如く、伏せば地上の花笑うて彼
 れに對する如き際、彼れの風流氣と奇骨とを合し、インスピレ、シヨンを駈り前期の著述を爲さ
 べしなり。其の吾人をして恍惚の間に妙を感じ掌を拍つの追なく讀み去らしむるも、亦謂はれなき
 にあらざるなり。

然るに中期に移るの際、美樹に従ひて國學を受け、妻を得、子を設けなどして、自然浮氣は内氣に抑へられ、彼れの奇は又他の方向にのみ著く傾きしものに非ざるか。其の師京師に死し、妻を洛陽に失ふに及び、身も亦昔時の秋成に非ざるに至り、全く人物を異にするに至れるか。

第三章 前期の著書

秋成の著書にして前期に顯れたるものは、小説なり。彼れ何時頃より筆を執り初めしか、今日世に傳はれるもの、『諸藝世間聞耳猿』『世間妾形氣』及び『雨月物語』あるのみ。されど猶數篇を物したりけむ。『作者部類』に曰はく

上田秋成が諸藝本は雨月物語のみならず春雨物語てふもの十卷あり。こも穢き物語にあらず一回毎に世界は異にして十回あり此書は印行せず傳説の本も世に稀なれば已れは其書ありとも知らざりしに桂樹子いゆる年作者の自筆の巻物十卷を見たり其後類本を見ず當年諸書に寫されて藏書す予爲にいへりこも又得難き珍書なればいひて借讀せまくほりすよりて錄して同好に示すのみ

其の他『雨夜物語』といふ作あり。余一日笠村翁を墨江の畔に訪ひ、これを聞く、翁曰はく我れ年來件の書を求むれども得ず、されど四方梅彦子柳亭種彦の門人にして當年八十有餘歲去年世を辭せりはこれを見たりとて其の筋を語られき。

こは雨ふりついで夜灯火のきたて、獨り文を繕くに前読のかたに鐘の音がすかに聞ゆるより耳聾てて近づきゆけば土の下にて鳴れるなりけりさてはいふがしと歸り燃もて來り掘上げいつ入定したりけん一人の老法師の息絶えすありて一心不亂に佛を念ふ居たるなれば救ひ出して浮世の月に心の限もなく互に物語る様を描けるものなりとぞ

されば今日全く傳はらざる書にもあらず、これだにあらば秋成の宗教に對する思想を窺ひ得べきにあはれ見るよしもなし。

余竊に思ふ、秋成の第一着に筆を執りしものは、『諸藝世間聞耳猿』に非ざるかと。今其の題號によりて判ずるも、春雨、雨夜の兩者は雨月後に成りしもの、如し。『聞耳猿』の序に

彼賢人の中間法度に偽りめきし眞は、たるも眞くまき虚言はつけれものこも釋迦の藏經莊子の南華經うそのまごの眞のうそでおもはくは我心より出て人の口にはりゆき翻となり馳なる其尾に喰つく世の噂を天に口なし婆娑のそしりはしりにもいはば猿のいましめをまもればこれ狙の指さしにあふまちは尻むらひの戯れ草を朝三暮四の筆まらに書聚めて風説を隨耳世間狙まよふ事は見猿の人の伽さもならむかし

とあれば、此の書は單に秋成の聞しし事を、當時流行の八文字屋風に綴りて、見猿人の伽とせしまでなり。全篇五卷より成り、一卷三章、各天地を異にす。明和三年梓に上りぬ、秋成三十五歳の時なりき。全年冬『世間妾形氣』世に行はる、これ殆ど同時に筆を執りしものなるべし。其の序に曰はく

八文字が草子其破自笑の戯作多かる中に近世俗間のありさまありさある儘のついでに嬉遊つて糸口引せめし傳授車の綱手にすかりて遊賣のその盤形氣書出れば親爺の音聲氣は其中に求めたりと見ゆ石磨齋に親の財を空し惡所かよひに家廟を失ふ息子の我まゝ形氣やむ時ぞなきそれ諫めし忠心の手代形氣母おや形氣の愛憐もよむにさこそ感あり又小娘の婚指までこがれまいくせの倫ならい若菜の歌舞妓子に思はくよするまで借もかしこや狸老が筆談眞似てまれんか融にまれられず荒にし我野にいっしつが浮浪子の中宿となりて長き代のかたみにはあらでせりしめもなき世説なればされば夜食の腹ふくるよこ書

よりつひて七つの鐘開く夜はあまた、ひそれが中にあるはなくて當世でかげもの、厚薄の情おかしきありはかなきあり編て冊とし故によりて妾形氣を駭くされば二若者が文理は五まきに猶名殘ぞおしまる其つやこまかぞふればはたに餘り撰めば一つとして探ものなし偶なぐさむ一ふしほきても八文字が精細これを除き是を棄ててそのものして十種に充しめ四巻に己の自笑をしれる人は嘲みなん自笑を知らざる人は見すも笑へしききに明和丙戌の冬

和氏譯太郎述ぶ

以上兩書は、一時非常に流行を極めたりし形氣熱に犯され知らず／＼を愛翫するあまり、筆を執りしものなるか。當時既に自笑其碩没して文界寂然たる時なれば、此の書の如き歡迎せられざるべからざるに、世人皆形氣ものとし云へば、八文字舎に譲りて願るものなかりき。此の書若し非常にもてはやされたる者ならば、秋成も此の類の著に縁を絶たざるべく、書買亦迫りて之を求むべきに、其の刊を増さず、其の名高からざるを以て見れば、さのみ賣れしものとも思はれず。されば『妾形氣』の巻尾に「世間猿諸國廻船近刊」の廣告あるも、或は未だ筆を執らずして止めしものならんか。此の人にして此の類の著書多からしめば、文界に一奇觀を呈せしならんに惜むべし。今『妾形氣』を以て自笑其碩の著に比するに、人事の細微を描出するは彼れの優れるに如かずと雖も、華文の長技は此れにあり、蓋し秋成の思想に富み學才に秀でたるは、彼等の及ぶべき所に非ず。されど未だ數度人事を寫しことあらざるなり、寧ろ人事を其の儘活寫するより空想を描くに長じ、實存せし人物すらも猶現實界の人としてよりは空想界の者として畫きたり。『妾形氣』の

如き、極めて題を卑近に取りながら、猶浦島子の玉手箱を出だして男妾を作りたり。又花園の事を記して

男の口がしこい男めさうそのまごにたたらされて身につく程の可愛さもつまらぬ末のどし合中、もし知れたらばあぶな物愛なすつかりぬけて出ていくの里の住居でも女夫といふてくらしたのしきはどうあらふさせき切た男の園花園中首尾よしとしらせ目づかいに心おち付て其日の暮るを待たがれ裏門より忍び出手に手を取りて西東とこか落付所ぞま外まら露の此所育ちたのみも夢の栗田口蹴上の水にぬれた同士男戀のうはもり山科に兼てあるべに借り置たる露草の一寸家軒端も店もすか

んびん中然れども愛は東海道のみしくちにて往來繁き逢坂の關路なれば本錢入らずの茶店を出しそなたもお園と名を替させ我等が少しの給心に所からの大津繪畫で世渡りの手段かれてあり心おこすな

『雨月物語』

馬琴其の愛讀せし書關根正の後に書して曰はく

この書は京師なる國學者上田餘齋がいさわかかりし時明和五年戊子の春三月歳れに綴りなせしものなり餘齋は浪華の市人な

と。『出石軒記』には明和五年春四月『雨月物語』を著し、越えて十三年安永五年夏某月始めて世に梓行すとありきと覺ゆれど、此の間十三年を経しものに非ざるは明なり。蓋し此書の成りしは三

十六歳の時にして、翌三十七歳父を失ひ自筆といふに據る、三十八歳居を失ひ、間もなく子を失ひ、妻も亦他界の鬼となりぬ、されば『雨月物語』は秋成平和時代の最後の著書ならんか、すなはち小説時代期の終局期に成りしものなり。されば其の年より云ふも、其の作よりいふも、老成の期なるべきに、馬琴は何の據所ありて之を「いとわかしくし時物せしもの」と云ひ『小説史稿』には「雨月の如きは若かりし時の筆すさみなり」と云へるにや。

『雨月物語』は秋成が名作なり、全篇五卷、九章より成る。「白峯」、「菊花の約」、「淺茅が宿」、「夢應の鯉魚」、「佛法僧」、「吉備津の笠」、「蛇性の淫」、「青頭巾」、及び「貧福論」是れなり。人或は曰はく、こは『支那小説』の翻譯にあらずやと、恐らくは然らん、たゞし文章流麗にして漢文句調の間に妙致あるは近路行者都賀六藏名は庭鐘字は公聲大江山人又大江流夫と云ふ千里浪子も亦其別號なるべしの『英草紙』『繁々夜話』に倣へるや明なり。後に京傳馬琴等の物せし繪入讀本の文、秋成に負ふ所趣からざるべし。

卷中の最秀を「白峯」の一節とす、こは西行の『撰集抄』に得たる思想を一層詩的に表現せるものとすべし。西行嘗て諸國を遍歴し白峯に至りて懐古の情に堪へず、あはれ崇徳院の空しく此の土に消えさせ給ひしを傷み、悲悼痛嘆して滿腔の感慨を吐露しぬ、さて秋成は直に新院の靈を現出し來て相問答せさせ一篇の好文章をなせり。例へば、

過し仁安の比四國はるく修行つまつり侍りし次に讃州みを取の林といふ所に暫らく住侍りき撰集抄
と云へるをば『雨月物語』には

仁安三年の秋はあしがちる難波を経て須磨明石の浦ふく風を身にしめつと行く讃州みなきがさいふに暫らく鐘つづをきとむと記せり、翻案の本事は此の例也。試に『撰集抄』の一節を左に掲ぐべし。

深山邊のなるの葉にて庵新びてつま木こりたく山中のけしき花の木すまよはる風難さへてかよふなるよもきのものつら日終にあはれならずさいふ事なし長夜のあが月さひたる猿の聲を聞にそゝるにはらわたを斷侍りかゝる住家は後の世の爲さしも侍られぬも心そゝるにすみて覺ゆるにこそかくても侍るべかりしに淨世の中には思なきやめと思侍りしかば立はなれんと侍りし程に新院の御聲所をおがみ奉らんさて白峯と云所に尋ね侍りしに松の一村しけるはまりにくきぬきしまはしたり是ならん御聲にやま今更かきくちされて物も覺えずまのあたり見奉りし事ぞかし清涼紫宸の間にやすみ給て百官にはつかれさせ後宮後房のうてなには三千の美樂のかんざしあざやかにて御まなとりにかゝらんとのみしあはせ給ひしぞかし萬機のまつりこきか學に握らせ給ふのみにあらす春は花の宴を專にし秋は月の前の興つきせ侍りき思ひきや今つゝるべしこはわけてもはかなきや他國邊土の岸のおどろのしたにくち給ふべしこは貝鐘の聲もせず法華三昧つさむる僧一人もなき所に唯峯の松風のほげしきのみにて鳥たにもかよはぬありさま見奉るにそゝるに涙を落し侍りき始あるものは終ありこは聞侍りしこも未かゝるためしをば承り侍らす去ば思なきもまよきは此世なり一天の君萬衆のあるもこのごさくの苦みを離れましまし侍られればせつりもまゆだもかはらす宮も露屋も共にはてしなきものなれば高位も願はしきにあらず我等もいくたびか彼國王さもなり給ひけんなれども濁生即忘して凡て覺え侍らす唯行てままりはつべき佛果圓滿の位のみぞ味しく侍る死にも角にも思ひつゝくるまゝに泪のもれいで侍りしかば

「よしや君昔の玉の床さてもかゝらん後ばなにいかはせん此歌白峯の終りさうちながめられ侍りき盛衰は今に始めぬわざなれども殊更に驚かれぬるに侍りさても過ぬる保元の初年秋七月の比なひ鳥羽の法皇はかなくならせ給しかば二天村雲迷て花の都くれふたがり侍りて合議のたぐひうつゝ心も侍すなげき身の上のみ積りぬる山地ごもにておはしまし、中に僅に十日の内にな上上皇の御國争ひありて上を下にうつゝ天をひびがし地をうごかす迄亂れ戦ひ侍りて夕に及で大炊殿に火かとりて黒

煙巻はへりに御方は軍時にのり新院の御方の軍破れて上皇治の左府御馬に召ていつちもなく落させ給しを兵者追懸奉りていま、も恐奉らす射まいらせ侍りしを見たてまつりしによしなき都に出て返て心うく侍りて後にこそ承りしが新院はある山の中より歩出し奉て仁和寺へうつらせ給治左府は矢に當らせ給て御命終らせ給れば奈良の京、殿者の野の五三味に土葬し奉りけるを勅使たつて死骸實檢の爲に掘おこし奉りしにあらはれ六借世の中かな誰か知らざる現世はかゝるべしは茲にあやうくは、なき身もちてまつりかほにのみ侍りてむなく明暮過て無常の鬼にさらるゝ時聲をあけて叫べども叶はずして惡趣にのみ経めぐり侍らんはいさ悲しがるべし盛衰もなく無常も離れ侍らん世なりとも佛の位目出度と聞奉らばなきか願はざるべき況や盛衰甚しきなや無常速なるなや唯心をこづめて往事を思ひ給へすこしも夢にやかはり侍らす悦も盛も衰も皆備のまへのかま屋なるべし

此れを以てかの「白峯」に比すれば其の異同歴々たるべし。さて秋成のこの文は西行と近路行者とより生れ、更に一轉して馬琴の文に入りぬ『出版月評』に學海翁云

爲朝嗣白峯陵一節、不與前節相關、世源凄咽一種異樣文字、不是飄然山奇使人噴噀的文字、正是幽渺清迥使讀者低回玩不能置的文字、此評爲妥當、雖然其結構其文字、實皆是學雨月者、唯其妙于換骨奪胎之術、是以功昇讀者、使不得窺其斧鑿之痕、但取彼是並誦、細咀嚼其意味則雖馬琴文字非不巧妙、到底不免爲東施之鑿邯鄲之步矣、學海翁評語宜移之置雨月卷上、不得與曲亭馬琴子爲其名譽實稱也

と、げに『弓張月』を讀むもの誰れか其の文字の功妙韻案以外に出で、滄涼凄咽一種異様の致あるを驚かざらん、されど其の源の『雨月』にあるを思へば名譽は幾分か秋成の分取し得る所なるべし。『月評』にまた「翁又云

爲朝嗣白峯陵一節結構自太平記雨朝怨靈集會六本杉一段來、唯彼所說虛妄誕謔論亦極淺理、文章不見甚麼精采、此所論的

切痛快皆匿理義、然以予見之其議論之的切痛快一層深一層亦雨月上弓張月一等矣、馬琴實讀雨月突然卒不欲爲秋成之王葬也、故其叙爲朝既到新院閣下處忽點出月光射廟柱、挿入雨月所揭西行國詩、暗示其粉本所在、用意周到、後人之襲前人者宜當如斯、馬琴不助爲家」出版月評 日本學文

と。馬琴の秋成を景慕し『雨月物語』を見て其の妙に驚きしは、彼れ既に愛讀の書の巻尾に自筆もて題せる言を見るも明なり。なまでものわざながら、少しく『弓張月』の『雨月物語』のものと比べんに

とあるは『雨月』の

百石城や百の官は紫の袖なつらね朝政問と召ける十善の君もして過世の惡業は脱たまはず青冪苦海にして白楊風に戦ぎ旅魂幽靈今何所に呻吟たまふやらんげに人界の富貴は夢の中なる快樂にて其妻子珍寶及王位も身死しては伴侶ならずさればこそ三界の火宅を出て永く九品の淨刹に至らん事なほ容易にあらざり、これを見彼を思ふにも我身の果は致ならず不覺の涙ぞ先ちけり

とあるは『雨月』の

今更がきくらされて物も覺えずのあたり見奉りし事ぞ、清涼紫宸の間にやすみし給て百官にはつかれさせたまとあるを敷衍せるなり。三昧子の馬琴が其の剽竊せるを隠さんとして折しもさし入るゝ月光に御廟の柱を向上ば二首の歌を書きたり

とて其の源の『雨月』あるを蔽ひ、且つ暗に之れを示して

松山の浪に流れてこし船のやがて空しくなりけるかな

と云へるは馬琴の馬琴たる所にして『雨月』の剽竊家漢朝の王莽なる名を免れたるなりと云ひ、且此の歌を評して

此和歌馬琴則爲西行歌、加贈歌之松山用新院等序詞、然其語勢、其神情自是新院之詠、不得兼爲西行所詠

と云はれたれど、これ或は馬琴の秋成に據れるをのみ見て、秋成の西行に負ふ所あるを忘れたる評にあらじか。若しこれを以て馬琴を責めば、彼れ必ず答へて云はん、余は秋成に據りしに非ず余と秋成と共に『撰集抄』に據りし也と。今『西行物語』を見るに

(上栗) 賤岐の松山といふ所につきてはたらせ給ける所をさふにあさもなかりければ

「松山の浪に流れてこし船のやがて空しくなりけるかな」昔は一天四海をなびかし百官萬衆にあふがれ云々

といふ文あり、さればこれ明に西行の詠する所ならずや。いづれにもせよ、此の般の貸借豈必しも深く論ずるに足らんや。要は換骨脱胎の妙にあり、若し能く踏襲する材料と同化してそを全く自家養理のものとなすを得、人をして痕跡を認めざらしめば、すなはち可ならん。サイン、ブーヴ曰はずや、大創掇家大發明家とも稱すべき人は最もよく模倣する者の謂なりと。

『くせもののがたり』時代より云へば中期に成りしものと思はるれど物語の續きなるとして茲に掲ぐ

『痴癡談』は秋成の性行の一斑を見るに足らんものか、蓋し磊落、豪放、才氣奔逸、事物に拘泥せざ

る氣概、其の紙面に溢れたればなり。

秋成嘗て『伊勢物語』を愛讀し、晩年これが『古意校』を作り『よしやあしや』を物しき、而してこの

『くせ物語』の序文に

この物語は朱塗のくつわがぬりをけつの中にへしこめてありしなり作者はたれともまるとれど傳へていふは在郷の中將と云ふにためて田舎道場の新發意のがやつし腹してたまぐるものか文辭の京めかせるさ故事を雅俗に摘きたれるをこれやそれと問のつよての當柄なるかしら書して洒落社中にひけらかさんすされば吾妻に京傳あり、一に都のやば傳がまはらぬ筆は、いすの野の若紫のすり、木ぢやまて

とあるより見るも、其の本文より考ふるも、明に『伊勢物語』に據りしものなり。又別に據れる所あり、烏丸光廣卿の『にせ物語』是れなり。而して『にせ物語』は『伊勢物語』に倣ひしもの也、されば此書の旨は『伊勢物語』を讀みて後にこそ一入なるべけれ。俗語の間に「なん」「けり」「昔男ありけり」など近時文を古時文と交へ用ひたるももしろし。此書何れの年に成りしか、卷中に年代を記さざれば明ならぬと、「吾妻に京傳あり」と云へるより見れば『妾形氣』を物志し時代はとく過ぎて京傳全盛の時なりしか。案ずるに此書本居宣長との爭論ありて後心平なる能はず、竊に己が性の癖せるを觀じて温厚なる宣長を思ひはかり、殊更に作せしものにあらざや。たゞしこは予が一己の臆測のみ。いづれにもせよ、こは中期の末政の作なるべく、後期の作にはあらじ、後期の作ならば村瀬栲亭の序にいひ及ぶべきに、其のこと絶えてなし。さもあれ茲に竹窓といふ人あり、「上田翁の御もとへ参」る書に

御うはさの辨物語律借にて寛々拜見いたし候天王寺の法師かくすしの條物産者人の類盛風候香家のくたり其人々を見るやうにてあつくりつへし見申候誠には人には一くせさて才有人を才を相手さしわるかうものはわるかうを言たをさんとするがくせにていづれ其才其くせを待々きりにはしがつたて夫を捨て、仕舞こもく場を拵らゆる物なれば此本の作も定めて其こもく場なるべし其種につかはれたる人も定て才子かわるかう者なるべし是を面白き見る人も亦痴人にはあらざるべしわれらも其中間入に一本を寫して原本を御返上申上候法輪味増一曲新地より買候其御口へ御あがり可被下候し、

とあり。竹窓とは果して何人ぞ。(撰者曰く福笑門子はこれより竹窓は竹内玄々一なる由を辨じ、玄々一が著『俳家奇人傳』に論及したれども事實に相違あれば省けり)

秋成はまた多少俳諧をも解せしなるべし、『雨月物語』に

つれのたのしみする俳諧風の十七首をまばしうちのたふきていひ出ける

鳥の音も秘密の山のまげみかな

旅観より出て御燈の光りに昏つけ今一聲もがなき耳をかたむくる

は、或は秋成みづからにあらすや。予初め『くせ物語』を讀みて「俳諧師と博奕うちの宿するものはなきぞといふ」といふ一節に至りし時、こは國學者の俳諧師を嘲るなりと思ひしに、さにあらず、自ら好む道を自ら笑ひて人を笑はしめ、まかも之を俳諧師に送りて笑はしめしなりけり。宜なり法輪味増を送り其御口へ召し上れとて返えしや。此れにも秋成の氣象見えたり。『俳家奇人談』續篇に無腸處士の名あり

無腸處士は下め醫を業として難波に住めり其人となり名利にうきく當世にたがへり自らいふ外剛にして内柔なるこれ我性な

あつくりつへし見申候誠には人には一くせさて才有人を才を相手さしわるかうものはわるかうを言たをさんとするがくせにていづれ其才其くせを待々きりにはしがつたて夫を捨て、仕舞こもく場を拵らゆる物なれば此本の作も定めて其こもく場なるべし其種につかはれたる人も定て才子かわるかう者なるべし是を面白き見る人も亦痴人にはあらざるべしわれらも其中間入に一本を寫して原本を御返上申上候法輪味増一曲新地より買候其御口へ御あがり可被下候し、

りき因て更に無腸の號をなすといふ俳諧は茶因の流を汲といへども又蕪翁の風を慕ふ一とせ柴陌を出て田野に幽棲するごとく月に遊ぶ己が世はありみなし無

其落のくのごとく深くやまごの國ふりに耽り古き香ども探り見す云ふことなし竊に俳士の無稽なる運歌の抄物のみを據とし性に膠し舟に刻める事の執きを愛ひて也哉抄を著しテニオハの梗概をふるす其概を同ふる者は疑はずばあるべからす後代の幽隱なるかな

此は秋成の上ならん、されど予未だ『也哉抄』の著あるを聞かず、且思へらく、總じて外剛なる人は内柔、内剛なるもの却りて外柔、内外の柔と剛とは相隔て、消長する如き趣あるが常なれど、秋成の如きは内外共に奔馬の性を備へたるものに非ざるかと、『よしやあしや』の結尾に左の一節あり、曰はく

凡物學びて才ある人の時にあはぬは我有一賢奴といひしら玉はよし知らずさも我し知ればさよみ或は香は憤りになるとも云やまごもろこし人の心は異ならぬものなり彼處にては演義小説といひこゝには物語さよよそれ作り出る人の心は身幸ひなきを歎くより世をもいきどほりては昔を戀しのひ或は世の中のさく花のほふが如く榮ゆくを見てはやううつろひなん事をおもひあるは時めく人の未いかならんを私ながらもあざみ又ためしなき歸を願ふも遂には玉手匣のむなしきをまこと得難き寶なしも求めあるく痴ものうへを愧かしむにも唯今の世の聞えをはかりて昔々の跡なし言に、何の罪なげなる物がたりて書つくるなんが、るふみの心しらひなりけるこのふみ物語も在五中將ならぬ在五物がたりしてそれにかこつけつゝ世の機のあまりにたはけたるをいひそしれるにも猶己が思ふかたはしたにおろりて打いづべからぬにはふみの終に我に等しき人なきてふ打ほこりたるなげきせしこそおのが心をもなぐさめ且は命養ふさえ人のしほざなれど死ゆそはよしあしや、いかな言もこさわらめらばえらびさちせ賜へと云

彼れは小説を極めて狹義に解し、小説はなべて作者の感慨によりて成れるものとせりき、隨うて彼れが『くせもの語』も、此の主意に成りたり。されば又其の『伊勢物語』を見るや、「在五中將ならぬ在五物がたりしてそれにかこつけつゝ世の様のあまりにたはけたるをいひそしれるにも猶己が思ふかたはし」を顯し「終に我に等しき人なきてふ打ほこりたるなげきせしてそ己が心をもなぐさめ且は命養ふさある人のしわざなれ」と評したり。されば又『くせ物語』を作り出る人の心は身幸ひなきを歎くより世をもいきどほりては昔を戀しのび或は世の中さく花の香ふが如く榮ゆくを見てはやうつろひなん事をちもひあるは時めく人の末いかならんを私ながらも推しはかるに外ならず。彼の作の初に曰はく

上つづからは痼症ののるゝを他人からはわるくせも氣まゝ病もなづけたりさてそのしれる人も又此辭なきにはあらねば人のくせの姿となりて高きもいやしきも都も厭もあまねくいひはやす瀬辭談を辯物語ともよめばよめかしきのふもむかしきの間もむかしきつひ跡の月去年の大むかし十世はさやのさつこのむかしまでをたりつゝけて冊子めくものさばなりけり

と。以て彼の作の自家の實歴に基く所感からざるを推するに足るべし。殊に巻尾の一節の如きは秋成自ら出で、物語を襟見えてあもしろし。

昔深草の里に世を捨てて住家もさめて隠れたる人ありけりまばしやまされるさおもふにもはや四世五世せばかりになりぬ竊に思ふに秋成は伏見に四五年の星霜を經しに非ざるか、これ附會の説に似たれど、この山中に

て奇石を得て愛翫し、履脱の石にしきと云ふことを聞ゆればなり。

都なつかしき折くはそなたの空をのみ眺めてありけりいさまがちな鷹のまきには桃のみ友さして打墜れる夢のうちに庭のこすゑに遊ぶ小島ものさへつる中にこまじりの舌はやなるが人のものいふにかはらでひまりこするは春毎に此のいほに來てあそぶに、のあるは何なわたらむにするともなきいたつら人なりかくも世に住むかひありやいさにくむべきものなりといふ下枝にあそぶそひめこれを聞てされば、のあるはもさ都の人なるが生れつきて心せばく世をわたらむとすればおひかりの恐ろしく人は心のひるきまゝにあしきさいふこさもいつはりも世の害にだにならぬこさはたくましくしてなすまゝなるをそれらを見聞たびこに打もなげき或はいかりなごもしつゝ又奪よめば昔のみまのぼしくして今の世をうさみ藤に遊べば古き世の人は上手も下手も心高しとあふき今のまなのつけをさげしみて樂しまぬにより年月徒らにくらすなり世にあはれむべきものなりと答ふ

あはれ、こは秋成自ら駒王となり、うそ姫となりて、己を歌ひ、宣長を歌ひ、世を憤り、天下冀北の野に未だ一人の伯樂なきをうらめる文に非ざるか。

駒王きて、おちくそわらひさればこそ世のおこりのあさましの心さまなれさいふうそ姫曰く主は昔によきころも身にまよふ尋なくあまきを食はず紙のふすま紙の帳に事足りて何事にも餘を守りけにておこれるを見ずと駒王曰く我おこれるといふはさるこむわりに非ず

と獨りこの家のあるじを以て任じ自評を試みたり。蓋し秋成は

瀬辭のやまひなつらしてえ養はぬおろがさより我をたふさしと思ひあがめれど世の人はみなにこれるものとす心寄のひとなり

秋成の我の強き、この剛情男我慢男の

おもふにかなふ世も人もいにしへよりあることなし
しかで自ら己を枉げて世に媚び人に諛はんや。

漢士大和の香もにあがすをしふるも世の人の直からずおほかたは倭けのみゆくをなげきてに非ずや其ことわりをおしいた
きてもそのをなしへのまゝにおこなふ人はあらぬげなり(孔夫子さへ世におしたてられて行ふ事かたきなり)あるトもこれ
がたぐひなるへし

と云へるに至りて、己れを孔子の世に容れられざるに比し、詩人の一世に卓絶せるを示せり。遂
に

かしこき人も世におしたてられては行へど猶かひなきものか

とて他をうらむことなく、従容自適して精神を養ひ

かんへき賦もくせものたりとも何ともかきもあらうつゝなの世がたりや

など云ひすてゝみづから慰めたる、皆自家の感慨也、一氣呵成の文也。中に一節あり、曰はく

むかしみやがたに物語いとをかしうかく人ありけりもよりさえある人なりければひたすらに興あらむとて筆はさかしま
にすきてうはやり口もくひもてつらぬるほどに讀むにいとあわたしくこゝろいそがれてちよんがれなきを聞くやうにな
んありける

この「物語いとをかしく」「さえある人」とは豈昔男ならで今現にこの文を草せる夫子に非ざるを知
らんや。更に天下の學者を愚弄して曰はく

昔鳥獸草木のたぐひの世に見知らぬをばあまれよく見分つ師ありけり、は唐土にては何さいふを此國にてはしかよぶ物な
りなごいさくはしかりけりされまれくには辨へ難き物もあるにや、は何の類なりとも答へら、を或人問きて何の類の類

の字は祇園町の瀬分の分の字にひさしくいさまきはしきなんいひける

と、其の漫罵冷罵の才を見るべし。

第四章 秋成の文

眞詩才ありて直に詩材に接して奥妙の靈火を捉ふるもの、所謂眞詩人の作は、假令其の語格文法
正しからず文致に幾分の疵瑕あるも猶其の妙を失ふことなし。然れどもあまりに詩形の不具なる
は詩思を發揮するの障害となる。秋成の文破格をもつて知らる。歌城「くせ物語」につきてはら

此香文章は猶いまだしくテニチハの誤り語格のたかひもまゝ見ゆめれど作意の高尙なる其氣象は賞すべし世の歌筆面此香を
觀て睡を覺すべし

此文首尾照應せず文脈不連且テニチハ語格の誤数々なるをいさゝかづゝ引直したれど猶かくてよしといふにあらすなきか
な此作者の才氣は有ながら不文なるは其性情惰にて學問に粗疎なる故なるべし誣惑なる人は刻苦して學ぶもかゝる文は
尙事能はず秀才なる人は勉めて學ばざる故にかゝる文は書くさいふも一篇の始末精細なる能はず實に兩全の得難き可歎々々

と。蓋し秋成は思想富麗、時に靈妙人を驚かすに足るものありと雖も、之を語格文法家の前に致
す時は、全篇恐らくは完膚なきに至りぬべし、まかも其の形容に巧なる、人物をして讀者の眼前
に髣髴たらしめ、益々韵味していよゝ妙なるを感ぜしむ。彼れの感情は敏捷なり、其の想像は
奇警なり、而して其の聲調は雄大高雅なり。あはれ秋成は果して歌城の言の如く、學問に粗疎に
して勉めて學ばざりしか。彼れ「才氣は有ながら不文」なりしか。「白峯」の一節を讀めるもの、誰